

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

マヤ文字を解く

メタデータ	言語: ja 出版者: 公開日: 2015-03-23 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 八杉, 佳穂 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/5555

八杉佳穂著

マヤ文字を解く



中公新書

644



中公新書 644

八杉佳穂著
マヤ文字を解く

中央公論社刊

装帧 白井晟一

まえがき

マヤ文明というのは、不思議な文明である。どうして熱帯雨林の暮しにくい環境のなかで、マヤ文明は栄えなければならなかったのか。どうして新大陸で、マヤだけが発達した文字体系をもちえたのか。どうして人力しかない石器時代の素朴な技術で美しい彫刻や建築をもつ都市を築き、進んだ科学を生みだしたのか。科学を発達させ、美しい芸術作品を生み、新大陸の他の文明の到達しえない高みにまで達したマヤ文明が、なぜ滅ぶことになったのか。なぜ、どうして、という問いを發したなら、それこそきりがない。

内容の不思議さに加え、研究者にも風変わりな人が多かった。一〇七歳で女性にみとれていて卒中にかかり死んだというワルデックをはじめ、じつに興味深い人々が、マヤ文明にとりつかれている。それらの人々の跡をたどるだけでもたのしい。

不思議といえば、新大陸でもっとも重要だと思われるマヤ文明が、日本では本格的に研究されなかったこともその一つにあげられる。

マヤ文明に関する謎はつきることがない。マヤと聞いただけで神秘的な気分にはさえる。しか

し謎の多くは、いま、徐々に解明されつつある。もはや不思議な、神秘的な文明とはいわれなくなっている。

マヤ文明は現在、考古学や民族学、言語学など、いろいろな角度から研究されている。とくにこの一〇年あまりのマヤ学の進歩には、目をみはるものがある。それゆえそれらの成果を総合してマヤ文明を述べることは、現在の日本では必要なことだと思う。だがもう一つ、私は、文字そのものについても書かれる必要があると思っている。それは、マヤ文明の最大の特徴である文字、その表わす暦など、多くの人々に興味もたれているにもかかわらず、それらを扱っているものがきわめて少ないからである。また誤解も多いように思うからである。しかしそれにもまして私
が本書を書こうと思った大きな理由は、私がマヤ文字の魅力にとりつかれたからである。考えてみれば、マヤ文字はマヤ文明を理解するための鍵であり、これほどマヤ文明を語る材料としてふさわしいものはない。いうまでもなくマヤ文字の解読は、文字の研究ばかりでなく、マヤ文明そのものの研究を必要とする、いわば総合学問であるマヤ学を前提とするのであるから、文字を扱うことで、少なからずマヤ文明というものを語ることもできそうである。

マヤ文字の解読には、解読できるかできないかの、ぎりぎりのヒントしかない。それゆえこれほどおもしろい謎解きはない。

解読の手がかりは、十六世紀にスペイン人のディエゴ・デ・ランダ神父の残したわずか三〇の

文字と暦の文字である。直接の手がかりはこれしかない。それを利用して解読しなければならぬのである。ところが幸いなことに、マヤ族が現在でも二五〇万人ほど、マヤ文明が栄えた地域とほぼ同地域に住んでいる。彼らに手がかりを求めることができる。とはいふものの彼らは、昔のものをほとんど失ってしまっている。それゆえ現代マヤ人の研究に解読の糸口をみつけることは、実の少ない、手間のかかるむずかしい仕事となる。さらにマヤ文字資料そのものも少ない。本書では、こうした少ないヒントをもとに、マヤ文字とはどんな文字なのか、文字からみたマヤ文明の研究、さらにはマヤ文明というものはどんなものかを考えてみようというのである。

まずはじめに、マヤ文明やマヤ文字の解読史などの一般的な概説をし、二章で、手がかりとなつた二六〇日暦と三六五日暦の文字やランダのアルファベットの解説をし、マヤ文字の性格を考へてみる。そして三章で数字を扱い、四章で長期暦や短期暦などの暦の説明をする。五章では、テキストを分析する上で必要な文字の説明を行なう。そして最後の六章でテキストの分析を試み、マヤ文字からみたマヤ社会を描いてみたいと思つている。

目次

まえがき

一章 マヤ文字の解読にむけて

歴史を語りはじめたマヤ文字　マヤ文明の栄えた土地
地　メソアメリカ文明のなかのマヤ文明　マヤ文字の登場　マヤ古典期　マヤの社会　マヤ文明
崩壊の謎　マヤ後古典期　マヤ文字の解読史
マヤ文字研究にむけて　テキストの形態　テキスト
トの読み順　文字の構成

3

二章 暦とアルファベット

ランダの『ユカタン事物記』　二六〇日暦　三六
五日暦　カレンダー・ラウンド　暦の文字の読み

43

方 『ポボル・プフ』から 急速に失われつつあるマヤの暦 ポプの文字 色の文字 セックの文字とマックの文字 ランダのアルファベット
マヤ文字の特徴 「誕生」を表わす文字

三章 数字

丸と棒で表わす方法 頭字体で表わす方法 幾何体で表わす方法 全身像で表わす方法

四章 時を記す方法

長期暦 イニシャル・シリーズ 月シリーズ
八一九日周期暦 セカンダリー・シリーズ 「期間の終り」を表わす文字 短期暦

五章 テキストの分析にむけて

一九六〇年に証明される 紋章文字の発見 碑文
にかくされていた歴史 即位の文字 女性標示文
字 征服に関する文字 結婚を表わす文字 親族に関する文字 儀式に関する文字 テキストの構造 テキストの分析の方法

第六章 テキストの分析

ピエドラス・ネグラス ヤシユチラン 年齢の間
題 王の名前 女性 パレンケ ティカル
ナランホ キリグアとコバン 横のつながり
王たちはなにを碑文に記したか

研究の手引 236

あとがき 237

マヤ文字を解く



キリグアの石碑K（側面）

図版出典

- 図 6、 図 7、 図 24、 図 27、 図 28、 図 31、 図 34、 図 36、 図 38、 図 39、 図 40、 図 41、 図 44、
図 45、 図 46、 図 47、 図 48、 図 49、 図 54、 図 56、 図 58、 J. E. S. Thompson, *Maya Hieroglyphic Writing: An Introduction*, University of Oklahoma Press, 1971 (1st ed. 1960) 46。

一章 マヤ文字の解読にむけて



グアテマラのマヤ族

歴史を語りはじめたマヤ文字

マヤ文字をはじめて見る人は、こうたずねるにちがいない。

「これは、いったいなんですか」

マヤ文字です、とこたえると、少し落ち着いてきて、

「へえー、これが文字ですか。絵みたいでとても文字にはみえないですね」

マヤ文字は、これはなに、と一瞬間い返さざるをえないほど、複雑怪奇な文字である。過度の装飾がほどこされ、まるで空白を恐れるかのように、石にぎっしり彫り刻まれている。ちょっとみただけでは、圧倒されてしまつて、なにかわからない。しかし心を落ち着けてよくみると、まるで絵のようで、みているだけで楽しくなってくる。人間や動物の顔をかたどった絵画的な文字や抽象化した幾何的な文字など、一つ一つが芸術作品をみるようである。あまりの美しさに、ほんとうに文字なのか疑問に思えてくるほどである。

マヤ文字はいったいなにを書き記したものののだろうか。長いあいだ、それは謎であった。暦の文字が碑文にはあふれていたので、流れゆく時に対するマヤ人の深遠なる哲学を記したものだと思われてきた。わけのわからない複雑な文字が、とてつもない時を刻んだ、神秘的な解読不能な文字とみられて、なんの不思議があるう。

しかし、マヤ文字はほんとうに解説不可能な文字なのだろうか。果てしない時の流れを刻んだ、神秘の文字なのだろうか。そうではない。マヤ文字は、もはや神秘の文字ではなくなった。その不思議な文字が、私たちに語り残したものを理解できるようになってきた。

マヤ文字は、表音文字、表語文字、表意文字の混合体系をもつ文字であった。意味を表わす意符と音を表わす音符からなる漢字とおなじような構成の文字もみつかっている。

古代マヤ社会もマヤ文字のおかげで明らかになってきた。たとえば、六八二年五月四日にマヤ世界の中心地ティカルで、「月の向い合わせのくし王」とあだ名されている通称A王が即位したことや、その王が娘を一一六日後に東のナランホという町へ嫁がせたこと、その彼女がナランホへやってきて五年後に、のちに「ひげリス王」となる子を生んだことなど、マヤの王朝はマヤ文字の解説から急速に理解されるようになってきた。

解説競争がはじまって一二〇年あまりたつ。だが、マヤ文字の性格がわかりはじめ、そのような歴史が解明されるようになったのは、ほんのここ二〇年あまりのことにはすぎない。それまでは長いあいだ、マヤのテキストには暦や天文のことしか記されていないと信じられていたのである。マヤ人は、時間の計算に没頭し、時の記録を石碑に残すことに夢中になった、なんとも不可思議な民族だと考えられていたのである。

たしかに碑文は暦の文字でいっぱいであった。正確に時を刻むのには莫大なエネルギーが費や

されたにちがいない。しかしマヤ人も、文字をもって来たほかの古代民族の例にもれず、自己を主張し、自己の歴史を石碑に刻んでいたのである。

古代の謎につつまれた社会の歴史が徐々に解明されはじめている。それも、暦や天文や数理しか刻まれていないと信じられていた碑文の研究から再構成された歴史である。謎を秘めた文字からみた歴史とは、そしてマヤ文明とは、いったいどんなものなのであろう。

マヤの歴史や古代マヤ人の生活を探る手がかりは、碑文や絵文書などの文字資料にある。しかしそれだけではない。考古学者は、百年以上にわたり、土器や石碑、神殿、住居址などを発掘し、編年作業や他文化との比較を行なってきた。美術史家は芸術様式の発達過程を研究し、言語学者は現代語との比較研究から古代語を再構成したり、部族の移動や言語間の関係を推測してきた。民族学者は現代マヤ人の文化を研究し、古代マヤの社会や経済組織の再構成の手がかりを求めた。こうした諸々の研究から、マヤ文明はどんな文明であったか解明されつつある。

しかし、マヤ文明にはいまだに多くの謎がある。それゆえいろいろな角度から研究されていかなければならない。その研究はどれもこれもおもしろい。だがそのなかで一番おもしろいのは、やはりマヤ文字の研究ではなからうか。というのは、マヤ文字は、新大陸で唯一といってもよいほど発達した文字体系をもっており、しかもその文字が歴史を語りはじめたからである。また、文字は文明の条件の一つに数えられるものである。文字というものは、それを創った人やそれを用

いた人々の知識の凝縮物といえるものである。そう考えると、文字の謎を解くことは、それを使用した人々の知識体系を明らかにすることになるし、その文字をもっていた文明を明らかにすることにもなる。逆にいえば、文字を解読するには、マヤ文明というものを知らなければならぬということである。つまりマヤ文明すべてを研究する総合学問である、マヤ学を必要とする。

もちろんマヤ文明は、文字からだけでは説明することはできない。文字からみたマヤ文明とは、マヤ文明のもっとも栄えた古典期（二九二〜九〇九年）の、それも文字をもっていた一階級の説明でしかない。それはたしかにおもしろい。しかしそれだけではマヤ文明全体の記述にはならない。だが、文字を解読するためには、マヤ文明というものをある程度知っていなければならぬ。また、マヤ文明の研究は、とくにこの一〇年あまりのあいだに急速に進み、マヤ観もそれまでとは違ったものになりつつある。

そこでまず、最近の研究の成果をふまえ、文字の理解に必要な背景がわかるよう、マヤ文明について述べることからはじめよう。そのあとマヤ文字をみていくために必要なことを二、三述べ、徐々にマヤ文字にはいっていくことにしよう。

マヤ文明の栄えた土地

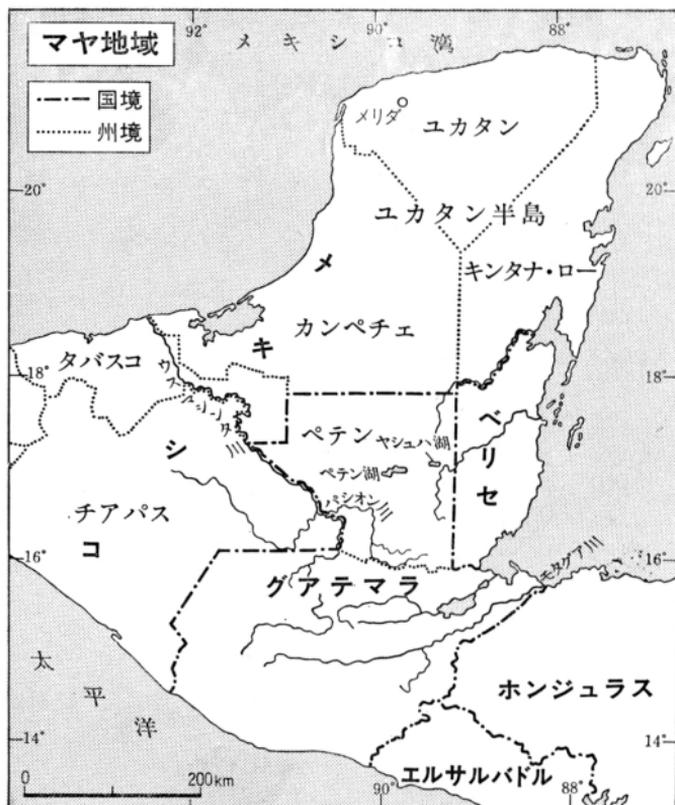
マヤ文明の展開した地域は、グアテマラのペテン州のジャングルを中心に、北はメキシコのユ

カタン半島の諸州、西はタバスコ州とチアパス州の東半分、南はグアテマラの山岳地帯、東はベリセ全土、それにホンジュラスとエルサルバドルの西部が含まれる。面積にして約三〇万平方キロメートルにおよぶ広大な地域で、地形、気候とも変化に富んでいる。

地理的には、高地と低地の二つに大きく分けることができる。ユカタン半島の中心地メリダからグアテマラに飛行機で北から南へ行くとき、目にする光景はみごとである。緑のじゅうたんをしきつめたような平面、それは北から南に行くにしたがい色が濃くなり、川や湖がふえていく変化をみせるのだが、一面の見渡すかぎりの平野が、急に盛りあがってグアテマラの山々を形づくる、そのあざやかなコントラストを前にしたとき、だれしも自然の造形の美しさに感動せざるをえないであろう。高地と低地は、それほどはっきりした境をもっているのである。

高地とは、グアテマラからメキシコのチアパス州にかけての山岳地帯をさす。四〇〇〇メートルを超す山々、湖、川、それらがおりなす景色は美しい。しっとりとした緑にかこまれて、土地固有のあでやかな民族衣裳をまとったインディオが、昔さながらの素朴な生活を営んでいる。グアテマラに住むインディオは現在はずべてマヤ族であり、キチエヤカクチケルなどの部族が、大部分は一〇〇〇メートルから二五〇〇メートルの気候のいいところに住んでいる。苛酷な熱帯低地と比べると、さながら常春の楽園のようである。

マヤ文明史上、ここは重要な影響をまわりに与えてきた地域であり、グアテマラの太平洋岸の



低地帯ともども、見過ごすことのできない地域である。また、ここに住むマヤ族は古いものをたくさん残しており、マヤ文明を研究する上でも重要である。しかし高地は、あくまでマヤ文明の周辺地域でしかなかった。

マヤ文明が栄えたのは低地である。低地北部のユカタン半島は、石灰岩の土壌の広がる平坦地で、川や湖がない。また雨量も少なく、セノテと呼ばれる自然の井戸がほとんど唯一の水源となっている。そのため北部はいばらの灌木のおい茂る乾燥地帯であるが、南に行くにしたがい雨量もふえ、熱帯雨林のジャングルとなる。南部にはウスマシタとモタグアという二つの河川系があり、ペテン湖やヤシュハ湖などの湖も存在する。一年は乾季と雨季に分けられ、

雨量は北端では年間四五センチくらいであるが、南に行くにしたがってふえ、南端では三〇〇センチに達する。

マヤ文明がもっとも栄えたのは、低地でも南半分のジャングル地帯である。三世紀から九世紀にかけて栄えるが、十世紀には放棄されて、人はほとんど住まなくなる。低地北部も紀元前には昔から人が住み、活動があったが、南部とはいくぶん異なった展開をする。そして、低地南部が十世紀に放棄されたのちも、ひきつづき栄える。生態学上、北部と南部は異なっていたわけだが、文化史的にも、このように低地は北と南に分けることができる。

物理的環境の違いが地域ごとの文化の表現に影響を与えているのであろう。低地は北部と南部に分けられるが、自然環境の違いや芸術様式の違いから、さらに一三に細かく分けることができる。私たちがこれから検討する文字はこれらのどの地域にも存在するが、中心となるのは、中部やウスマシタ流域などの低地南部の諸地域である。なかでもワシヤクトゥンやティカルなどがある中央地域が文化革新の中心的役割を果たしていた。

メソアメリカ文明のなかのマヤ文明

マヤ文明といえ、低地熱帯ジャングルで発達した文明であること、石器時代の技術ですぐれた文明を生みだしたことなどの、他文明と比較した場合に浮かびあがる特徴のほかに、擬似ア-

チヤ棟飾りなどに特色をもつ建築や、石碑と祭壇と建築物の複合、土器、複雑に発達した暦や神の体系、文字などの特徴をあげることができる。

しかしこうした特徴をもつマヤ文明も、メソアメリカという文化領域のほぼ東の端で栄えた文明でしかなかった。メソアメリカには、メソアメリカの母なる文明とも呼ばれるオルメカをはじめ、テオティワカン、サポテカ、タヒン、トルテカ、アステカなど、数々の文明があった。こうした文明とマヤ文明は、

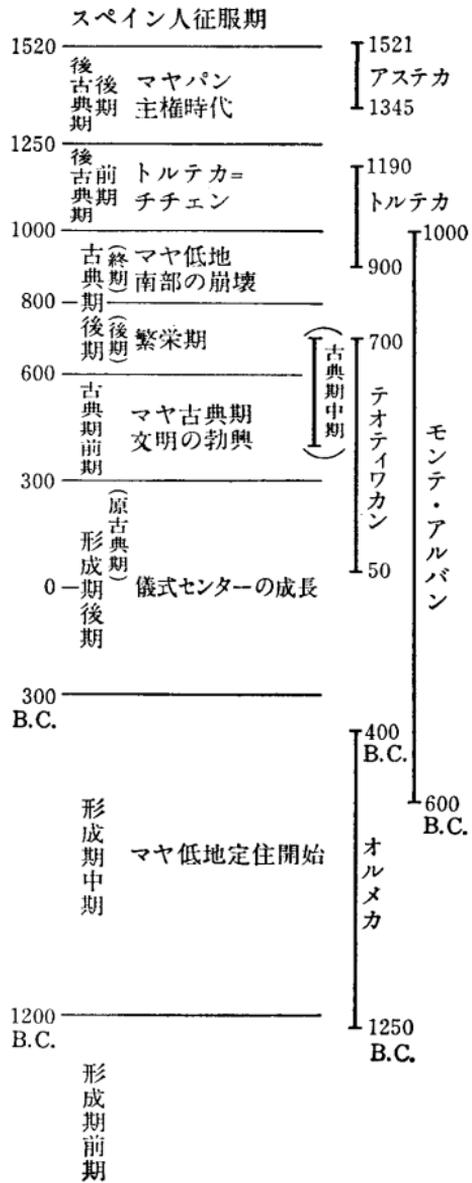


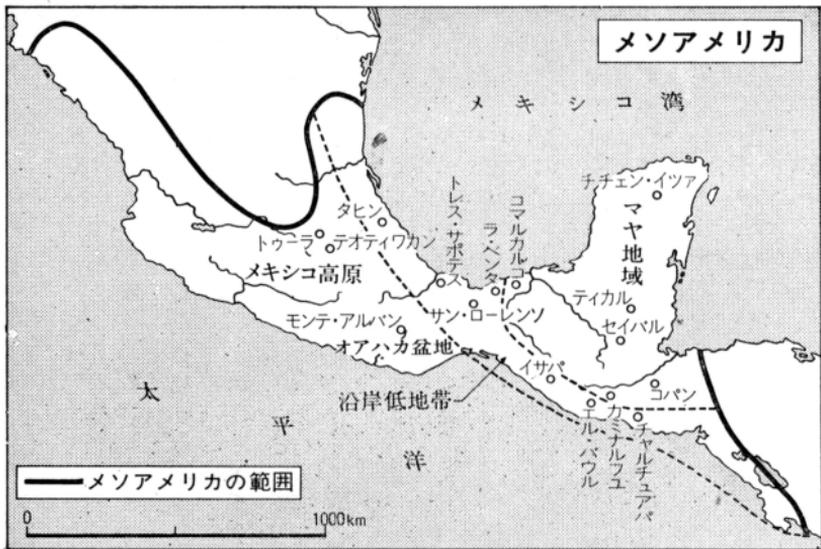
多くの特徴を共有している。また、マヤ文明は、テオティワカンやトルテカなど、メソアメリカの諸文明からさまざまな影響を受けつつ発達した文明でもあった。それゆえ、マヤ文明はそうしたメソアメリカの文明の

一つとしてとらえていかなければならない。

メソアメリカに人が住みはじめるのは、いまから一万年以上も前のことである。最初のアメリカ人は、ウィスコンシン氷河期に、ベーリング海の水位が下がりがりアジアと陸つづきになった、いまから五万〜九千年前のあいだに、何度かにわたってアジアから新大陸にやってきた人々である。

最初のインディオがアメリカ大陸にやってきたときには、マンモスやバイソンなどの大型草食獣が闊歩する草原であったようだ。彼らがそうした大型獣を狩猟し生活していた証拠を、合衆国やメキシコなどの露营地や野外遺跡にみることができる。ところが紀元前七〇〇〇年頃気候が温





暖になり、大型草食獣が絶滅すると、インディオたちは、小型獣の狩猟や木の実や根茎の採集生活にはいるようになる。やがて、トウモロコシやカボチャ、豆などの基礎作物の栽培化が、長いあいだかけて少しずつおこる。そして農業に基礎をおいた定住生活が始まり、土器が作られるようになる。

土器をもった定住生活が始まるまでを古期という。それ以後は、形成期(紀元前二〇〇〇〜三〇〇年)、古典期(三〇〇〜一〇〇〇年)、後古典期(一〇〇〇〜一五〇〇年)に時代区分される。古期から形成期にかけての発達過程は、メキシコの北東のタマウリパスの洞穴や岩陰、プエブラ州のテワカン盆地などにみることができ、まだ文明と呼ぶに値しない、小さな村落段階であった。形成期中期(紀元前一二〇〇〜紀元前三〇〇年)には、マヤ地域のすぐ西、タバスコからベラクルスの低地帯にオルメカ文明がおこる。サン・ローレンソ、ラ・ベ

ンタ、トレス・サポテスを中心に、多数の人を組織してこしらえた大神殿や、ジャガーの顔と赤ん坊の顔が結びついたジャガー＝人間のモチーフ、玄武岩で作られたニグロイド的な顔をもつ巨頭など、独得な芸術が生みだされた。オルメカ文明がメソアメリカの諸地域に与えた影響は大きく、メソアメリカの母なる文明と呼ばれるほどである。

紀元前六〇〇年頃には、オアハカ盆地に、文字の原形が現われる。サン・ホセ・モゴテの石碑3やモンテ・アルバンの石碑12や石碑13、三一〇個ほどある『踊る人』と呼ばれる石碑群には、点と棒による数表記や暦、一見して暦と関係のない、人物を表わすと思われる文字まで刻まれていた。そして紀元前後には、長期暦という、いわば絶対暦を記すことができる暦が、タバスコからグアテマラの太平洋岸にかけて出現する。

形成期中期から後期にかけては、ベラクルスやタバスコ沿岸、オアハカ、チアパス、グアテマラ太平洋岸の、マヤに接する地域に高い文明がおこったのであった。

マヤでは従来、形成期は紀元前九〇〇年頃からはじまるとされていた。パシオン流域のアルタル・デ・サクリフィシオスやセイバルでみつかったシェヤレアルと名づけられた土器が最古のものと考えられていたのである。

ところが、一九七三年からはじまったペリセ北部の調査、発掘から、マヤの形成期は紀元前二六〇〇年頃からはじまることがわかるようになってきた。メソアメリカの形成期の初めよりさら

に六〇〇年も前である。スワジー式土器と名づけられた土器が紀元前二六〇〇年から紀元前一二五〇年にわたる期間、つまり、形成期前期に用いられていたのである。

この土器は、最古の原始土器とは思えないほどさまざまな形態や表面仕上げをもっており、できばえもすぐれていた。土器が原始的な特徴をもっていないということは、それに先だつ発展段階があったか、それとも、その当時文化の進んでいたコロンビアのプエルト・オルミーガやエクアドルのバルディビアやレアル・アルトからの影響があったと考えることができる。しかしおそらく、最初からマヤの地で発達したものであろう。というのはベリセ北部の同地域で、すでに紀元前九〇〇〇年頃から人が住んでいたという証拠が発見されたからだ。土器の原型はまだ発見されてはいないが、将来発見される可能性は大きい。その起源は、マヤの低地の土の下にうずもれているにちがいない。発掘の中心となったクエリヨの遺跡では、スワジー期に属する墓が五つもみつかったが、その埋葬品に、その地ではとれない宝石（緑石）や貝の首飾りなどがあり、その頃すでに交易が行なわれていたこともわかった。

従来、マヤの形成期は紀元前九〇〇年頃、パシオン流域ではじまるとされてきた。しかし、スワジー期の年代ははまだ流動的であるとはいえず、ベリセ北部の歴史がこのようにさかのぼれるとすると、オルメカ文明とマヤとの関係を考えなおさなければなるまい。オルメカはマヤ人だったという意見もあるが、そうでなくても、少なくともなんらかの関係があったにちがいない。

これらの初期の村落は、川沿いの肥沃な地に栄えたということに注目する必要がある。メキシコ高原のチナンパのように、水をうまく利用して、湿地に盛り土をした土地での耕作が行なわれていたのではないかと最近の調査から考古学者は推測している。定住生活の基礎となる農業形態は、マヤ文明の特徴の一つでもある焼畑農業とは違った形だったのではないだろうか。

紀元前六〇〇年頃には、川沿いから内陸部にも人々は移住し、川のないペテン中心部でも定住生活をはじめまる。マムム期とも呼ばれる形成期中期の終り頃（紀元前六〇〇〜紀元前三〇〇年）は、人口が増大し、交流が盛んになり、均一化がおこりはじめた時代である。北はチビルチャルトゥンから、南はエルサルバドルのチャルチュアパにいたるまでの、いろいろな場所で人々が活動しはじめた証拠があがっている。その頃には、マヤの地のいたるところで人々が生活していたのである。しかし公的建築物はまれで、ぜいたく品の出土もなく、小村段階でしかなかった。

形成期後期（チカネル期）になると、人口はさらに増大し、各居住地が拡大し、儀式建築が生まれ、ひすいや貝などのぜいたく品が出現しはじめる。埋葬品に差がでてきて、はっきり社会が階層化してくる。

しかし地方により発達の仕事は違っている。たとえばティカルでは、紀元前二〇〇年頃から人口が増大し、新しい装飾技術をもった儀式用土器や儀式的性格をもつ建物が現われるようになる。そして紀元前五〇年から一五〇年のあいだには、天井をもつ墓やささまざまな色で仕上げられたス

タッコー製の仮面をもつ大神殿が建てられる。その間人口はふえていない。ところがアルタル・デ・サクリフィシオスでは人口は漸増、ベリセ北部では、初期の四倍に急激に増大したあと、ゆっくりふえつづけている。北ユカタンのチビルチャルトゥンでは、紀元前二五〇年から紀元前一〇〇年にかけて、文化的な頂点に達したあと、人口は減少し、公共物の建造が止まる。リオ・ベック地方では紀元前三〇〇年から紀元前五〇年に人口は漸増し、大建築が紀元前五〇年から二五〇年にかけて発達する。

このように地方的差があるものの、二五〇年までには、マヤ文明の一大特徴である擬似アーチが建築に使われるようになり、文字をのぞいてマヤ文明の特徴となるものはすべてでそろう。

マヤ文字の登場

マヤ文明の最大の特徴である文字が最初に現われるのは、ペテンの中央部のティカルであった。二九二年の時を刻む最初の石碑、ティカルの石碑29は、発達した文字体系をもち、技術的にも洗練されている。それゆえ文明が、突然発達した形で、ペテンの中心地ティカルに現われたような印象を受ける。しかし実際は、原古典期とも呼ばれる、紀元前後から三〇〇年のあいだに、チアパスからグアテマラの太平洋岸一帯に栄えた、イサパやエル・バウル、さらにはカミナルフユなどの当時文化の進んでいた地域から、多くのものを受けついでいたのであった。以前は、マヤ文

字の起源はマヤの地にあると考えられていた。文字の原形は、木材などの腐食する材料に刻まれていたため後世に残らなかったのだ、と解釈されていた。しかし、マヤの初期の石碑群とイサパヤカミナルフユなどの石碑を比べてみると、いかに多くのものをマヤ人が受けついでいるかが納得できる。たとえば、点と棒による数表記、長期暦の体系、文字の基礎、長鼻の神、石碑の上部で下を見おろす身体をもたない神、首飾りや帯飾りなどの芸術様式、浅浮彫りの技法、石碑と祭壇を対に用いることなどを数えあげることができる。

マヤ文明がどうしておこったか、いまだに謎であるが、イサパヤカミナルフユの影響があったことはまちがいないだろう。北からの影響もあっただろうが、おそらく、エルサルバドルのチャルチュアパからベリセを経由してペテン中央部に伝わっていった流れが一番大きいにちがいない。文字をもったマヤ文明が最初に現われたのは、ペテンの中央部である。二九二年から最初の一〇〇年あまりは、その範囲はわずかにペテンの中心地から東西二九キロ、南北一一〇キロに限られていた。それがやがて、北はユカタン半島の北端から、南はグアテマラ高地まで、東はホンジュラスとエルサルバドルの西部、西はタバスコのコマルカルコまで広がったのである。

マヤ古典期

文字をもつようになってからマヤ文明は真に文明たる高みに到達した。この時代を古典期とい

う。古典期とは文明のもつとも栄えた時期のことで、マヤでは、碑文が刻まれた年代である二九二年から、九〇九年までの期間をさす。古典期は前期（ツァオル期）と後期（テペウ期）に分けられる。だいたい六〇〇年までが前期であり、それ以後の三〇〇年が後期である。

前期はマヤ以外の地からの影響が強く、前期の前半はイサパやカミナルフユ、後半はメキシコ高原のテオティワカンの影響を受けている。テオティワカンは紀元前後からメキシコ市の北東約五〇キロのところを発達した文明で、最高頂のときには十万人以上の人口があったという、メソアメリカ最大の都市である。テオティワカンの影響はメソアメリカのいたるところにおよんでおり、そのため、その影響が強かった四〇〇〜七〇〇年を古典期中期と名づける人もいるほどである。マヤ文明もその強い影響を受けているが、以前はグアテマラ高地のカミナルフユを前哨基地として、そこから間接的に影響を受けたと考えられていた。しかし、テオティワカンの影響は、ペリセ北部のアルトゥン・ハで二世紀の中頃にすでにみられる。それゆえ、テオティワカンとカミナルフユ、さらにはマヤという関係をもう一度考えなおす必要が生じてきている。

テオティワカンの撤退と関係があるのか、マヤ文明は六世紀の中頃から活動が弱まり、何らかの混乱がマヤ世界におこる。石碑は五三九年から五九八年までの六〇年間、中心部ではほとんど建てられなくなる。暗黒時代といってもよいこの六〇年間は、三〇〇年後におこるマヤ文明の謎の崩壊の「リハーサル」と呼んでもよいくらいに、活動の止まった時代である。

六〇〇年頃からマヤ低地文化は力強く再生し、古典期後期、まさにマヤ文明といえる時代にはいる。後期文明は、暗黒時代の六〇〇年の存在や土器様式の違いなどから、前期とははっきり分けられるが、構造的にもやはり違う。つまり後期は、前期と比べて一層エリート階級と一般層との差が大きくなる。宮殿と名づけられている部屋をたくさんもった建物が多くなることや、墓の型や装飾が精巧になること、ぜいたく品の出土などからそのように考えられるのである。碑文は長文になり、王朝の家系や即位、戦争などの内容が刻まれる。強大な権力をもった王を中心に、階層化が進み、工芸や通商が栄えた。各儀式センターの人口がふえる。都市間にも階層化が生じ、従属―支配の関係も生まれた。

マヤの社会

マヤ文明が最高潮に達した六〇〇年から八〇〇年頃の社会はどのような社会であったか、興味がわくのだが、まだ十分にわかっていない。しかし本書でのちに行なうテキストの分析からわかるように、王や王の一族が支配していたことはまちがいない。王家と王家は血縁関係にあったばかりでなく、商業的な交りもかなり頻繁に行なっていたことは、碑文ばかりでなく、考古学的調査からも想像がつく。ペテンにない黒曜石やひすいやケツアル鳥の羽などをグアテマラ高地から得たり、塩をカリブ海沿岸から得たり、そのほか必要なものやぜいたく品を遠い地方から調達し

ていた。こうした商業をとりしきる商人階級もいたであろうし、建築物や工芸品を作る人々もいたであろう。十六世紀に記されたユカタンの記録にもあるように、王や神官や貴族などのエリート層は、神殿や宮殿などの石造建築群がある中心地や近くのしゅろぶきの家に住み、また陶芸家や彫刻家などの、エリート層と密接な関係をもつ中間層は、中心からさほど離れていないところに住んでいただろう。そして下層の農民は、中心から離れたところに住んで、農作業に従事するかたわら、建築に労力を提供したり、長距離通商の荷担人として働いていたにちがいない。

以前は、マヤ社会は、神官階級の支配する平和な社会と思われていたが、そうではなく、戦争や略奪など、血なまぐさい事件のあいついだ、ほかの民族の歴史と少しも変わらぬ世界であったこともわかってきた。

また、住居址の研究が進み、遺跡の規模や人口がわかるようになってきた。たとえばティカルでは、中心部一平方キロメートルに六〇〇人もいたと推測されている。そうなると、従来いわれてきた焼畑農業では、そのような大人口を養えない。最近では考古学者は、マヤ低地の食料需給について、熱帯雨林のあてにならない焼畑農業のみに頼っていたのではなく、自然の産物の特性を最大限に生かした高度な営みが行なわれていたにちがいないと考えるようになっていた。収穫期と種蒔期の違いを利用したり、収穫増大のために大規模な灌漑や段々畑を作ったり、根栽農業、果樹やラモンの木 (breadnut) の利用、海産物の移入、動物の狩りなど、いろいろな手段や方法

で、食生活を豊かにしていたようである。

このように、少しずつではあるが、マヤ社会がどのような社会であったかわかるようになってきた。

マヤ文明崩壊の謎

だが、こうして発達した古典期文明も、八〇〇年をすぎると衰退に向かう。その一つとして、日付をもった石碑が建てられなくなったことをあげることができる。ピエドラス・ネグラスでは七九五年、ボナンパックでは八〇〇年、キリグアでは八一〇年というふうに、八〇〇年頃から石碑は建てられなくなる。同時に建築活動もやみ、やがて放棄されていく。

原因は定かではないが、マヤ文明は減んでしまう。崩壊の原因は古くから研究されてきており、いろいろな意見もあるが、これまでに提出された崩壊の原因をまとめると、次のようになる。

内部的原因

自然的

- 1 土地の疲弊
- 2 人口増大
- 3 天災（地震・ハリケーンなど）

4 天候変化、旱魃

5 病気

社会政治的

1 農民の反乱

2 都市間の戦争

外部的原因

1 経済機構の崩壊

2 侵略

このようにいろいろな原因が考えられているが、これだというものはいまだにない。おそらくこれらの原因のいくつかが複合しておこったのだろう。また地方によって原因が違うのではないかと考える必要がある。たとえばティカルでは、急激な人口減少が末期におこるが、これなどは、人口増大によって食料供給が破綻し、慢性的栄養不良に加えて病気が蔓延した、さらに通商体系の崩壊が追い打ちをかけた、と考えるもよいであろう。これに対し、パシオン流域では、西からの侵略が大きな原因だと考えられる。

また、精神的な原因を考えてみることもおもしろい。ユカタンのマヤ人は二六〇年たらずが一周期の暦を使っていたが、その暦は古典期にもあった可能性が高い。マヤ人はある出来事は周期

的に繰り返すと信じていたが、古典期前期と後期はちょうどその暦が完了する期間にほぼ等しく、ある種の運命觀に従って自らの住む都を放棄したかもしれない。

マヤ文明は突然ジャングルから消えたようにいわれ、それはマヤの不思議な謎の一つに数えられてはいるが、けっしてそうではない。徐々にはあるが崩壊の謎も解けはじめてるのである。

かつて栄えた低地南部では、タヤサルやトポシユテをのぞき、二度と活動がなくなり、舞台は低地北部に移る。後古典期のはじまりである。

以前は、南部で栄えた古典期を築いた人々が、なんらかの理由でそれまで空白であった北部に移り、その新天地で後古典期文明を築いたと考えられたこともあった。しかし北部の遺跡の発掘が進んだ現在、そのような古い空想的な理論は受けいれられなくなった。北部でも、形成期から人々が活動し、古典期には暦をもつ石碑が建てられるようになった遺跡がたくさん知られている。形成期はほとんど南部と変わるところがない。しかし古典期にはいると、地方主義的とでもいってよい、ユカタン独自の道を歩むようになる。ユカタン・スレート土器と呼ばれる土器が現われ、リオ・ベック様式やチェネス様式やプウク様式と呼ばれる美しい建築物が建てられるようになる。

このように北部での展開は南部と異なるのであるが、両者が著しく違う点は、南部は古典期の終りとともに放棄されたのに、北部ではひきつづき人が住みつづけたということであろう。

マヤ後古典期

後古典期も前期と後期に分けられる。前期はメキシコ高原のトルテカの影響を色濃く受けたチチェン・イツァを中心とする時代で、後期はマヤパンを中心とする、多くの首長国の競いあった時代である。

ユカタンの歴史は、おもに文献から再構成されている。チラム・バラムの書などのスペイン人征服後の文献により、ユカタンの歴史は五世紀頃までさかのぼることができる。しかし短期暦という、二六〇年たらずで一周期をつくる暦を使っていたため、時代関係がはっきりせず、また、長いあいだに歴史が都合のいいようにゆがめられた可能性もあり、文献を中心に再構成された歴史はかならずしも正しいとはいえない。実際、最近の考古学的調査の結果との矛盾が指摘されるようになってきた。たとえば、文献では、九九七年から一一九四年まで、ウシュマル、チチェン・イツァ、マヤパンの三つの都市の同盟があったとされているが、考古学からは、ウシュマルは一〇〇〇年頃まで、チチェン・イツァは一二〇〇年頃まで、マヤパンは一二五〇年以後栄えたことがわかった。栄えた時代が重なりあわないから、三国同盟に関する記述、さらにはそれにもとづいた歴史はおかしいといえるのである。

このように、後古典期の歴史は文献があるにもかかわらず、いまだにはっきりしていない。よ

くいわれるトルテカの影響を受けたというチチェン・イツァも、逆にチチェン・イツァがトルテカに影響を与えた可能性もあり、ユカタンの歴史は十分に検討しなおす必要にせまられている。文献学的な研究と考古学的な研究から再考しなくてはならない問題がたくさん残っている。

一二〇〇年頃、チチェン・イツァは放棄される。そして一二五〇年頃からマヤパンを中心にしたマヤ文明の再生期ともいえる時代がおとずれる。芸術的には退廃期であるが、見方をかえれば、商人階級の勃興により、新しい秩序がもたらされた時代といえるかもしれない。

一四四一年、ユカタンの中心地であったマヤパンが滅んでしまう。そしてスペイン人の征服前の半世紀は、ハリケーンの襲来、飢饉や流行病などで、マヤ世界は混乱をきわめた状態にあった。一五〇二年、マヤ人とスペイン人の最初の出会いがおこる。コロンブスの第四回目の航海のときであった。

マヤ文字の解説史

以上、スペイン人が征服する前までのマヤの歴史を簡単に述べてみた。マヤ文明の最盛期の古典期については、のちにもう一度述べることになる。碑文の研究から、古典期がどのような社会であったか、少しずつわかるようになってきたからである。

文字をみるための背景として、マヤ文明の歴史を述べたが、もう一つ、別の歴史について述べ

ておく必要がある。それはマヤ文字の解説史である。

一八六三年、フランスの神父、ブラシユール・ド・ブルブルによりランダの『ユカタン事物記』が発見され、翌年出版されてから、マヤ文字の解説史ははじまる。『ユカタン事物記』とは、スペイン人の神父ディエゴ・デ・ランダが十六世紀の中葉に、ユカタンの歴史や自然などについて書いた書物であるが、そのなかに、暦の文字と、ランダのアルファベットと称される文字が記されていた。初期の学者がこのアルファベットを利用して、絵文書を読もうとしたのは当然であった。しかしわずか三〇個のアルファベットではうまく読めず、とうとう一九〇四年にその方法は放棄されてしまった。

マヤ文字解説史は三期に分けることができるが、一八六四年から一九〇四年の第一期は、文字を読もうとした期間といえることができる。しかしもちろんこの期間に、マヤ文字は表意文字だとする人や、表音文字と表意文字の混合体系であるという考えをもつ人もいた。マヤ文字が表音文字か表意文字かの論争もあった。そしてそのあいだに、暦の仕組や神々の研究、文字の解説に必要な資料の収集や出版が行なわれた。絵文書にあったマヤ暦の仕組や金星暦、月齢表、倍数表の仕組が解明され、マヤ暦の起源や0の文字、方角や色を表わす文字などが発見され、多くの神々の文字も同定された。マヤ文字の読み順も決定された。しかし最初の四〇年間はやはり、文字を読もうとする、いいかえれば、表音的アプローチの時代であったといえることができる。

それが失敗すると、今度は、言語の知識がなくても理解できる暦に関する文字の研究に中心が移った。いわば表意的アプルーチの時代である。この時代に支配的な考え方は、マヤの碑文にはただ暦や天文に関することしか記されていないという考えであった。碑文の三分の一を占めるといわれる暦に関する文字はほぼ理解できたが、そのため、あやまってマヤ文字は三分の一解読されたといわれることにもなった。実際は暦が解明されたにすぎず、マヤ文字資料の大部分を占める残りの文字は、なにより一つ解読されなかった。

それら未解読の文字が、まがりなりにも理解されるようになったのは、一九五八年からである。いまだ多くの文字は未解読のままであるが、それでも、マヤのテキストの概要はわかるようになってきた。つまり、マヤの碑文には歴史が刻まれていることが証明され、文字からマヤの王朝史がわかるようになってきたのである。

文字の読み方についても、ソ連のユーリー・クノロゾフを中心にいくつかの成果があがった。今日にいたるまでの最近の二〇年間は、碑文から歴史をさぐる流れと、絵文書の研究から文字の読み方をさぐる流れ、さらにはこれまで無視されてきた土器の文字の研究の三つが、それほど密接な関係をもたず、並行に進んできた時代といえよう。

一八六四年から今日まで、マヤ文字の研究は多くの人々によってなされてきた。碑文と絵文書というマヤの二大テキストの内容は、現在では、ほぼ理解されるようになった。しかし個々の文

字をとりあげると、マヤ文字はまだまだ解読されているとはいいがたい。解読されるにはまだ時間がかかりそうである。その原因は、テキストがむずかしいことや、文字の資料が十分でなかったこと、解読の方法が悪かったことなど、いろいろ考えることができる。だがなんととっても、ロゼッタ石に相当する資料がなかったことが、もっとも大きな原因と思われる。

とはいうものの、遅々としてではあるが、解読は進んできた。いろいろな手がかりがあったからである。直接の手がかりはランダの書であった。しかし解読の助けとなる資料は、十六世紀のものから今日採集できる資料にいたるまで、かなりの量にのぼっている。マヤだけに限らない。多くの基本的概念を共有しているメソアメリカの諸文明からも有益な知識が得られた。マヤ文字を取り巻く環境は比較的恵まれていたので、ロゼッタ石はなかったけれども、解読は進んできたのである。

しかし、マヤ文字の解読史は別の方向からみれば、誤謬に満ちた歴史といえるかもしれない。解読者たちは好き勝手に自分の意見を発表する。それはたとえば、昨日述べたことを今日とはまったく変え、別の説で発表する、といった具合である。ことに文字の読み方がそうであった。そのような無節操ともいえる態度がまかり通っていたのは、研究者が少なかつたことや資料が足りなかつたことなどによるかもしれない。だがもっとも大きな原因は、十分な知識をもつた解読者が少なすぎたためではなからうか。門外漢の学者がマヤ文字の解読に参加し、たいした根拠も

ないのに、もっともらしい説を唱えることも許された。そのためであろう、いたずらに文献がふえ、マヤ学はとっつきにくい学問になってしまった。

マヤ文字研究にむけて

ではマヤ文字を研究するのに必要な知識とは、いったいどんなものであろう。

第一に、あたりまえのことだが、マヤ文字を研究するのだから、マヤ文字に精通すること。テキストがどのようなことを扱っているのか。どのような文字であり、どのくらい文字があるのか。どのくらいの頻度で使われているのか。どんな場面に使われるのか。こうした知識が必要である。

第二は、マヤ文字はマヤ語で書かれたものであるから、マヤ諸語の知識が必要不可欠である。マヤ諸語は現在でも、マヤ文明が展開した地域とほぼ同地域に、約二五〇万の人々によって話されている。三〇ほどの方言に分けることができるが、少なくともそのうちの一つに精通していなくてはならないであろう。マヤ文字が用いられたのはいまから千年以上も前のことなので、そのころの言語を復元できる手段も知っておかねばなるまい。結局、マヤ諸語全体についての広い知識が必要である。

第三に、マヤ文明に対する知識はもちろん、メソアメリカ全体の文化の知識が必要である。たとえば、夜は九つの王によって支配されていたという知識は、メキシコ高原のアステカ文明から

得られた。もしその知識が得られなかったなら、九つの変体をもつGと名づけられた文字の意味はわからないままであっただろう。このように、マヤでは消えてしまっていた知識が、また、マヤだけみていては理解できないものが、メソアメリカという文化共同体ともいえる地域のなかのほかの文明から得られる可能性は大きい。

これらの基本的条件を満たす作業は、一朝一夕にできるものではない。それはあまりに大きすぎる。筆者にも欠けている。だが、これらの条件が満たされなければマヤ文字の解読はできないというのではない。これらは研究の途中で培われていくものであって、最初から必要なものではないからである。しかし、この基本的条件を満たすべく努力していく必要はある。ともかく、まずはマヤ文字に親しみながら、少しずつ関連する知識を蓄積していくよりほかはない。

マヤ文字の解読史をみると、このような条件を満たした上で解読しようとした学者が少なすぎたことがわかるのであるが、これらの条件にもまして大切なことがある。それは十分な批判力をもつことである。もちろん、先にあげた基本的条件がある程度は満たしていなければ批判できないわけであるが、批判力をもたなかったために、おびただしいまちがいが蓄積されてきたのである。

十分な批判力をもたず、権威者のまちがった説を鵜呑みにしている例は、枚挙にいとまがない。たとえば、マヤ人の科学が進んでいた証拠として、マヤ人は一年を三六五・二四二〇日と計算し

ていたということをおげることがある。それは化学者ティープルが一九三〇年に唱えた説で、マヤ学の権威者トンプソンが認めたため、いまでも世界に流布しつづけている説である。これはまったくでたらめな説だといったら、そういったほうが疑われるかもしれないほど、少しでもマヤに関心をもつ人ならだれでも知っている説である。だがこれは、まちがった前提に立ち、まちがった計算を重ねていって導かれた、まったく根拠のない説なのである。

これはほんの一例にすぎない。マヤ文字の解読史は誤謬に満ちた歴史といったが、一つにはこういう批判的態度が欠けていたことも原因である。

数々の説がこれまででされてきたが、それらははたして正しいのか、矛盾のない説なのか、なまの文献にあたり、自ら検証していく批判的態度が必要である。

私たちは、先人がなしてきた仕事を、正しいことは正しいとし、まちがっていることはまちがっているとはっきりいえる力をもたねばならない。それというのも、マヤ文字はいまだ解読されているのではないし、日々新しい意見がだされているからである。ひじょうに流動的で、なにが正しいかわからない、混沌とした世界であるから、正しいこととまちがっていることを見分ける目が必要なのである。

定説など信じてはならない。マヤ人がピラミッドを作るのに一つ一つ石を積みあげていったように、私たちも、一つ一つ確信のもてる証拠を積みあげていく必要がある。基本的なものから一

歩一歩進んでいかなければならない。

では基本的なものとはなにかといえ、それは、マヤの碑文の多くを占める暦である。マヤ人は時の計算に没頭していたともいわれるくらい、いろいろな暦を使って時の流れの一点を定めようとした。たくさんの暦が組み合わさっている、最初はとまどってしまいかもしれない。しかし、一つ一つゆっくりみていけばそんなに問題はない。

たしかに暦には、私たちの理解しがたい観念、日や月を神とみる意識など、やっかいなものが含まれる。それらはなかなか把握しがたいものである。しかし、碑文に刻まれているマヤの歴史をみようとすることは、暦の仕組さえ知っておれば、そういったことはさしあたって問題にはならない。

文字の解読から再構成される歴史は十分に興奮させられるものである。だが、そこにたどりつくためには、まず石切りからはじめなければならない。そのやっかいな基本的作業をぬかすならば、再構成した歴史のピラミッドは、それこそジャングルのなかにくずれ去ったピラミッドとおなじ運命をたどることであろう。

そこで本書では、まず暦からはじめ、そのなかで文字についての基本的なものを一つずつ理解していくことにする。そしてそれらのしっかりした基礎の上に立って、テキストをみていくことにしよう。

テキストの形態

私たちの出発点はランダが残した暦とアルファベットである。だがその前に、文字にとりかか
るための準備の最後として、マヤのテキストはどのような形態をもつものかを述べておこう。

マヤ文字のテキストは、刻まれたものと描かれたものの二つに大別できる。刻まれたものとは
碑文のことであり、描かれたものとは絵文書のことである。どちらも、扱っている内容や年代な
ど、いろいろな面で異なる。たとえば素材に関していうと、碑文は石碑や祭壇、リントル（楣石）、
パネル（壁板）など、おもに石に刻まれたものであるのに対し、絵文書はいちじくの木から作ら
れた紙に描かれたものである。内容はどうかという点、碑文はおもに歴史的な事柄を扱っているの
に対し、絵文書はおもに二六〇日曆という宗教暦にもとづいた儀式的な事柄を扱っている。内容
が異なっているため、当然、碑文にあって絵文書にない文字があるし、その逆もある。年代も、
碑文は二九二年から九〇九年までの古典期であるのに対し、絵文書は十三世紀以降である。その
ため、書体も当然違う。

このようにいろいろな面で異なるが、両方ともおなじマヤ文字である。文字からみたマヤの歴
史は、二九二年から九〇九年までのあいだに刻まれた碑文の分析から得られるが、その理解のた
めには、十三世紀以降に描かれたといわれるドレスデン、マドリッド、パリ、グロリアの四つの

絵文書や、十六世紀のスペイン人征服後に書かれた、たとえばランダの書やチラム・バラムの書などの資料を活用しなければならぬ。

ところで、描かれた文字としては、絵文書のほかに、壁画や土器の文字もある。これらは碑文と同時代のものであるが、絵文書の書体に近いので、描かれたものの範疇にここでは入れておこう。壁画は、ポナンパックやワシヤクトゥンの壁画など、有名なものがあるが、数はそれほど多くない。それに対し、土器は豊富に出土している。土器の文字はこれまで装飾物とみられ、あまり重要視されなかった。だが、壁画はもちろん、土器の文字も、碑文を理解する助けとなるばかりでなく、碑文にない新しい情報を伝えていることが多く、無視するわけにはいかない。しかし、その重要性はやっと認識されはじめたばかりである。

先に、マヤ文字の研究は基本的なことからはじめなければならない、それが暦であるといった。なぜかといえ、十六世紀にスペイン人が到来したとき、当時でも使われていた暦についての記述が、暦の文字とその読み方まで添えて残されたからだ。さらにその暦は、マヤ文字資料の初めから終りまで、そして現在にいたるまで、連続として用いられてきたものだからである。また、暦というのは、まず仕組みさえわかればほぼ用をなすのであり、文字がどうのこうのという必要がささないからでもある。それゆえまず、暦の文字とその読み方を検討することが、マヤ文字の理解を深める最初の作業になる。

テキストの読み順

では、暦がたぐさん記されているテキストは、いったいどんな形をしているのであろう。

テキストの中心となるものは石碑である。石碑はふつう前面に、王または神官とみられる着飾った人が刻まれている。そしてテキストは側面または裏面に刻まれている。

文字はふつう二列に並んでいる。テキストは二列だけのものもあるが、たとえばパネルのテキストのように、数列、数十列からなる長いものもある。

テキストは角がいくぶん丸みをおびた四角なま、すに分割されている。そのま、すのなかに文字は納まっている。

ある文字に言及する場合の必要上、ま、すには、それぞれ左から右へ A、B、C、D……と名がつけられ、上から下へ 1、2、3、4……と番号が打たれている。たとえば、図 1 の斜線の文字は C 3 となる。

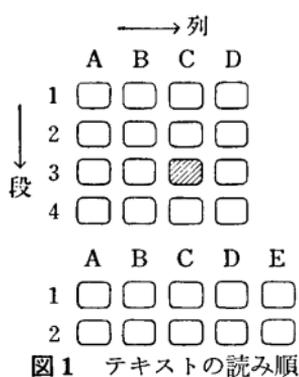
読み順は、上から下へ、左から右へ、二列が対になって読まれていく。二列を左、右、左、右と読んでいき、下段までくると、その右側にある次の二列を対に、左、右、左、右と、上から下へ読んでいく。図 1 の上の例でいうと、A 1、B 1、A 2、B 2、A 3、B 3、A 4、B 4、C 1、D 1、C 2、D 2……となる。

水平一行のテキストもあるが、その場合は、左から右へ読まれる。

二段の場合は、二列が対になって読まれるので、図1の下の例の場合だと、A1、B1、A2、B2、C1、D1、C2、D2、E1、E2となる。最後が例のように一列あまったとしてもおなじで、最後の一行は上から下へ読まれる。

三列の場合も同様で、まず二列が対になって読まれ、下段までくると、第三列目が上から下へ読まれる。しかし、三列が一对となって読まれる例もないではない。

特殊な例としては、コパンの石碑Jのように、むしろ織りの複雑な形をした文字配列をあげることが出来る。また、円形に文字が配列された祭壇もある。この場合、読みはじめる場所が問題になる。土器の文字で周囲ぐるりに描かれている場合も同様である。このような場合、付随する場面が手がかりになり、テキストは主人物の真上、または少し左寄りからはじまる。ふつう、日



付が記されているので、日付の順が決め手となる。

以上、例外はあるが、それはそのつど解決できる問題であり、ここで読み順の一般的原則をまとめると、

「二列を対に、上から下へ、左、右、左、右と読んでいき、下段までくると、次の二列を同様に読んでいく」ということができる。

ふつう、文字は左側を向いているので、いま述べた原則が適用されて読まれていくのだが、右から左へ読まれる場合もある。たとえば、ヤシユチランのリンテル25やパリ絵文書の二三、二四ページにみられるものがそうで、その場合、文字全体が反対向きに書かれている。しかしこのような例はごくわずかしかないので、問題は無い。

一まず、のなかにはふつう一文字が納まるが、それ以上の文字が押し込まれることもある。二つの場合だと、まず、は垂直に、ときには水平に二分される。各々の文字の形は、まず、が縦に半分に分けられた場合は高さが幅の倍になり、水平に分けられた場合はその逆になり、いずれにしても文字の変形はまぬかれない。

まず、が三分、四分されることもある。一般に二分化や四分化はテキストの後半になって現われることが多い。それによって生じる文字の大小は、文字の重要性に関係がないので、それは、あたかも書記者が書くための余白がなくなったために、やむをえずやった工夫のように思われる。これら一まず、に納まった文字に言及する必要がある場合は、アルファベットの小文字を使って表わすことになっている(図2)。

文字の構成

ここで、文字についてふれておくことにしよう。本書では、文字は文字素から成り立つものと

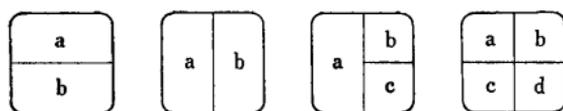


図2 1ますに納まっている文字の呼び方



1
2
図3 月チェン

文字を、文字素と要素に分けたのであるが、見方をかえていえば、文字は、接字 (Affix) と主字 (Main Sign) からなるということもできる。マヤ文字は、ふつう、大きな文字素に小さな文字素がくっついてできている。この場合、小さな文字素を接字、大きな文字素を主字といっている。じつはこれは、文字のなかでのたんなる位置や大きさの違い、つき方の違いによって分けた分類にすぎない。接字が意味を変えず

する。そして、文字素は文字素性または要素から成り立つものとする。つまり、文字の最小単位は点や線などの文字要素 (素性) であり、その一定数が一定の形と配列をもって構成されるものが文字素である。たとえば、月チェンの文字をみてみよう。図3はどちらも月チェンの文字である。図3の1は四つの文字素から成り立っている。しかし図3の2では、三つの文字素しかない。図の1の左側の文字素、これは黒を表わす文字素であるが、それが、2の一番大きな文字素のなかにはいっている。この場合、 は黒を表わす文字要素といえることができる。いままたことでわかるように、文字とは、文字素または文字素の集合が、一つの意味または指示物を表わす場合に用いることとする。たとえば、先にあげた例は、月チェンという一つの決まった指示物をもつ文字である。そしてその文字は、四つの文字素から成り立っている、ということができる。

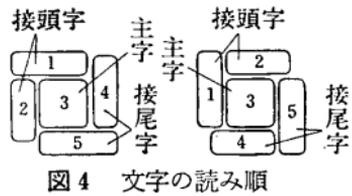


図4 文字の読み順

らの位置にも生起する場合があるし、またある文字素に対しては接頭字として、違う文字素に対しては接尾字として用いられることもある。文法的接辞の役割を果たす文字素や、修飾語となつて接字となる文字素があることなどはわかっているが、結局のところ、接字と呼ぶ文字素の働きは十分にわかっていないのである。

一般に接頭字と接尾字の交替はおこらず、読み順は、接頭字—主字—接尾字の順になると思われている。しかし、その順を守って解読を進めている人は少ないようであり、また、テキストが十分に読み込まれていないので、そのようなはっきりした読み順がマヤ文字に存在するのかわかどうかもまだわかっていないのが現状である。しかし、いまあげた読み順に従って解読をしていくことは、一つの指針であり、本書ではその指針にもとづいて解読を試みていこう。

に主字になることもあるわけで、大きな文字を大文字、それにくつついて生起する小さな文字を付随文字とか付属文字、または付字といつてもいいわけである。しかしここでは、主字と接字ということばを使うことにする。

接字は主字の上と左につく接頭字と、右と下につく接尾字に分けることができ。左と上、右と下はそれぞれ移動可能であることがわかっている。もちろん、左にだけ、上にだけといった、ただ一つの場所にしかつかない接字もある。一般には接頭字と接尾字の交替はおこらないが、ある接字がおなじ主字に対し、どち

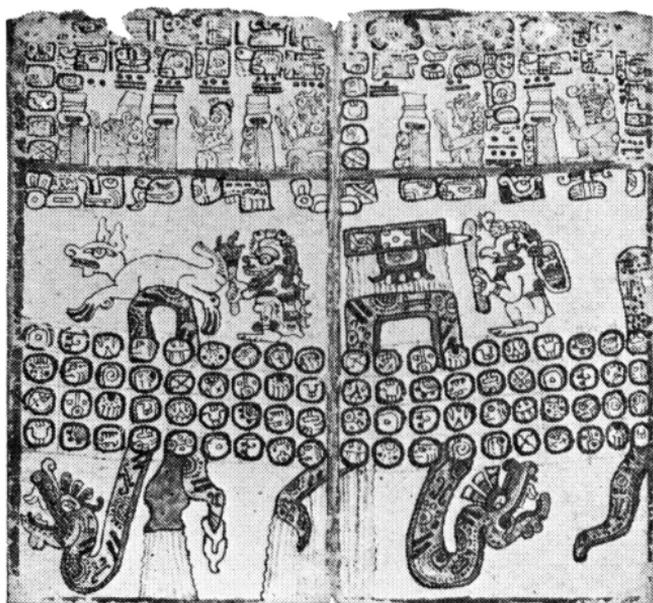
左と上に接字がある場合、どちらも接頭字と名づけたので、どちらを先に読むのか問題になる。右と下に接字がある場合も同様で、どちらを先に読んでいいのか問題になる。このような場合、前接字や上接字、後接字や下接字ということばを使ったほうがいいかもしれない。これらの読み方の順については、これまでのところ、

「左と上にある場合は、左上端を占める接字を先に読む。右と下にある場合は、右下端を占める接字をあとに読む」

とみるのが一番ふさわしい。例外はもちろんあるが、ほぼすべての場合に適用できるので、これも解読のときの指針にしておこう。

少し初めから細かいことにはいりすぎたようだ。細かい問題は実際に文字をみるときに考えることにして、さっそく、暦の文字からはじめることにしよう。

二章 曆とアルファベット



マドリッド絵文書の260日曆の一部

ランダの『ユカタン事物記』

さて私たちの出発点は、十六世紀中葉にディエゴ・デ・ランダが書いた『ユカタン事物記』である。その書には解読の手がかりとなったマヤの月日の文字とその読み方や、ランダのアルファベットと呼ばれている二七の文字と音節的文字の例が三つ記されていた。それにより初期の解読者ブラシユール・ド・ブルブルやレオン・ド・ロニやサイラス・トーマスなどが解読をはじめたように、私たちもランダの『ユカタン事物記』からはじめることにしよう。

ランダの『ユカタン事物記』は、一八六三年にマドリッドで、ブラシユール・ド・ブルブルにより発見され、翌年出版された。『ユカタン事物記』には、マヤ文字解読の手がかりとなった暦に関する記述のほか、マヤの宗教や儀式、日常生活、ユカタンの風物や自然などの記述がみられるばかりでなく、スペイン人のユカタン発見や征服、教会の歴史などの記述もみられ、その書は当時のユカタンを知るに欠かせない資料となっている。しかしながら、ブルブルが発見し、出版したものは、莫大な量あったと思われるオリジナルの写本、それも一部分の写本にすぎなかった。原文は一五六六年頃、ランダがスペインに一時帰国したときに書かれたようである。残念なことに、その原本はみつかっていない。それゆえ、本書でこれからみる文字も、写本であることを十分に頭に入れておかななくてはならない。

ランダという人は不思議な人である。彼はインディオが保持していた書物や知識を邪悪なものとし、消し去ろうとしたと同時に、消し去ろうとしたそれらの知識やインディオの風俗、習慣に興味をいだき、『ユカタン事物記』として残るその本に、宗教や儀式、日常生活、ユカタンの自然や歴史などを記している。また、異端者を宗教裁判にかけて罰するおそろしき迫害者とみられていると同時に、飢饉に苦しむ難民を救済する聖者のようにもいわれている。おそらく両面をもっていたのであろう。一見矛盾した性格も、彼のファナティックともいえる一途なまじめな性格によるものと解釈したら、納得がいく。ともかくユカタンの司教にまでなった人物である。

一五六二年、マニで宗教裁判が開かれ、ユカタンの多くのマヤ人が罰せられた。その際、ランダ自ら記しているように、焚書が行なわれたのかもしれない。彼はこう書いている。

「我々はこれらの文字で書かれた本をたくさんみつけた。これらは悪魔の迷信と虚偽のほか、なものをも含まぬので、焼きすててしまった。そのため彼らはおおいに悲しみ、苦しんだ」

しかしこの一節はマニの宗教裁判に関するところではなく、文字に関するところに書かれている。実際マニの宗教裁判で本が焼かれたという記録はみられない。ランダ自らいうのであるから、本を焼いたことはたしかであろうが、マニの宗教裁判のとき焚書が行なわれたとする一般に流布している説は正しくないようである。一説によれば二七の書物が焼かれたという。もっともこの数は十九世紀に書かれたもので信用がおけないが、多くの絵文書が焼かれたことはまちがいない。

それらが現存していれば、マヤ文字の解読は、いまよりはるかに容易であったらう。失われてしまったことを嘆いてはもしかたがない。まずランダが残したもののうち、暦の文字からみていこう。

図5に示した文字は、それぞれ二六〇日暦と三六五日暦の文字である。これらはのちにみる絵文書と碑文のなかにある暦の文字と比べても、さほど変化していない。とくに二六〇日暦の文字はほとんど変わっていない。それゆえ暦の文字が容易に同定されたのもうなずける。

しかし、文字の読み方はそうはいかない。ランダはその当時使われていたユカテコ語の読み方を記しているにすぎない。ランダの時代と碑文が刻まれた時代とは、少なくとも七〇〇年近い差がある。碑文時代の読み方とランダの時代の読み方がおなじであるはずがない。このことに深入りする前に、二六〇日暦と三六五日暦とは、いったいどのようなものかをみておこう。

二六〇日暦

図6は二六〇日暦の碑文と絵文書の書体の一例である。図からわかるように多くは二つの書体をもっている。一つは人間または動物の頭を描いたものであり、もう一つは幾何的・抽象的な文字である。頭または横顔を描いたものを頭字体といい、幾何的な文字を幾何体ということにしよう。このようにマヤ文字の多くは二つの同価の書体をもっている。

260日暦



365日暦



図5 ランダの暦

二六〇日暦は、1から13までの数字と二〇の日が順次組み合わさってできる暦である。二〇の日の順は、イミシュ、イック、アクバル、カン、チクチャン、キミ、マニック、ラマツト、ムルック、オック、チュエン、エツプ、ベン、イシュ、メン、キップ、カーバン、エツナップ、カワック、アハウとなる。

この順に1から13までの数字が、とぎれることなく順次繰り返し返すので、二六〇の組み合わせ

せができる。つまり、

二六〇日が一周期の

暦となる。

数字と文字はけっ

して別々に用いられ

ることはなく、たえ

ず一緒に一つの単位

として、すなわち一

日を表わすものとし

て用いられる。だか

ら文字だけを「日」

繪文書



文
頭字体



碑
幾何体



の文字と呼ぶことは適切ではないが、慣用に従い、これら二〇の文字を「日」の文字と呼ぶことにしよう。

たとえば、今日が1イミシュなら、明日は2イック、明後日は3アクバルとなる。一三日目は13ベンであり、それから1イシュ、2メンとつづく。二五九日目が12カワックで、二六〇日目が13アハウとなり、一周期が完了する。

この二六〇日が一周期となる曆には名前があったと思われるが、現在ではそれはわからない。

図6 260日曆



ティカルの神殿Iのリンテル3の一部。9アハウヤ11エツナップ、12エツナップを表わしている文字がみえる。

学者たちは最初アステカ名のトナルアマトルの名を与え、次にツオルキンと呼んだ。現在では、ツオルキンとかシヨクキンとかツオルカンとか、儀式的・宗教的性格が強いところから神聖暦とか呼ばれているが、本書では二六〇日暦と呼ぶことにする。

では、なぜ二六〇という数字が選ばれたのであろう。たとえば、妊娠の期間が二六〇日にあたるのでとか、太陽が頂点から南へ行きまた頂点にもどる期間が二六〇日だから、とかいう意見が

あるが、実際のところはわからない。マヤの天上界は一三層あり、一三の神が支配していたといわれるように、マヤでは一三は重要な数である。二〇も人間の手足の数と一致するためか、マヤ人が使っていた二十進法の単位として重要な数である。そういうところから一三とか二〇が選ばれたのかもしれない。だがこの暦は、マヤ人が用いるはるか以前から用いられていたのである。メソアメリカ全体にいきわたって

いるものである。だから、マヤの考えだけで判断するわけにはいかない。

ともかくこの暦が日常生活に重要な暦であったことはまちがいない。宗教儀式や日々の占が主題である絵文書は、二六〇日暦をもとにしているし、人は生まれた日により性格、将来が決まるという考え方があがるが、その占のもとになるのもこの二六〇日暦である。たとえばグアテマラ高地のキチエ族のあいだでは、8の猿の日に生まれた人は占師になれるという。このように、二六〇日暦は、日常生活とはきつてもきれぬものであった。いまでもこの暦を保持している部族もある。

三六五日暦

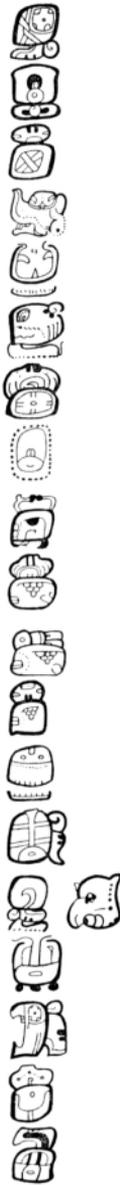
図7は三六五日暦の碑文と絵文書の書体の例である。これにも頭字体と幾何体の二種の書体がある。

三六五日暦は、二〇日がひと月となる月が一八に、不吉な日とされワイエブとも呼ばれている五日がついてできる三六五日が一周期の暦である。この暦はハアブと呼ばれているが、本当の名はわからない。

ひと月は二〇日からなる。そして、各一日の表わし方は、月の名の前に0から19までの数字が順について表わされる。たとえば0ポプ、1ポプ、2ポプとなる。

二〇の数字といったが、正確にいうと、0から19までの数字ではなく、1から19までの数字と、便宜的に0とっているめがね型の文字が数字のかわりについて、合計二〇となる。このめがね型の文字は0ではなく、その月が支配の座につくことを表わしており、「着座の文字」とも呼ばれる(図8)。こういうところにマヤの思想の一端をみることができるかもしれない。時はそれぞれの神に支配されている。日の神、月の神、年の神といった神々が支配につく。ある期間支配し、次の神に支配の座をゆずる。その神が善い神であれば、その神が支配する期間はよい。悪ければ

絵文書



文頭字体



碑幾何体



- ポップ
- ウォ
- シッブ
- ソツツ
- セック
- シユル
- ヤシュキン
- モル
- チェン
- ヤシュ
- サック
- ケフ
- マック
- カンキン
- ムアン
- パシュ
- カヤツブ
- クムク
- ワイエブ

図7 365日曆

その期間は凶である。

0から19までがふつうだが、二〇日目まで数えられることがある。その日は次の月の0の日、すなわち次の月が支配の座につく日でもある。これまで一二例ほど知られているが、とくにヤシユキン月のときが多い(表1)。

二〇日目にあたる文字は、のちに四章でみる、年を表わす「期間の文字」トゥンに接字のついたものである(図9)。ユカテコ語のトゥンにはいろいろな意味があるが、「終り」の意味もあり、この場合、その意味で用いられているにちがいない。

カレンダー・ラウンド

碑文時代には、二六〇日暦と三六五日暦が組になって一つの単位を作った。いいかえれば、一日を表わすのに二六〇日暦と三六五日暦の組が用いられていた。たとえば、昨日が3チクチャン8ケフとすると、今日は4キミ9ケフ、明日は5マニク10ケフとなる。4キミだけでは時の記録として意味をなさないし、9ケフだけでも同じように時の流れの一点を定めることにならないからだ。この二つの暦が組み合わさった暦は、二六〇と三六五の最小公倍数の一八九八〇日で一周期となる。この暦は果てしなく巡ることから、カレンダー・ラウンドと呼ばれている。

二六〇日暦と三六五日暦が組となって一日を表わすわけであるが、その組み合わせにはあるき

着座の文字



0 ソツツ

図 8



0 サック

月の終り トウンの文字



T548



1 エップ 20 ヤシユキン

図 9

通常	トゥン文字使用
19 ヤシユキン	19 ヤシユキン
0 モル	20 ヤシユキン
1 モル	1 モル

表 1

一つずつふえていく。たとえば今年の新年が3アクバル1ポプであるとして、三六五日たった来年は4ラマツト1ポプとなる。さらに年は5ペン1ポプであり、三年目は6エツナツプ1ポプとな

まりがある。図10に示したように、二六〇日曆と三六五日曆を齒車にたとえればわかりよい。三六五日曆が一回転したときには、二六〇日曆はすでに一回転し、さらに一〇五日進んでいる。よって、三六五日たつごとに、二六〇日曆の日はもとの日から五日ずつ先にずれていくし、また一三ある日の係数は一つずつふえていくことになる。三六五日曆が四回まわると、つまりマヤ曆で四年たつと、二六〇日曆の日のほうはおなじ日に戻る。しかし、係数は四ふえる。

いまのことをいいかえると次のようになる。たとえば、三六五日曆のある一日、1ポプを基準にとってみよう。三六五は二〇で割ると五あまるので、三六五日たつごとに1ポプと組になる二六〇日曆の日は五日ずつ先にずれていく。そしてその係数は、 $365 \div 13 = 28 \dots 1$ で一あまるので、

る。四年目にふたたびアクバルとなるが、係数は7となっており、7アクバル1ポプとなる。三六五日暦の月の係数と二六〇日暦の日の組み合わせにも、制限がおこる。三六五を二〇で割ると五あまる。ということは二六〇日暦のある日を基準にとると、四つの係数としか結びつかない。たとえばアクバルは、月の係数が1か6か11か16の月としか組み合わさらない。これらをまとめると表2のようになる。

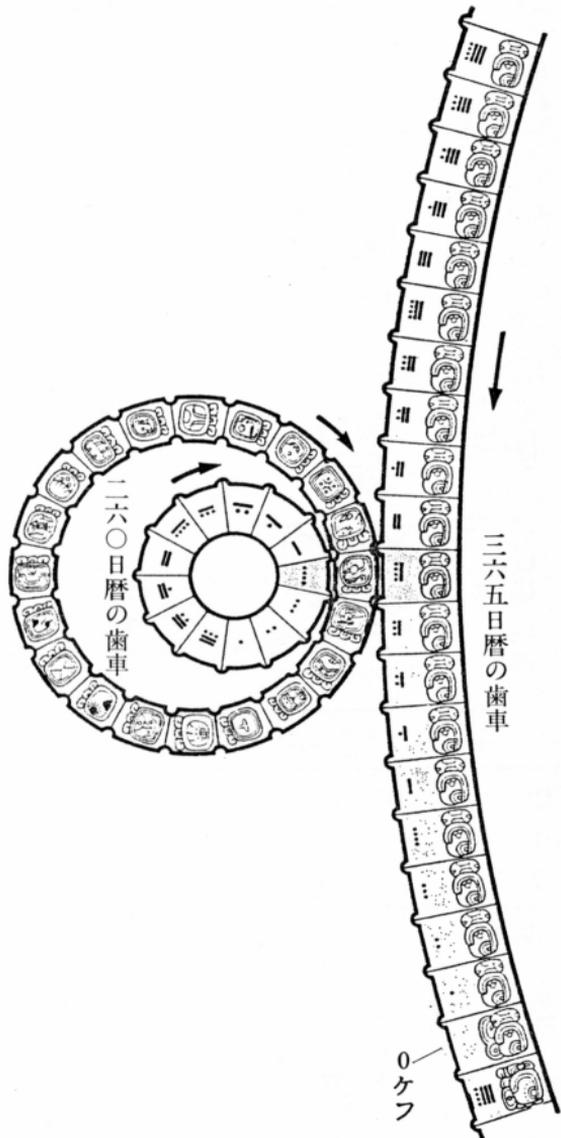


図10

260 日 暦 の 日	365日暦の月の係数
アクバル, ラマツト, ペン, エツナップ	1, 6, 11, 16
カン, ムルック, イシュ, カワック	2, 7, 12, 17
チクチャン, オック, メン, アハウ	3, 8, 13, 18
キミ, チュエン, キップ, イミシュ	4, 9, 14, 19
マニック, エップ, カーバン, イック	5, 10, 15, 0

表 2

表からわかるように、たとえば、キミはかならず4か9か14か19の係数をもつ月としか結びつかない。それゆえ、4キミ9ポプという日は存在するが、4キミ10ポプとか4キミ11ポプという日はマヤ暦には存在しない。もしそういう日があるとすると、それは刻んだ人のまちがいといふことができる。

このような結合関係は、碑文のまちがいを正するときばかりでなく、碑文の月日の一部が、風化したり浸食されたり破壊されて読みとれない場合の解説にも役に立つ。たとえば、日の文字のほうが消え、月の文字のほうが残っているとしよう。月の係数から四つの日のうちのどれかがわかる。月の係数が2か7か12か17のうちのどれかだとすると、日はカンかムルックかイシュかカワックのうちのどれかである。これらはひじょうに異なった文字であるので、一部が残っていると、すぐさま同定できる。

このように、月と日の結びつきにおこる制限は解説の役に立つことがあるので、知っておく必要がある。

これまでみてきたことをまとめておこう。カレンダー・ラウンドは二

六〇日曆と三六五日曆の組み合わせたものであった。二六〇日曆は、1から13までの数字と二〇の文字が順次組み合わさり、一まわりが二六〇日となる曆であった。三六五日曆は、0から19までの数字が一八ある月にそれぞれついて三六〇日となるものに、五日の不吉な日とされるワイエブがついてできる曆であった。

二六〇日曆を日、三六五日曆を月とみれば、私たちの現在使っている曆の月日に相当することになる。たとえば一月一日と私たちがいうのを、マヤ曆では4アハウ8クムクというのである。もちろん、その単位は異なる。私たちの月日が三六五日で一周するのと異なり、二六〇日と三六五日の最小公倍数の一八九八〇日で一周期となる。これをカレンダー・ラウンドといった。

ではたとえば西曆一九八二年にあたる、私たちがいう年のほうはどのようなであろう。マヤ曆にもそれにあたるものはちゃんとある。それを長期曆という。長期曆については四章にゆずって、曆の読みの問題にはいることにしよう。

曆の文字の読み方

曆の文字の読み方は慣用的にユカテコ語が使われている。曆をただ時の流れを記すものとみた場合、どんなふうと呼ばれていようと、仕組みさえわかっていたら問題はない。一九五〇年代まで、解説とは曆の仕組みを説明することであった。おかげで私たちは曆の仕組みについては十

分わかっており、その暦を歴史的な解釈をする枠組として用いるのにもはやなんらの問題はない。しかし、文字を読もうとする場合、いいかえれば、言語的なアプローチをする場合には、いまだもかなりの問題が残っている。

言語的なアプローチの基礎になるのは、暦の文字と、ランダのアルファベットと呼ばれている二七の文字と三つの例である。

ランダは暦については、文字とともにその読み方を記していた。それは当時の文字の読み方を反映している。ランダの与えた暦の文字と、碑文や絵文書の暦の文字はひじょうによく似ているので、ランダの時代の読み方は、碑文や絵文書の時代の読み方とさほど変わっていないだろうと推測できる。ランダが与えた読み方を検討していけば、碑文時代や絵文書時代のその文字や読み方についての知見が得られるはずである。

暦の各文字とその表わす意味、読み方を検討していくと、いくつかの矛盾がでてくる。暦の読み方は慣用的にユカテコ語が使われているが、文字の構成の仕方とその読み方はかならずしも一致していない。ほんとうの読み方がどうであったかを知ることが、その文字の解説につながるばかりでなく、マヤ文字全体の解説に手がかりを与えるものとなる。というのも、暦に使われている文字は、暦として用いられるばかりでなく、そのほかの場合にも使われるからである。

暦の文字が暦以外に使われる例がいかに多いかを知るために、マヤ学の権威であった故 J・エ

リック・S・トンプソンが一九六二年に出版した『マヤ文字のカタログ』をみてみよう。

このカタログは、マヤ文字研究にはどうしても欠かせない重要なものである。マヤ文字の一つ一つに言及するとき、ふつうトンプソンのカタログ番号で記して、その文字をわざわざ描かなくてもよいことになっているほどである。いふなればマヤ文字について語るときの共通語のようなものである。たとえば、図11のカワックはT528とかく。Tはトンプソンのカタログの略号であり、528はカタログ番号である。一九六二年にそのカタログが出版されてから、さらに一〇〇あまりの新しい石碑がみつきり、ほとんど無視されてきた土器の文字の研究も進みはじめた。研究が進み、カタログの分類のまちがいや新しい文字もみつかってきたので、新しいカタログが必要になってきた。しかしまだそのような新しいカタログはできていないので、トンプソンのカタログの重要性は変わらない。

そのカタログには八六二の文字素がある。そのうちわけは、接字が三七〇、主字が三五六、頭文字八八、その他四八である。主字の総生起数は、一二四二五である。生起数の多い上位十番目までのなかに、暦の文字が六つもある。上位三十三までの生起数は六八四九で、全体の五五パーセントを占めるが、そのうちに暦の文字は、イミシュ、カワック、カーバン、キミ、ソツツ、アハウ、シュル、マニック、カン、ラマツト、チクチャンと一一もある。そのほか、上位三三文字のなかに、T528のカワックやT17のヤシュ、さらにはウォヤシップの一部に使われるT

552のように、曆の文字の一部に使われる文字素もあり、曆に使われる文字が曆以外に用いられることがいかに多いかがわかるであろう。それゆえ曆の文字の研究からわかる読み方が、これらの文字の解説に役立つことはもはや自明であろう。

二六〇日曆と三六五日曆は、ユカタンばかりでなく、メソアメリカの各地に残っている。それらが共通の起源をもっていることは、少し比較をするだけですぐさまわかる。数ある曆のなかでも一番参考になるのは、グアテマラ高地マヤに残っていた曆と、意味がよくわかつているアステカ族の曆であろう。

チアパスやグアテマラ各地に残っていた二六〇日曆の日の名前をみると、かなりの日がおなじ名であることに気づく。だがまったく異なる呼び方をされている日もある。

二〇の日のなかですべての言語に共通するものは、二番目の日イックである。ではイックにはどんな意味があるのだろうか。十六世紀の終り頃に書かれたというユカテコ語の最初の辞書であり、文字を読もうとするときもつとも参考になる辞書でもある『モトゥル辞典』をみてみると、イックのところには「風」とか「息吹」とかいう意味が書かれている。そのほかの言語の辞書でみて



T528
カワック

図11

みてもそうだ。では共通起源の曆をもっているといわれるアステカの曆はどうか。アステカ名ではエエカトルというが、表わす意味は風である。オアハカのサポテコ族の曆でも風を意味する。つまりどの曆でも風を意味する。マヤでは

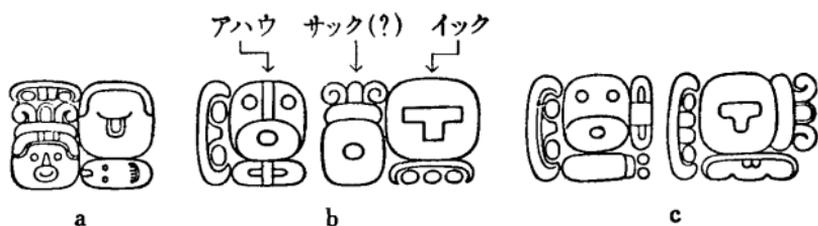


図12

風はどの言語でもイックであるので、暦の二番目の日はイックと呼ばれるのである。

ではこのイックの文字が暦以外に使われる場合の一例をあげてみよう。マヤのテキストには歴史が刻まれていることを証明したプロスクリアコフは、図12の文字群を、死を意味する文字とした。また『モトゥル辞典』には、

bini ik', binam ik' 死ぬ、魂が行ってしまう

とあり、死を意味する表現にイックが使われることがあることがわかる。しかし、死を表わすとみられる文字のイック以外の文字素は、『モトゥル辞典』にあげてある表現に一致しないので、ほんとうに死を意味するかどうかかわからない。だがともかく、イックには死に関する意味が含まれていることはわかる。

ところでこの例(図12)は、文字の書き方という点からみるとじつに興味深い。a、b、c いずれも少し異なるが、おなじ意味を表わす文字なのである。bでは、アハウとイックの文字素が、それぞれの文字の主字となっている。そしてサック(?)の文字素は前接字としてイックにくっついている。ところがaでは、アハウの文字素がサックの文字素に接中字化され、cでは、

イックの文字素が接中字化され、主字に変わっている。このように、いろいろ書けるのである。接字が少しずつ違うのも興味をひく。

いずれにせよ、こういうふうにして、いろいろな辞書やいろいろな年代記や神話に残っている表現から、適切な読み方や意味を探す作業は、マヤ文字の解読法の一つといえよう。

『ポボル・ブフ』から

イックの場合、ユカテコ語の意味から文字の意味がわかって、しかもそれはほかの言語からも裏づけられた。二六〇日曆の文字については、ほかに、ユカテコ語の意味からは文字の成り立ちがわからないものや、またユカテコ語の意味さえわからないものもある。一つ一つの文字について検討していくと、かなりの紙面を費やさねばならないので、もう一例として、ユカテコ語の意味はわかるけれども、文字の成り立ちやほかの曆との関係がもう一つはっきり理解できなかったものが、そのほかの資料から理解できるようになった例をあげることにしよう。

チュエンということばは、ユカテコ語の辞書にはアフ・チュエン（工芸人）としてののっている。チュエンの文字の幾何体はひじょうに抽象化されており、なにを表わしているのかわからない。しかし頭字体のほうは、なにかの動物を表わしていることがわかる。ほかの言語では、この日はバツと呼ばれている。バツは猿である。それゆえ頭字体は猿を表わしていることがわかる。

このことは、アステカ暦のこの日にあたる日のオソマトリが猿を表わすことや、サポテカ暦でも猿を意味することばで呼ばれていることから裏づけられる。ではなぜユカテコ語ではこの日をチュエンというのであろう。これはキチエ族の神話『ポボル・ブフ』から理解できるのである。『ポボル・ブフ』によるとこうだ。

フンバツツとフンチョウエンという双子の兄弟は、フンフンアフプーとシュバキヤロのあいだに生まれた。この二人は、異母兄弟であるフンアフプーとシュバランケーに猿の姿に変えられてしまう。この物語により、高地ではバツツという日がなぜユカタンではチュエンと呼ばれるかわかるのである。

このフンアフプーとシュバランケーが生まれてきた経緯がおもしろいので、そこから話を進めていこう。

フンバツツとフンチョウエンの親フンフンアフプーと、その兄弟ウクブフンアフプーが、地獄シバルバーの主フンカメーとウクブカメーに殺され、埋められた。この二人の兄弟と一緒に埋めるとき、フンカメーとウクブカメーはフンフンアフプーの首だけを切り落として、

「道端に生えている木にその首をつるしておけ」

といった。首がつるされると、それまで一度も実のならなかった木が、実でいっぱいになった。たちまちのうちに実がなったので、地獄の主たちは、

「だれも実を切ってはならない。だれもその木の下へ行ってはならない」といった。

ところが、ある少女がこの木のうわさを聞き、やってきた。その少女シュキックは、「ひゃー、この木の実はなんなのかしら。この木になっている実はおいしいのかしら。一つでもとったら死んでしまうのかしら。気を失ってしまふのかしら」といった。すると枝のあいだにあったフンフンアププーのどくろが、

「なにか欲しいのかね。木の枝になっている丸いものはどくろなんだよ。それが欲しくないのかい」

と娘に向かっていった。娘が、

「ええ、欲しいのです」

と答えると、どくろは、

「よろしい。それではお前の右手をお出し。いいかい」

「いいですとも」

と娘が答えてどくろのほうへ右手をさしのべると、とたんにどくろは娘の手につばをはきだした。そうして妊娠して生まれた子供が、フンアププーとシュバランケーであった。

シュキックはふしだらな女として地獄から追いだされたあと、フンバツとフンチョウエンが

一緒に住んでいた祖母のところへ行き、そこでフンアププーとシュバランケーを生んだ。

しかし祖母は二人を息子の子と認めようとしなかったし、フンバツツとフンチョウエンも二人を弟として認めようとはしなかった。フンアププーとシュバランケーからはなにも傷つけられるようなことはされていけないのに、彼らの心は、この二人に対する悪意にみちていた。

フンアププーとシュバランケーは、毎日吹筒をもってでかけ、射った鳥をもって帰るのだが、ある日、鳥をもって帰らないことがあった。祖母はひじょうに怒って、

「どうして鳥がないの。もっておいで」

すると二人は、

「鳥が木にひっかかってしまったのです。木に登る方法がないのです。兄さんたちが一緒に来て、鳥をおろしてくれればいいのに」

二人はフンバツツとフンチョウエンをこらしめる方法を考えていたのである。

「兄貴たちの姿を変えてやることにしよう。僕たちをずいぶんいじめたのだから、これくらいのことではしてやろう」

こうして二人は兄たちを、数えきれないほどの鳥がさえざっているカンテーという木のところへつれていった。兄たちは鳥をとろうと木に登っていったが、木はぐんぐん高くなり、幹はたちまちのうちに太くなった。フンバツツとフンチョウエンは降りようにも降りられなくなった。そ

こでフンアフプーとシュバランケーはいった。

「下帯をとって腹にくくり、先のほうを長くして、それをしっぽのようにたらすとうまく降りられるよ」

いわれたとおり下帯をひっぱると、下帯はたちまち尻尾に変わってしまい、フンバツツとフンチョウエンは猿の姿になってしまった。

以上がおおよそその筋である。チュエン（チョウエン）とバツツがどのように関係が深いかが、この『ポポール・ブフ』の一節から理解できよう。

フンバツツとフンチョウエンは工芸に秀でていたのだが、それはチュエンの日の占にも反映している。チラム・バラムの『カワの書』や『マニの書』のチュエンの日の占は、

「木の職人、織物の職人が占の特徴。すべての芸術の師匠。人生はたいへん富、大吉。賢明」とある。チュエンとバツツはおなじ意味のことばで、ユカタンではチュエンといい、高地マヤではバツツということばを採用したとみることがができる。

私たちはこのような方法により、日の文字の意味を知ることができるのである。たとえばイミシュの文字はスイレンの花を表わす。イックの文字は風とか息吹であった。文字の意味をみていくと、ジャガーとか猿、イグアナとか、熱帯低地に住む動物が多いことがわかる。二六〇日曆の起源は古く、モンテ・アルバンⅠ期（紀元前五〇〇〜二〇〇年）にすでにみられるのだが、このよ

うにみてくると、その起源は熱帯低地ということができる。

急速に失われつつあるマヤの暦

二六〇日暦は儀式暦、または神聖暦とも称されるように、日々の生活、儀式を支配する暦である。そんなところから、もとの形を残したまま、変化が小さいのかもしれない。

これが三六五日暦になると、呼び方はかなり違ってくる。だが、碑文時代の呼び方がどうであったかを探る手がかりは、こちらのほうが多い。

これらの暦は急速に失われつつある。たとえばイシル族の場合、一九四二年のリンカーンの『グアテマラのイシル族のマヤ暦』という論文には一九の月の名がすべて採録されているが、それから三五年後、筆者がイシル族の部落に行つたとき、ある四〇歳代の人は、

「うーん、じいさんは知っていたなあ」

といい、それから、なんとか二つ三つの月の名を思い出してくれたが、なにしろ使っていないものである。断片的な知識しかなかった。残念なことに、古いものが急速に失われている。ほとんどの部落で、マヤ文明に関するものは跡かたもなく消えてしまっている。

あるとき、私がケクチ語を習っていた女性が私のところに聞きにきた。マヤ文明の数字と暦について教えてくれと。彼女は純粋なマヤ人なのである。低地マヤ文明とかなりの関係があったは

ずのケクチ族の、それも大学生なのである。そんな彼女にマヤの数字体系や曆の仕組を教えていくうちに、おかしな気分になってきた。日本人の私がマヤの曆や数字をマヤ人の子孫に教えている。おかしな気分を紛わすために、饒舌になったのかもしれない。ユカテコ語の数字の読み方と君たちの数字の読み方はこんなに似ているではないか。君たちは偉大なるマヤ人の子孫であるのに、どうしてなにも知らないのか、とたずねてしまった。

「インカ・ニン・ナウ」(知らないわ)であつた。

彼らにとってマヤ文明とは、日本の文化が彼らにとって関係ないとおなじことではかないのである。こんな知識の断絶は文字をもつた世界でおこりうるだろうか。彼らは文字をもっていない。これは文字を失ってしまったからおこりえたことなのかもしれない。文字をもっていた彼らの祖先の世界と現在は、別世界のようなのである。

このような現在のマヤ人たちから、文字に記された王たちの生活を想像することはむずかしい。しかし、曆や宗教儀式などの知識は、彼らのなかに脈々と受けつがれてきた。だから、残っていた曆の比較から、文字の意味や構成の仕方などが理解されるようになったのである。思えば、マヤ文明の謎を解くのは、彼ら自身が一番ふさわしい。しかし、彼らにはほとんどそんな余裕はない。だいたい一日に一ドルくらいしかかせげない彼らは、残念ながら、それどころではないので

ある。

ポプの文字

さて、三六五日曆の文字（五一ページの図7）は、ランダの記した文字（四七ページの図5）とかなり異なっているのにお気づきであったろう。

たとえば最初の月ポプをみてみよう。一番大きな違いは、ランダの文字には碑文や絵文書になり要素④がついていることであろう。しかもおなじ要素が二つある。もしこの要素④がポと読めるとすると、二つあるからポーポ（po-po）である。子音+母音+子音（CV C）というマヤ諸語の基本形態素が、CV+CVと書かれ、あとのほうの音節CVの母音は読まないとしたら、ポプ（pop）と読まれ、月ポプの読み方を記しているとみなすことができる。ちょうど日本語のかなのようなものである。

マヤ諸語の基本形態素CV Cを表わすのに、音節文字CVの結合形CV+CVで表わされ、その場合、後の音節文字は前の音節文字の母音とおなじ母音をもった文字が選ばれる、つまり母音調和するという説は、ソ連の学者ユーリー・クノロゾフが提唱したものである。この説は、すべての場合に適用できるわけではないが、そういう例がマヤ文字資料中にあることは、現在では広く認められている。



[bu]-lu-k(u)

「11」

図13



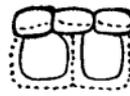
ku-tz(u)

「七面鳥」



tzu-l(u)

「犬」



k'u-k'(u)

「ケツアル鳥」

たとえば図13の文字をみてみよう。左端の文字はドレスデン絵文書の一九ページにでてくる。この文字は、ふつうは点と棒で表わされる数11のかわりに描かれており、11を表わしている。11はユカテコ語でブルック(Buluk)という。この文字は三つの文字素からできている。それゆえ、ブルックを三つに分けて、bu-lu-kuと書くすると、左上の文字素は消えているがbu、右

上の文字素はlu、下の文字素はkuを表わすとみてよい。

図13の左から二番目の文字は、絵文書で七面鳥の絵とともにでてくる文字なので、七面鳥クツツ(kutts)を表わす文字と考えられる。左の文字素は、先にみた数11の文字の下の文字素とおなじであり、どちらもク(ku)と読めるので、その読みは正しいと考えることができる。

そうすると、図13の左から三番目の文字は、ツ(tzu)とル(lu)であるのでツル(tzu)と読める。ツルには犬の意味があるが、この文字が現われるのは犬の絵がある場所である。このようにみえてみると、これらの文字素の読み方は正しいことがわかる。

ポップの場合も、図13の右端にあげたケツアル鳥を表わす文字クツクとおなじように考えることができる。⊗はポ(po)と読めそうである。しかし、この文字素をポと読んですべての場合がうまく説明できるかという点、そうはいか

ない。この文字素は、マヤ人が好んで使う香の形にきわめてよく似ている。この香をポムというので、ポと読む読み方はかなり有力なのであるが、ポという読み方はまちがいかもしれない。ランダの時代はポであったが、碑文や絵文書の時代は違った読み方であった可能性もある。しかし少なくともランダの記した文字はポプと読んで矛盾はない。ランダの時代には、日本語のかなのような役目をする文字があったとみてもよさそうである。

色の文字

三六五日暦の文字（五一ページの図7）は、いくつかの文字素が結合してできているものが多い。とくに色の文字がたくさんでてくる。ウォには黒、シップには赤、ヤシュキンには緑、チェンには黒、ヤシュには緑、サックには白、ケフには赤の文字素が、文字の構成素として生起している。これらの色の文字は、前世紀に解説がはじまってからまもなく発見されたものである。古来、色と方角は密接な関係があった。マヤの場合、赤は東、白は北、黒は西、黄は南と関連があり、緑は中央と結びついていた（図14）。この色と方角との結びつきは、碑文時代からスペイン人征服後まで、変わることがなかった。それゆえ、比較的簡単に解説されたのである。

この色の文字が暦の文字の構成素として用いられているのであるが、文字の読み方に色の名がでてきているのは、サック（白）とヤシュ（緑）とヤシュキンのみである。そのほかのウォやシ



図14 東西南北と色の関係



T552
図15

ップ、チェンやケフは色となんの関係もない。それなのにどうして色の文字が使われているのだらう。これもユカテコ族以外の暦を調べてみればわかる。

ケクチ族の暦といわれているが、実際はチヨル族の暦とみられている暦の、ウォとシップにあたる月は、イカットとチャカットである。チヨル語の黒はイック、赤はチャックであるので、これらの月の名は黒十カット、赤十カットと分析できる。文字は黒十T552、赤十T552であり、この構成の仕方は、チヨル語の月の名の構成とおなじである。それゆえ、T552 (図15) はカットと読めるのではないかと考えることができる。カットには「横または斜めにわたしたものの」の意味があり、偶然かもしれないが、文字の形をよく表わしている。

チェン、ヤシユ、サック、ケフの各文字は、T528 (図11) にそれぞれ、黒、緑、白、赤の文字素がついてできている。ヤシユとサックは緑と白の意味であり、ここでT528をしばらく問題にしないと、暦の名と文字が一致する。

では、チェンとケフはどうなのであらう。これもほかの暦を調べてみれば納得がいく。カンホバ

ル族の暦では、チェン、ヤシユ、サツク、ケフにあたる月の名は、シホム(sihom)に黒、緑、白、赤がついている。チョル語では、シホラ、ヤシユ、サツク、チャツクである。それゆえ、なぜ文字に黒、緑、白、赤の色を表わす文字素があるかが納得できた。つまりユカテコ語の呼び名が文字の表わしているものと違うのは、ユカテコ語では違った呼び名が使われていたところへ文字が導入され、そのまま自分たちが使っていた呼び名でその文字を読んだか、あるいは文字使用中になんらかの原因で呼び名が変わったかのどちらかのためであろう。

それでは、さつき問題にできなかったT528の文字素はなんと読んだらよいのであろう。カンホバル族の暦にあるシホムと読めるものなのであろうか。それともチョル族の暦でヤシユ、サツク、チャツクというように、読まれない文字素なのであろうか。T528は暦として用いられる以外にも、たくさんの使用例がある。ところがそれらの使用例をシホムと読んで意味が把握できるかという点、そうはいかない。ではどのように読むのが正しいのか。一番有力な読み方は、のちにみるランダのアルファベットにあげられている、クである。この読み方は先の図13でみた例、ブルックやクツツという読みからも正しいと思われる。しかし暦の文字に使われているこれらの文字素の場合、クと読んでいい証拠はない。T528は日の文字カワツクであり、また年を表わす文字としても使われる。だからこの場合、色を表わすのではなく暦を表わすしとして、色と区別するためにつけられた決定詞(限定詞)のような働きをするものと考えるのが妥当である。

セツクの文字とマツクの文字

三六五日暦の文字は、文字の構成の仕方や文字の読み方などについて、いろいろなヒントを与えてくれる。いまあげた二つの例のほかにもまだまだたくさん述べたいことがあるが、そのなかからもう二例だけあげることしよう。

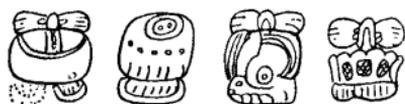
月セツクの文字は、碑文時代と絵文書時代では並び方が違う(図16)。絵文書におけるこの文字の音価は、ランダのアルファベット(図18)にあげられている。それによると、それぞれセとカと読める。マヤ諸語の形態素は閉音節であるので、*se-ka* は *sek* となる。ところが、碑文時代



碑文

絵文書

図16 セツク



1

2

3

4

図17 マツク

では反対に、*ka-se-X* である。碑文時代は *ka-se-X* であったことは、 Chol 語ではこの月を *ka-sew* ということからまちがいないことと思われる。つまり、碑文時代と絵文書時代では、音位転換がおこり、それは文字にみごとに反映されていると解釈できる。マツクの文字を検討すると、マツクの表わし方には、*ma-ka* と *ma-ak* の二種類があったことがわかる。そして書き方には少なくとも四種類の書き方があったことがわかる(図17)。

図17の1、2、3は *ma-ka*、4は *ma-ak* で、ともにマツク

(mak)を表わしている。1と2の下の文字素はランダのアルファベットにある ka であり、3の下の文字素はその頭字体である。4の下の文字素は亀アック (ak) である。そして1、3、4の上の文字素は、ランダが記した例文にみられるマ (ma) である。2の上の文字素は、マ (ma) の音価をもつ別の文字素と考えられる。

それでは1のまん中の文字素 T617 はなにを表わすのであろうか。月マックの限定詞なのであろうか、それともマックという音価をもつ文字素なのであろうか。T617 は土器の文字としてよくでてくる。マックには「とじる、おおう、ふたをする」という意味があり、それと同源と思われるムック (muk) には、「埋める」という意味がある。土器、とくに彩色文字入り土器は、死者の副葬品であることが多い。それらは、死の世界や埋葬儀式に関係するものであることが最近の研究でわかってきた。そうすると、マックの意味に符合してくる。もし T617 がマックと読めるならば、図17の1の例は、T617の上下にその読み方を記す文字を添えたとみなすことができる。ポップでみたものとおなじような例が、碑文時代にもあったのではないかと考えることができる。

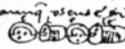
ランダのアルファベット

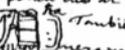
このように、文字に関していろいろな知見が暦の文字から得られるのである。暦の文字の研究

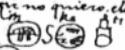
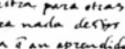
から導きだされる読み方を、それらの文字が暦以外に使われている例に適用してみることは、解読の第二段階といえる。各文字の検討は、それらが生起したときにそのつど行なうことにして、ランダのアルファベットをこれからみていこう。

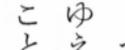
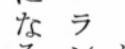
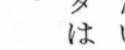
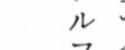
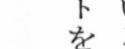
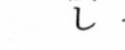
マヤ文字を読むもうとする場合の手がかりとなるものがある(図18)。ランダは、二七のアルファベットとそれを使った例を三つ残した。しかし、この三つの使用例には二七のアルファベットにない文字が三つ含まれている。それゆえ、ランダは三〇のアルファベットを残したことになる。

文字はだいたいスペイン語のアルファベット順に並んでいる。最初の文字は亀(ユカテコ語でアック *ak*)、四番目の文字は道(ベ *de*)、六番目の文字は月セツクを表わしているとみられるところから、ランダはスペイン語式にアルファベットをアー、ベー、セーと読んでいき、インフオーマントは、その音をもつ文字、またはその

de las partes otro y assi viene a fazer un infinitum de mo
se podria ver en el siguiente exemplo. Los quicre dezir loco
y casaca con el, para escribirle con sus caracteres uniendo
las nestras beas entender que son dos letras lo escribim
ellos con tres poniendo a la aspiracion de la ph, la vocal, e
que antes de si trae y en esto no fariaran ning unos si
quisieren ellos de su curiosidad. Exemplo. 

despues al cabo la pegan la parte junta. Ah que quicre dezir
agua por la beas tiene a. h. ante de si lo ponen ellos al
principio con a. y al cabo desta manera 

Tambien
lo escriben a partes de la voz y otra ma    
no putiera aqui ni trahera dello sino por dar cuenta entera
de las cosas desta gente. Membrar quicre dezir no quicre, ellos
lo escriben a partes desta manera 

Signase se en a, b, c.        

De las letras que aqui faltan carece esta lengua
tiene otras medidas de la nuestra para otras
cosas q las ha menester y ya no usan para nada de sus
sus caracteres especialmete la gente meca q an aprendido
las nest

図18 ランダのアルファベット

文字はだいたいスペイン語のアルファベット順に並んでいる。最初の文字は亀(ユカテコ語でアック *ak*)、四番目の文字は道(ベ *de*)、六番目の文字は月セツクを表わしているとみられるところから、ランダはスペイン語式にアルファベットをアー、ベー、セーと読んでいき、インフオーマントは、その音をもつ文字、またはその

音を含む文字、またはその音に近い音をもつ文字を記していったと推測できる。

ランダの文字をみてまず気づくことは、aが三つ、bが二つなど、同じアルファベットに対し、二つないし三つの異なった文字が与えられていることであろう。おそらく、アーやベーという音価をもつ文字がたくさんあったので、それらを列挙した結果、そのようになったものであるろう。

ランダの文字をもう少し詳しくわしくみると、アルファベットとしてスペイン語にあってもそれらに該当する文字が記されていないもの（たとえば ch, d, f, g, j など）がある。さらに、ユカテコ語に存在する音で文字化されていないものもある（t, tz, ch など）ことに気づく。こうみてくると、ランダが残したこれらの文字をアルファベットと呼ぶことは、あまりふさわしくないことがわかる。しかし、それらが音節文字であることはほぼまちがいないが、ここでも慣用に従い、ランダのアルファベットと呼んでおこう。

ランダの文字についてはいろいろな解釈がなされてきた。表音的アプローチというのは、ランダのアルファベットをもとにしている。

最初の試みはランダの書が出版されてからはじまった。ランダのアルファベットをもとにマヤ文字を表音的に解釈しようとしたその試みは、一九〇四年、その主唱者トーマスが自ら放棄したこと、失敗している。二番目は、一九三〇年代から一九四〇年代にかけて、言語学者ウォーフによって試みられた。ランダのアルファベットをもとにしたその試みは、ここでも失敗している。

解読史をみると、ランダのアルファベットをもとに解読しようとする表音的アプローチとその失敗、その反動としての表意的アプローチの台頭、この繰り返しのようにみえる。そのつどランダのアルファベットは、捏造品であるとか役立たずとか、いやランダのアルファベットこそ解読の鍵であるとかいう論が繰り返されてきたのである。

第三の試みは、一九五二年以来のクノロゾフの研究である。クノロゾフはランダの文字を解釈しなおして、マヤ文字に表音文字があることを立証した。その例についてはすでに六八～六九ページでふれた。

ランダの文字はいまでも理解されているとはいいがたい。ランダの文字がうまく理解できないのは、その表わすものがなにかが同定できないためである。たとえば、二、三番目の a や、b の二番目の文字など、いったいなにを表わしているのかわからない。興味深い三つの例文も解釈が分かれている。しかしながら、ランダが与えた読みのうち、*ab* とか *bab* などは、たとえば月マツクの文字の解釈で示したように、それを適用することによって、文字を理解することができた。だから、ランダのアルファベットは十分に理解はされていないが、その読み方が適用される可能性はこれからおおいにあるわけだ。またその読みに近い音が適用されることもある。解読とは、文字どおり、解って読めることである。ランダの残した文字をよくおぼえておき、その文字ができてきたときには、そのつどランダのあげた音価、またはそれに近い音価をあてはめて、検討して

いくことにしよう。

マヤ文字の特徴

ここまでで、私たちはマヤ文字についてかなりたくさんを知った。そこでまとめる意味で、マヤ文字について少し考えてみることにしよう。

私たちの扱っている文字がマヤ文字であることはもう自明であろう。だが二、三例をあげてそれを確認しておこう。たとえば月ソツツはコウモリの文字であったが、ソツツはマヤ諸語で「コウモリ」を意味する。月ヤシュキンは、ヤシュとキンの文字から成り立っている。カーバンという日の文字は、カップという文字素からできている。カップには「大地、世界」という意味のほか、「はちみつ、みつばち」という意味がある。絵文書ではその両方の意味で使われている。たとえばマドリッド絵文書の一〇三〜一二ページのみつばちを扱った章に、その文字がみつばちを表わす文字としてでてくるし、ドレスデン絵文書の三〇ページや四二ページなどでは「大地、世界」という意味で使われている。

このように文字と言語が符合するところから、マヤ文字であることは疑いないのである。

では、マヤ文字の特徴とはいったいどんなものであろうか。暦の文字の考察から、私たちは数多くの知見を得た。そこでいままでみたことでわかったことをまとめながら、マヤ文字とはどん

な文字なのかをみていこう。

まず、マヤ文字の多くは、二種類の同価の文字をもっていた。一つは幾何的、抽象的、図形的、象徴的ともいえる文字で、もう一つは人間や動物の頭を文字にしたものである。前者を幾何体といい、後者を頭字体と呼んだ。幾何体と頭字体の例は曆の文字のところであげたが、ここで一度整理しておこう。

幾何体と頭字体の関係には三つの型がある。図19の一番上の例は、幾何体と頭字体の形は異なるが、ともに共通の要素をもっている例である。これが一番多い。まん中の例は、一見したただけでは同価であることがわからない。しかし、いろいろな生起例から、意味を変えずに交替するところがわかったものの一例である。一番下の例は、幾何体の形を顔の形に変えただけのものである。こういう三つの型がある。



図19

幾何体と頭字体は、一方が抽象的な文字で、もう一方は具体的な文字、絵文字的な文字といえることができるかもしれない。発生的にはふつう頭字体のほうが先である。幾何体には左右対称、またはそれに近いものが多い。頭字体のほうは、ふつう顔は横向きで、しかも左を向いている。しかし正面を向いている字や右や上、または下

を向いている字もある。右側を向いている場合のほとんどは、テキスト全体の文字も反対向きで、通常の読み順である左上からとは反対に、右上から読まれる。しかし左向きの文字テキストのなかに、右や上、下を向いた字もある。左横向きの字を正字とすれば、これらは変体といえるが、正字とおなじ形をもつ文字の場合、たんに向きを変えたこととみなすより、伝えるべきものやさすものの違いや、読み方の違いなどを表わそうとしたものと考えることができる。たとえば、図20の1の左側のカエルはウィナル(一〇〇ページ参照)を表わす文字であるのに対し、上を向いたカエルは「誕生」を表わす。図20の2の例の左は月ソツツであるが、ひっくりかえったコウモリは「期間の終り」を示す文字として用いられる。これらは同じ文字であるのに、向きが違うことで、異なった意味をもっている例である。

暦やランダのアルファベットから、マヤ文字にも表語文字や表音文字があることがわかった。色の文字や東や西、ヤシュキンの文字の構成素であるキン(日)は、それぞれマヤのことばを表わしているので表語文字である。ランダが与えた月パシュの文字がヒントになって解読されたパ(Ca)や、東(ラキン)のラ(La)を表わすアハウのひっくりかえった文字素などは、表音文字である(図21)。これらは音節文字である。ランダのアルファベットと呼ばれてきた文字も、実際はアルファベットではなく、音節文字と考えられた。

暦の文字の読みはユカテコ語で読めるものが多いが、ユカテコ語だけでは理解できないものも



1



2

図20 ウィナルとソツ



pax

「パシユ」



pa

「パ」



la-k'in-(il?)

「東」



la

「ラ」



ahau

「アハウ」

図21

諸語ではどうか、たえず問いかけながら音価を探していくことである。ユカテコ語に文字の表わすことばがあつて、ほかのマヤ諸語からも裏づけられればその読みはたしかである。ユカテコ語にはなく、ほかのマヤ諸語から音価が決定されることもある。こういふ作業から、文字が

あつた。その場合、ほかのマヤ諸語をみることで解決がついた。このことは、マヤ文字を読もうとするとき、どういふ態度でのぞむべきかを教えている。ランダが文字の読み方をユカテコ語で示しているように、また、絵文書の文字がユカテコ語で一番うまく解釈できることでわかるように、マヤ文字はユカテコ語に一番近い。しかしながら、記録に残る十六世紀以降のユカテコ語は、碑文時代の言語とおなじであるはずがない。のちにみる数字やテキストの構成からも、マヤ文字は低地マヤ諸語のことばで書かれたことは疑いない。それもユカテコ語に一番近いことばである。しかしユカテコ語そのものではない。ユカテコ語と変わらないものもあるが、もう消えてしまったものもある。変化してしまっているものもある。だから、一番賢明な態度とは、ユカテコ語を中心に読み方を考えていくことであるが、ユカテコ語だけではだめであり、かならずほかのマヤ

刻まれた当時の言語がいろいろな形態をとっていたかがわかってくるはずである。

文字の構成の仕方もいろいろな場合があることを知った。日本語のかなのような役目をするものもあった。くさび形文字にみられる限定符の役目をする文字もありそうなこともわかった。

文字は、ふつう、大きな文字素に小さな文字素がついて構成されている。それは三六五日暦の文字をみればわかる。大きい文字素と小さい文字素の働きの違いは、いまだに問題のあるところで、一応、大きい文字素を主字、それについて生起する小さい文字素を接字と呼ぶことにした。トンプソンのカタログによると、接字は三七〇、主字は四九二あった。

接字と主字の読み順は、接頭字—主字—接尾字の順とみておいてよかった。そして接頭字が左と上にあるときは、左上端を占めるほうが先であり、接尾字が右と下の両方にあるときは、右下端を占めるほうがあとに読まれる、という原則もみた。

図 22 にあげた文字は、パレンケの大王パカルの名を表わす文字である。左下は楯を表わす表意文字とみなせる。楯はチマルとかパカルという。右はパカルの表音表記で、パーカーラ (Pa—ka—ri) と書かれている。簡単にいえば、左は意符、右は音符とみなすことができる (なお、左上の文字素はラウンズベリーによると、マフ キナ *mah kina* と読まれ、称号を表わす)。これは漢字の構成の仕方でいうと、形声にあたりそうだ。しかしこの場合、漢字に振りがなをつけた形により近いのかもしれない。まだまだ理解できて読める文字は少ないので、分類できるところまではいって

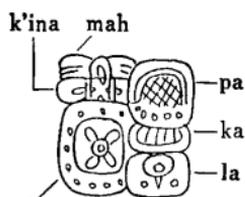


図22 バカル王

いないが、漢字の構成の仕方を分けた六書りくしよにあたるものが、マヤ文字にもあると思われる。

「誕生」を表わす文字

いままで述べてきたことは、一つの解読法を示している。この方法で解読された曆やアルファベットの文字は、その文字の正確な音価とはいえないにしても、本当の読み方につながる音が知られていた文字である。手がかりになる読み方があったので、その音と文字を検討していけばよかつたのである。これは有力な方法ではあるが、文字の読み方がわからないものにはもちろん適用できない。文字の読み方がわかつていたものは、曆や色や方角の文字くらいのものである。ほとんどの文字は読み方などわからない。わからないほうがふつうである。

しかし、読み方がわからない文字でも、読める場合がある。マヤ文字は絵文字的性格の強い文字である。なにを表わしているのか十分わかる文字も結構多い。もし文字がなにを表わしているのかわかるなら、その文字の表わすことばをマヤ諸語から探せばよい。たとえばジャガーが描かれていれば、マヤ諸語のバラムという読み方を与える、という作業を行なう。だがこれだけでは読めたことにはならない。そうした文字がいろいろな場面に用いられていたり、違った使い方の例がある場合、その一つ一つの場合に、そうして得られた読み方をあてはめて検証しな

ければならない。

一つひじょうに美しい例をあげてみよう。図20の1の左に示した文字はカエルの文字である。このカエルの文字はウィナルの文字として用いられる。その右のカエルが上向きになった文字のほうは、プロスクリアコフがイニシアル・デートの文字としたもので、「誕生」を表わすと考えられていた。「カエル」はツェルタル語でポコックという。チヨル語ではシュポコックまたはシュペケックといい、チヨルティ語ではペクペックという。マヤ祖語はポックまたはペック(**poq/peq*)と再構できる。一方、「月」はケクチ語やポコムチ語ではポという。おそらくマヤ祖語ではポック(**poq* または **poq*)であったと思われる。もう一つの「生まれる」は、ポコムチ語ではポキック(*poq'ik*)という。キチエ語のポコフ(*poq'oh*)にも「生まれる、芽をだす」などの意味がある。つまり、「カエル」と「月」と「生まれる」は、同音異義語とみなすことができる。しかし、正確にいうと違う。「カエル」は *poq* であるのに対して、「生まれる」は *poq'* であるからだ。

p は *q* の声門閉鎖音で、よく似ているが、違った音である。*p* と *q* をマヤ人は絶対に混同することはない。だから正確にいうと、同類音異義語である。*p* と *q* は違った音なので混同してはいけないのだが、この場合は許されたにちがいない。そう考えないと、「カエル」の文字が「月」や「誕生」を表わす文字として用いられた理由がわからない。カエルが上向きになっているのは、

「誕生」を表わすためであり、「月」に用いられるカエルと区別するためにそうされたと解釈できる。

文字がなにを表わしているのかわかるものの解読方法について述べたが、文字が表わすものさえわからぬものもある。そのような文字の意味を把握するためには、まず、生起位置が重要である。生起位置により、動詞か名詞の推測がつく。文字テキストに付随して場面が描かれていると、なにについて記しているのか推測できる。記された曆の日の間隔から、文字の意味が推測できることもある。いままでのところ、このような方法により文字が解読されてきた。それらの例は、テキストを解釈していくときに述べることにしよう。

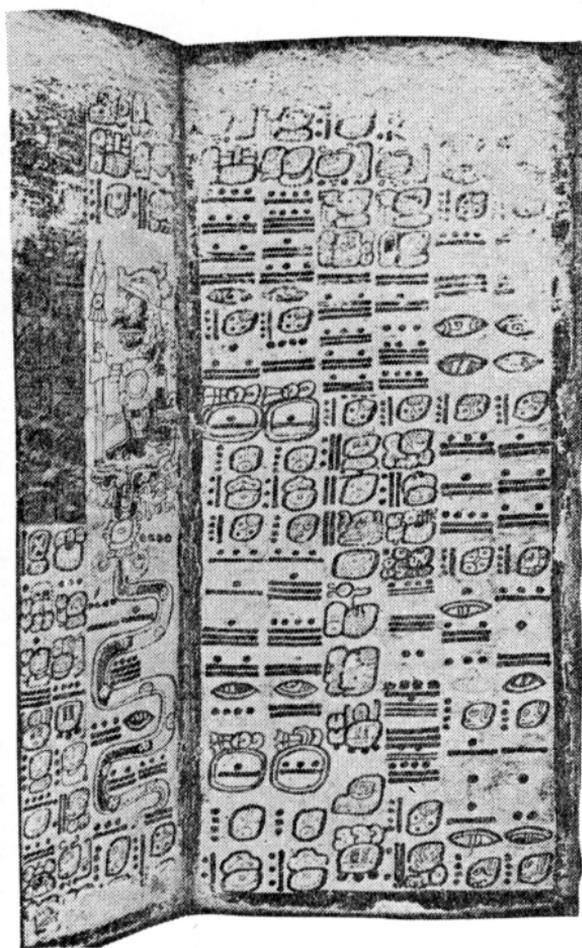
こういうふうにして、私たちのマヤ文字に対する知識は豊かになってきた。しかしながら、十分にマヤ文字についてわかっていないわけではない。そこで少し別な観点からマヤ文字について考えてみよう。

マヤ文字の数は、現在でも正確にいうことはできないが、だいたい八〇〇〇字ある。この数字からみて、マヤ文字は、アルファベットの体系をもつということはできないし、また音節文字だけということもできないであろう。表意文字体系としたら少なすぎる。約八〇〇〇字という数字からは混合体系の文字とみなすことができる。私たちはすでに表音文字と表語文字の存在を確かめた。表意文字については、その定義があいまいなため、表語文字ということばが用いられるようにも

なつたのであろうと思うが、一定の意味を表わす文字としたならば、もちろんそのような文字も存在する。いろいろな意見も分かれているが、マヤ文字がこのような混合体系であるということは、もはや疑いを入れないものであろう。ちょうど日本語の文字体系によく似ている。マヤ学の泰斗マイケル・コーがいったように、マヤ文字の研究には日本人が一番向いているのかもしれない。たしかに、アルファベットしか用いない欧米語の文字体系に比べればるかに複雑な文字体系をもつ日本人は、欧米人より有利かもしれない。マヤ文字を解読しようと思えば、マヤ文字やマヤ諸語を知る必要があるわけであり、そう簡単にはいくまいが、しかし、少なくとも、その文字感覚というものは役に立つにちがいない。また役に立ててこそ、あまり進展のないマヤ文字解読に、なんらかの新しい手がかりを与えることができるにちがいない。

マヤ文字を解読するためには、数字とか長期暦とか、まだまだ知っておかなければならないことがたくさんある。私たちは、日本人がマヤ文字解読に向いているというこのお世辞を信じて、もうしばらくは基本的なものをじっくり学んでいくことにしよう。次章は数字である。

三章
数字



ドレスデン絵文書にみられる数字

丸と棒で表わす方法

数を表わす文字をもたないテキストというのはほとんどない。二六〇日曆にも三六五日曆にも、四章でみる長期曆にも、数字がでてくる。数字は、これらの曆に用いられるばかりでなく、ある日とある日のあいだの日数の計算や月齢や金星曆の計算、さらにはマヤの神々の名の一部にまで用いられている。また数自体が神聖なる神として崇められていた。数はこのように、マヤ文字資料中、重要な役割を担っている。

数字を表わすのには四つの方法がある。

もっとも多く用いられ、しかももっとも簡単な表記法は、点または丸と棒による表わし方である。丸は1、棒は5を表わす。たとえば8は、一本の棒と丸が三つで表わされる。12は二本の棒と二つの丸で表わされる。

マヤの数字体系は二十進法である。だから20以上だと、位置が重要となる。たとえば、17は17の上に8がおかれる。ある位が0の場合もあるわけで、その場合、貝を様式化した文字が使われる。820は、0と5と2を表わす、貝と棒と丸二つが、下から上へ順におかれて表わされる。すなわち下から上へ位が高くなっていく。

点と棒による表記を私たちが転記する場合、高い位から低い位へ、アラビア数字と黒マルを使

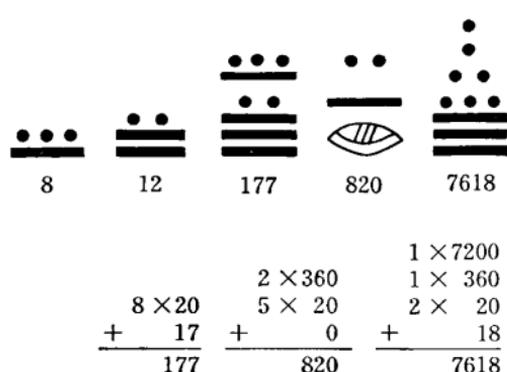


図23 数字の表わし方

って書くことにする。たとえば177は8・17で、820は2・5・0と書く。位置によって位を表わす表記法は絵文書で用いられている。碑文では、それぞれの位は決まった文字で表わされる。これらは「期間の文字」というが、それは長期暦を扱うときにみることにしよう。

ここでお気づきになったかもしれないが、第二桁目は二十進法に従わず、18までしか数えられない。つまり、十八月(ウイナル)で一年(トゥン)になる。それゆえ三桁目の単位は三六〇である。一桁目が一の位、二桁目が二〇の位で、三桁目は三六〇の位となる。以下は二十進法に従い、四桁目は七二〇〇の位(三六〇×二〇)、五桁目は一四四〇〇〇の位(七二〇〇×二〇)となる。

私たちが実際にみることができるのは、暦に関する例しかない。しかし、暦以外の数を数えるときには完全な二十進法が用いられていたようである。そのことはランダの記述からわかる。『ユカタン事物記』には、カカオ豆を数えるのに完全な二十進法が使われていたことが記されている。また、高地マヤのカクチケル族のように、暦でさえ一年を四〇〇〇日にして、二十進法を守っていた部族もある。

点と棒による数表記は簡単であるが、碑文では裝飾要素がつくため、碑文が消えてはっきり読めないとき、正しく読み下せない場合が生じてくる。たとえば5を表わす棒の内部に裝飾のための線がはいっていると、本来5を表わすはずの一本棒が二本あって10を表わしているように見える。また、6や7の場合だと、1を表わす丸の占めたあと之余白がたくさんできるので、それを埋めるために、三ヶ月形などの裝飾要素が用いられる。テキストが不明な場合、それらの裝飾要素が1を表わす丸と区別がつかなくなつて、6や7が結果として8にみえることになる。ふつう丸が一つだと両端に二つの三ヶ月形の裝飾物が、丸が二つだとまん中に三ヶ月形の飾りがつき、結果として3を表わしているようにみえる。だが、二つの丸に二つの三ヶ月形要素がつくこともあるし、四つも丸があるのにさらに裝飾要素として三ヶ月形の要素がつくこともある。

初期のテキストにはこのような裝飾物はないが、後期にはいると、これはごくありふれたものとなる。さらに時代が進むと、裝飾要素は三ヶ月形から×印に変わっていく。また、全般に裝飾物は少なくなる。

このように、テキストがはっきりしていないと数字をまちがって読むことがおこる。しかし、マヤのテキストには、ふつう、日付がいくつもできて、その日付がたがいに関連し合っているので、少しくらい不明のところがあつても、計算から正しい数、正しい日を導くことができる。また、テキストそのものの書きまちがあるもので、たんに読み下すばかりでなく、かならず、

日付の確認を計算からもする必要がある。

頭字体で表わす方法

二番目にみる表記法は、頭字体による数表記である。

図24に各数字の文字をあげたが、それぞれほかと区別がつく特徴をもっている。たとえば、2だと頭上に握りこぶしをもっているし、5だとトゥンの文字をもっている。4や6は目に特徴があり、9はあごにひげがあるか額にヤシユの文字素をもっている。10はあごが骨に置き換わっており、額の前に「死の目」をもっていたり、ほほに%印をもっていたり、死の象徴がある。13以降はあごが骨に換わっただけで、あとは3から9までの頭字体とおなじである。ただし13だけは長くたれさがった鼻をもった別の頭字体がある。完了または0は、あごが手に換わった頭字体によって表わされる。

13から19までの文字は、3から9までの文字のあごが骨に換わっただけで表わされるのがふつうである。しかし、13の文字の二番目にあげた例のように、3を表わす頭字体と10を表わす頭字体を並べて13を表わしたり、19の文字の二番目にあげた例のように、9を点と棒で表わし、10を頭字体で表わして、二つ並べて19を表わす例など、少し変わった例をみかけることもある。こういった少しばかり変わった例をみると、マヤ人の書記(彫刻)者のなかにも、型にはまった文字

を刻むのがいやで、ちょっと変えて表わしてやろうとした人がいたのではないかと思えてきて、楽しくなる。

同定がむずかしいのは、1と8であろう、どちらも女神の横顔で、よく似ている。しかし、区別がつきにくい場合や、消えていて示差特徴がよくみえない場合でも、計算からどの数字を表わしているのか導けるので、それほど問題はない。

13以上は10の特徴のあご骨がついているが、11と12にはついていない。これはマヤ諸語の数体系をみれば納得がいく。

ユカテコ語では10をラフン、11をブルック、12をラファ、13をオシユラフンという。13以上は3（オシユ）に10（ラフン）、4（カン）に10（ラフン）という形成法をとる。つまり10を表わすラフンがついてできる。しかし、11と12はブルック、ラファといい、1+10、2+10という形をとらない独得のいい方をする。文字はどうかという点、これも、10を表わすあご骨が13以上の数にはついていないのに対し、11と12はそのようなあご骨がついていない独得な形をしている。つまり文字はマヤの言語を反映している。それも低地マヤ諸語の言語を反映している。というのは、高地マヤでは、11は、たとえばケクチ語で、フンラフー、12はカブラフーといい、1+10、2+10の形成法をとり、低地マヤ諸語のいい方と異なる。文字のつくり方と一致しないので、マヤ文字のことばは高地マヤ諸語ではない、ということができる。

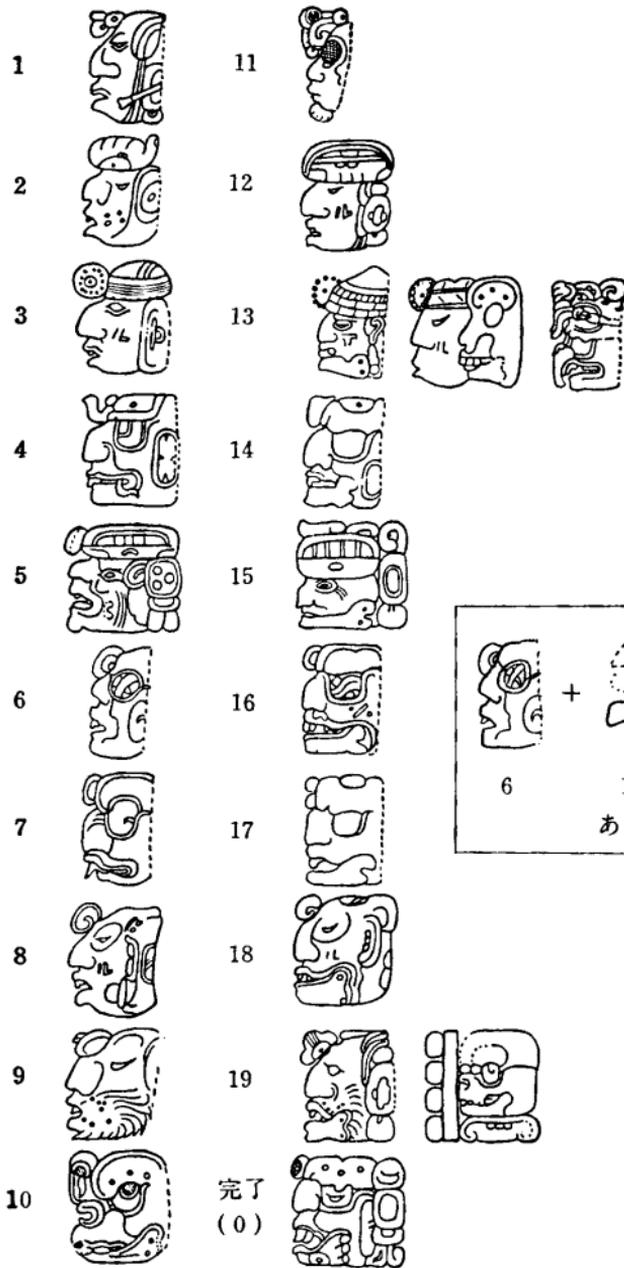


図24 頭字体で表わされた数字

幾何体で表わす方法

三番目にみるのは、少ししか例がないが、幾何体によって表わされた数字である。

指は1を表わす。また、ドレスデン絵文書の九ページに、3を表わす文字として、図25の二番目の文字が使われている。図24で示した3や13の頭字体と比べると、絵文書の場合は頭がアハウに換わっているが、頭字体の変形した文字とみなすことができる。

4は太陽神を表わし、8はトウモロコシの神を表わすといわれている。そのことは、頭字体の表わす横顔がそれらの神を描いていることからわかるが、幾何体でも、太陽とトウモロコシで4と8を表わす例があることから納得できる。コパンの石碑1では、太陽の印(キン)で4を表わし、8はトウモロコシを表わす印で飾ってある。

完了または0は、絵文書では貝を様式化した文字で表わされる。碑文では、図25の上から六番目の例からわかるように、二種類ある。右のほうの例は、頭字体のあごが手でおおわれていたように、手が描かれている。

ところでこれらの文字は完了または0を表わすといってきたが、いまだに完了を表わすのか0を表わすのか決着がついていない。しかし、手(EM)には「完了」の意味があるので、これらの文字は「完了」の意味で使われているにちがいない。というのも、パレンケの「十字の神殿」の

パネルのB13には、図26のような文字で20が表わされているからだ。左半分の文字素は、図25の六番目の文字素である。右半分は20を表わす文字素である。もし左が0であれば、0になってしまふ。完了であるとするとも20が完了したということ、20を表わすことになる。だから、完了を表わすと考えたほうがよいのである。

20は月を表わす文字で表わされる。もっとも興味深い例は、ドレスデン絵文書の一九ページの上段の11を表わす文字である。残念ながら一部消えてはつきりわからない。しかし、右上と下の文字素はランダのアルファベットの「1」と「20」である。ユカテコ語で11はブルックといふので、もし消えている左上の文字素が「10」を表わす文字素だとすると、全体で「10-11-20」と読まれ、ユカテコ語の11の表わし方と一致する。

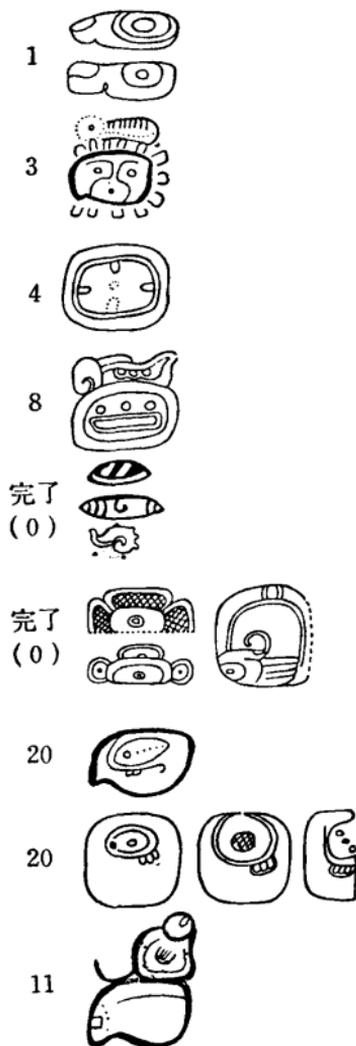


図25 幾何体で表わされた数字



図26 「十字の神殿」の20

先に、マヤ文字は低地マヤ諸語のことばで書かれているといった。現在、低地マヤ諸語は三つのグループに分けることができる。絵文書の文字は、そのなかでもユカテコ・グループの言語で書かれたとすることができる。というのは、残り二つのグループである Chol・グループとツェルトル・グループでは、 π の口蓋化がおこり、 η をブルツチというからである。もしこれらのグループの言語を反映したものであったら、 π の文字ではなく、 ch (η) の音価をもつ文字が使われたであろう。もちろん文字の正書法が定まって以後——ドレスデン絵文書が書かれたのは一三〇〇—一三二五〇年頃といわれているので、それ以後—— π から ch への口蓋化がおこったのなら、いまの推定はまちがいということになるが、そのほかの証拠からもユカテコ語に一番近いといえるので、その推定は正しいとみることができる。

では、低地マヤ諸語の言語を反映しているという碑文時代の言語のほうは、どのグループが一番近いのであろうか。これに対する答はまだ明確にだせないが、やはりユカテコ語に近いと思われる。しかし碑文時代にも現在とおなじような方言的な差があつた可能性はある。パレンケやコパンの周辺では、いまでも Chol 語や Chol ティ語が話されている。この二つの地点が、地理的にかなり離れているにもかかわらず、ことばがよく似ているのは、以前パレンケからコパンにかけて同一のことばが話されていたからである。これらの場所の碑文は、ペテン地方の碑文と少しばかり趣きを異にしている。この違いは方言の差にもとづくと考えられてもおかしくない。少し

三章 数字



9 バクトウン



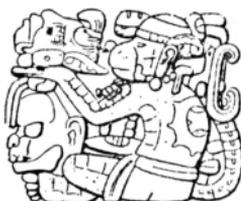
15 カトウン



10 トウン



0 ウィナル



16 キン

図27 全身像で表わされた数字

最後に、マヤ文字の傑作ともいえる全身像で表わされている数字をみてみよう。これらは一見ただけではなにを表わしているのかわからない。しかしよくみると、頭字体のところであげた示差特徴をその頭のところにもっていて、いかなる数を表わしているのかわかる仕組になっている。たとえば、図27の一番上の例は、あごのところの点ががあるので、9だとわかる。二番目は頭がトウンの文字で、あご骨が描かれているので15である。三番目はあごが骨に換わっているので10、四番目はあごが手に換わっているので0である。一番下の例は、目が×の字になっているので6であるが、その下に頭蓋骨のような頭であご骨をもっている10を表わす文字があるので、16

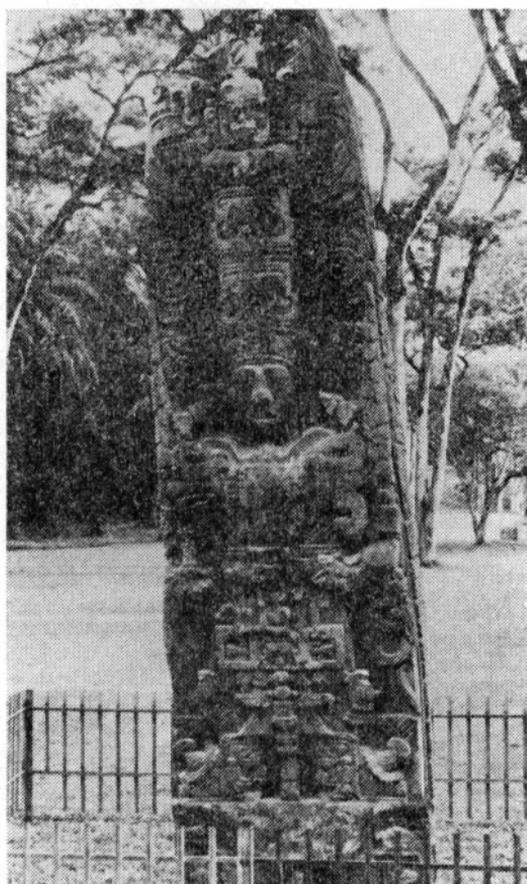
全身像で表わす方法

ずつそれを裏づける証拠があがってきているが、まだまだ結論をだすのは早すぎるので、このような方言的差があった可能性はおおいにある、というだけにとどめておこう。

である。

例にあげた全身像の数は、いずれも次章で述べる「期間の文字」と結合している。左側が数字、右側が「期間の文字」である。これらは全身像で描いた数字のなかでも、わかりやすい例ばかりである。ひじょうにわかりにくい例もあるが、マヤの暦表記は、いろいろな暦で時を定めようとした暦、いいかえれば、冗長度の高い表記法であるので、そのほかの情報から、まちがいをなく読み下せる。

四章
時を記す方法



キリグアの石碑D

長期暦

西暦がキリストの誕生を起点としてできているように、マヤ暦も暦のはじめとなる日が決まっていた。マヤ人は、このような、ある日が暦のもととなる日から何日たったかを正確に記すことができる絶対暦ともいえる暦表記法をもっていたのであるが、この暦を私たちは長期暦と呼ぶ。

長期暦は五つの期間、または時の単位からなる。その単位は、バクトゥン、カトゥン、トゥン、ウィナル、キンという。キンとはユカテコ語で、日または太陽を意味する。キンが二〇集まると一ウイナルとなり、18ウイナルで1トゥンとなる。そして1カトゥンは20トゥン、1バクトゥンは20カトゥンからなる。トゥンをのぞくと、二十進法に従っている。これらの単位を日に換算すると次のようになる。

1バクトゥン 〓 一四四〇〇〇日 (20×18×20×20)

1カトゥン 〓 七二〇〇日 (20×18×20)

1トゥン 〓 三六〇日 (20×18)

1ウイナル 〓 二〇日

1キン 〓 一日

なぜトゥンのところだけ二十進法に従っていないのか、ほんとうのところはわからないが、お

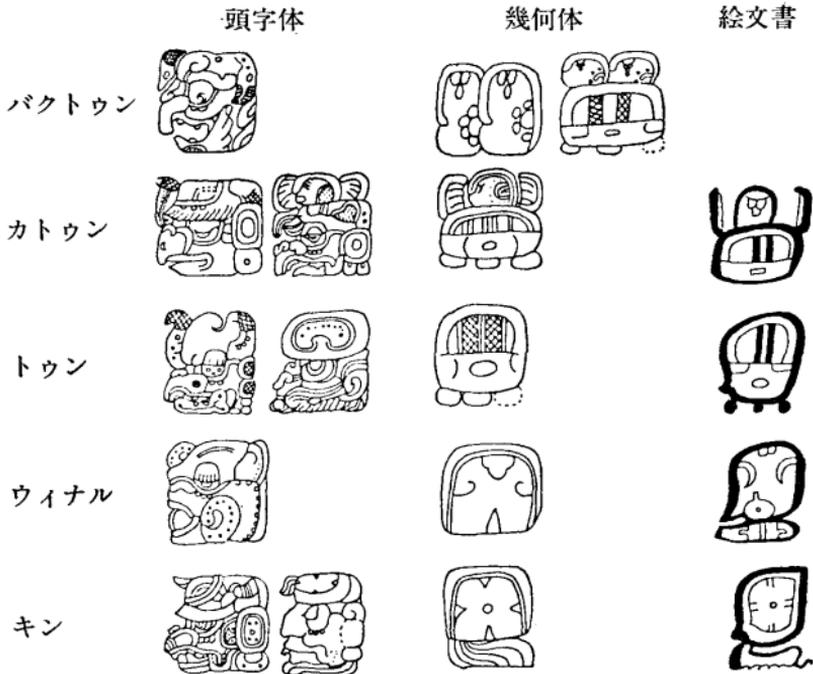


図28 期間を表わす文字

そらく、一年の実際の長さに近づけるために、18ウィナル、日になおすと三六〇日まですでうちきったのであろう。二章で述べた、三六五日が一年のハアブと混同しないようにしてほしい。

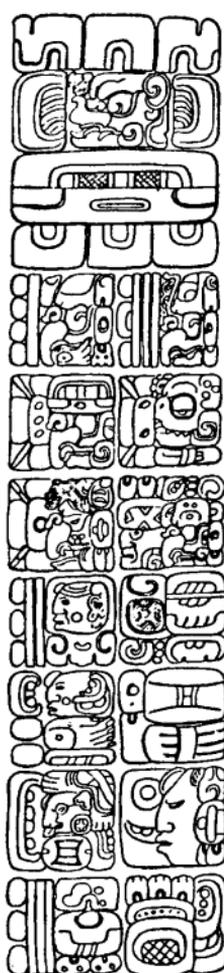
これらの単位の名前はマヤ学者がつけたもので、実際はどう呼ばれていたのかわからない。ただ、キンとトゥンについては、マヤ人もそう呼んでいたようだ。それで慣用に従い、本書でも、バクトウン、カトウンといった呼び方をすることにしよう。

これらの期間を表わす文字にも、頭字体と幾何体の二種類がある。その例を図28に示した。

時はこれらの期間を表わす文字に、数字がついて表わされる。たとえばキリグアの

石碑 E (東面) では (図 29)、バクトウンに点と棒で表わされた 9 の係数がつき、カトウンには 17、トゥンとウイナルとキンには 0 の係数がついて時が表わされている。これを私たちが書く場合には、数字と黒マルを使い、9・17・0・0・0 のように表わす。その日は 13 アハウ 18 クムクになる。

この 9・17・0・0・0 13 アハウ 18 クムクという日は、もちろん暦の起点から数えたものである。その起点とは、13 バクトウン・0 カトウン・0 トウン・0 ウイナル・0 キン 4 アハウ 8 クムクである。



導入文字	
9 バクトウン	17 カトウン
0 トゥン	0 ウイナル
0 キン	G9 F
13 アハウ	E/D
2C	X3
B	10A
18 クムク	

図29 キリグアの石碑 E (東面)
(A. P. Maudslay 画)

ちょっとみると、 $13 \cdot 0 \cdot 0 \cdot 0 \cdot 0$ 4アハウ8クムクを起点にしているのが不思議に思われるかもしれない。しかし、わかりやすい例は身近にある。時計の針が12をさしたとき、私たちは0時といたり12時といたりする。ちょうどそれとおなじである。0時を12時というように、 $0 \cdot 0 \cdot 0 \cdot 0 \cdot 0$ を $13 \cdot 0 \cdot 0 \cdot 0 \cdot 0$ というようなものである。つまり、マヤ人は13バクトゥンを一大周期と考えていたのである。

$13 \cdot 0 \cdot 0 \cdot 0 \cdot 0$ 4アハウ8クムクは、それでは私たちの暦ではいつ頃なのであるか。マヤ暦と私たちの暦との関係については、十指にあまる説がある。そのなかで一番有力なのは、グッドマン・マルチネス・ストンプソンの説である（頭文字をとりGMT説ともいう）。それによると、紀元前三一一年八月十一日（グレゴリウス暦）がその日にあたる（天文暦では三一一年八月十一日）。

$9 \cdot 17 \cdot 0 \cdot 0 \cdot 0$ 13アハウ18クムクは、 $13 \cdot 0 \cdot 0 \cdot 0 \cdot 0$ 4アハウ8クムクという起点から、9バクトゥン・17カトゥン・0トゥン・0ウィナル・0キンだった日を表わす。日に換算すると、一四一八四〇〇日たった日を表わしている。それは私たちの暦になおすと七七一年一月二十二日である。

これからたくさんマヤ暦がでてくる。マヤ暦がでてくるときにはできるかぎり西暦を添えることにするが、マヤ暦と西暦の関係を大筋のところは知っておいたほうが便利なので、ここで、区

切りになるマヤ暦が西暦ではいつ頃になるかをあげておこう。

8・12・14・8・15 二九二年

(マヤ最初の石碑、ティカルの石碑29)

9・0・0・0・0 四三五年

9・5・0・0・0 五三四年

9・8・0・0・0 五九三年

9・10・0・0・0 六三三年

9・15・0・0・0 七三一年

10・0・0・0・0 八三〇年

10・4・0・0・0 九〇九年

古典期前期

古典期後期

イニシャル・シリーズ

さてこの長期暦は、ふつう石碑の最初にでてくる。最初に生起するところから、イニシャル・シリーズとも呼ばれている。バクトゥン、カトゥン、トゥンなどの期間を表わす文字が係数を伴って生起するが、その上に、ふつうほかの文字と比べて大きい文字がある。これを導入文字という。

この導入文字はトゥンの文字と二種類の接字からできている。T124と、くし形の接字（T25）または魚の接字（T203）である（図30）。くし形の接字のあいだには、図29にあげたキリグアの石碑Eの場合、頭字体がある。これは三六五日暦の月と関係があり、月が変われば変わる。それゆえ、月の守護神と考えられている。たとえばポップ月だとジャガー、ヤシュキン月だと太陽神である（図31）。



図31 月の守護神

図32は西暦三二〇年にあたる年を記しているライデ
ン板の導入文字である。ヤシュキン月の守護神が記さ
れているが、このような初期の碑文には、くし形の接

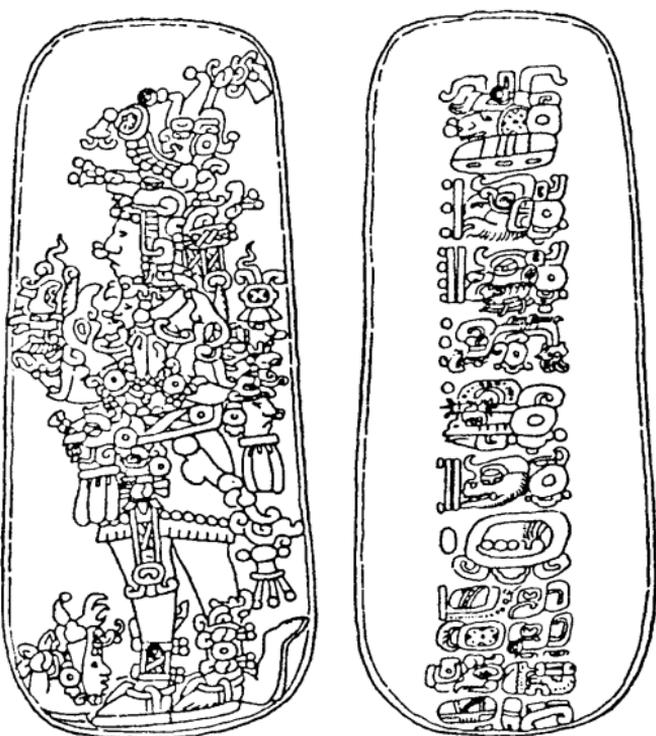


図32 ライデン板 (S. G. Morley 画)

栄えたベラクルス州南部からタバスコ州にかけてのメキシコ湾岸地帯や、チアパス高原のチアパ・デ・コルソ、それからグアテマラの太平洋岸にかけての

長期暦は、紀元前三六年にはすでに存在していた。紀元前三六年の日付をもつ石碑は、チア

字はない。しかし、T124の接字の起源は古く、マヤ以前の石碑にすでに存在する。紀元前三一年の年を刻むトレス・サポテスの石碑Cにすでにみられるのである。そしてイニシャル・シリーズが記されなくなる10・4・0・0・0まで用いられつづける。

いま述べたこととわかるように、長期暦というのは、紀元前にははやくも存在していたのである。そのようなマヤ以前の石碑が発見されたのは、マヤの地ではなく、メソアメリカの母なる文明と称されるオルメカ文明がかつて

パ・デ・コルソで発見されたし、紀元前三一年の日を刻んだ石碑は、オルメカ文明が栄えたトレス・サポテスで見つかった。グアテマラ太平洋岸のエル・パウルでは、三七年の日付を刻む石碑が発見されている。これらはマヤの地に隣接している地域にある。そしてマヤの最初の石碑であるティカルの石碑29より、三〇〇年もはやい日付を刻んでいる。ほぼ同時代のイサパやカミナルフユの石造物も、マヤ以前の原始的な特徴をもっている。さらにそれよりも四〇〇年以上も前の、モンテ・アルバンI期に属する石碑12や石碑13、「踊る人」と呼ばれる石造彫刻物には、点と棒による数表記や暦、一見して暦に関係のない文字、おそらく人の名や地名を表わすと思われる文字まで刻まれている。マヤの最初の石碑であるティカルの石碑29が、デザイン、彫刻技術、文字のいずれをとっても洗練されており、それに先だつ数世紀の発達段階があったことを物語っていることとあわせて考えると、長期暦や文字は、マヤ人が発明したのではなく、オアハカやベラクルスから、グアテマラの太平洋岸を通して、マヤの地にもたらされたということができよう。

マヤ文字の起源を考えると、マヤの地にもたらされたときには、このような石碑のほか、トゥンユトラの小像、カミナルフユの石碑10、ハーバークの石碑など、多量の文字をもつマヤ以前の石碑群の研究が必要である。

導入文字のところで脱線してしまった。もとに戻ろう。

導入文字の次は、イニシャル・シリーズが生起する。バクトゥン、カトゥン、トゥン、ウィナ



図33 Gの9つの文字

ル、キンと、大きい単位から小さい単位の順に並び、それぞれに係数がついてマヤ暦が表わされる。係数は前章で述べた丸と棒による表記、または頭字体による数表記で表わされるが、丸と棒によって表わされる場合、つく位置は時代により特徴がある。

ふつう石碑には一つのイニシャル・シリーズしかない。だが二つある場合もある。イニシャル・シリーズが三つ、四つある例もあるが、この順でその例は少なくなり、四つのイニシャル・シリーズをもつものはコバーの石碑1のみ

である。

バクトウン、カトウン、トゥン、ウイナル、キンが示すものは、ちょうど私たちの使っている暦の年、たとえば一九八二年にあたり、私たちの月日は、二六〇日暦と三六五日暦のカレンダー・ラウンドに相当することは二章で述べた。しかし、イニシャル・シリーズというのは、それだけではない。二六〇日暦と三六五日暦の文字のあいだには、夜を支配する王や月に関する情報がいり、それらがあわさってイニシャル・シリーズが構成されているのである。

キンのあとにはふつう二六〇日暦がきて、そのあとにGとFと名づけられた文字が生起する。

G は九つの異なる文字からなる集合体で、夜の九王の名、または称号を表わすものと考えられている(図33)。九つの違った文字が順に繰り返されるので、九日を一周期とする暦ということもできる。

G には九つの異なった形があるので、1から9までの番号がつけられている。図29ではG9である。つまりウィナルとキンが0のときはG9なのである。キンが1のときはG1、ウィナルが1でキンが2のときは22日となるので、G4の文字が生起するはずである。トゥンは三六〇日であるので9で割りきることができ、トゥン以上になるとGは関係なくなり、結局「Gはウィナルとキンの係数に支配される」ということができる。この知識も、文字の一部が消えて不明な場合や、Gが複雑でわからないときなど、ウィナルとキンの係数を読み、計算でだすことができるので、知っておくと便利である。



T23

図34 Fの文字

FはGがなければ生起せず、またGがあるときにはしばしばGと融合するので、GとFは密接な関係にあることがわかる。しかし、Fの意味はいまだによくわかっていない。

Fにも頭字体と幾何体がある(図34)。だがよくみると、Fには三つの書き方がある。図34の1の

例は幾何体である。2は、幾何体の接尾字T23が頭字体に置き換わった例であり、3は、幾何体の結び束を表わす文字素が頭字体に換わった例である。

3の幾何体の結び束が頭字体に換わった例としては、三つの文字をあげたが、それぞれ形が異なる。カエルが上向きになったものと、くちばしに特徴のある鳥と、ジャガーの皮を表わすといわれているもの(T609)である。ジャガーの皮を表わす文字素は、頭字体とはいいたいがたいのだが、便宜的に3の分類に入れておく。

これら結び束を表わす文字素が頭字体に換わった三例は、どれもたがいに似ていないので、幾何体が同価の頭字体に換わったものとはみなしがたい。だが、同価である可能性もある。もしそうなら、一見してなんの関係もないこれらの文字素は、マヤの思想では密接な関係があった、とみることができると。

2にあげた例、T23が女性の頭字体に換わったこちらの場合は、おそらく同価のものに換わったとみてよいだろう。一方が幾何体で、もう一方はその頭字体とみてよいからである。

T23はいろいろな主字についてでてくる接字である。この接字は、これまでのところ、アル(ꠄ)とかナ(ꠄ)と読まれているが、決定的な証拠はない。T23の同価とみられる頭字体は、おそらく、トウモロコシ神を表わしているとみてまちがいないので、T23の読みは、トウモロコシに関係のあることばが手がかりになりそうである。このような糸口から、ある文字の読み方

四章 時を記す方法



図35 Eの文字

1 手を使ったもの



2 上向きガエル



3 目の接中字をもつ月の文字



4 その他

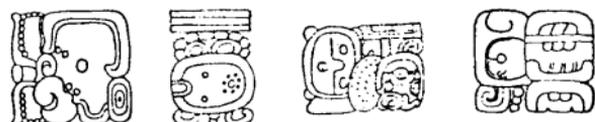


図36 Dの文字

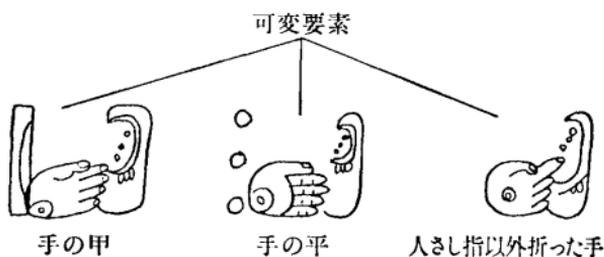


図37 Cの文字

月シリーズ
 Fの次には、E・
 D・C・X・B・
 Aと名づけられた
 文字がつづく。こ
 れらは、月に関す
 る情報を伝えてい
 るところから、ル
 ーナー・シリーズ
 (月シリーズ)と呼
 ばれている。
 EとDは月齢を

を推定する方法もあるのである。そうして推定された読みが、T23のでてくるすべての場合に納得できる読みであれば、解読できたことになる。だがいまのところ、このT23に関してはまだ納得いく読みは得られていない。

表わす。月齡が二〇日以下だと、Dのみが一九以下の係数を伴って生起し、二〇日以上のときは、EがDとともに生起する。つまりEは二〇を表わし(図35)、そのときの係数は九を超えない。二九日までの数がEとDにより表わされるわけで、EとDは月齡を表わしていることが、ティーブルにより解明された。

Dはいろいろな文字で表わされる。大きく分けると四つくらいになる。手を使ったもの、上向きガエルを使ったもの、目の接中字をもつ月の文字で表わしたもの、その他、である(図36)。

文字からみて、月齡を計算する方法には、二つの基準があったのではないかと考えられている。それは、図36にあげた例の1と2から推測された考えである。1の例には手が使われている。手はユカテコ語でラフ(Lah)といわれることがあるが、ラフには完了の意味がある。すなわち、月が見えなくなった最初の夜、または見える最後の夜から、月齡を数える。2の例はカエルが上向きになった文字が主字として使われている。この上向きガエルは、二章でも述べたように、「誕生」を意味する。すなわち、月が生まれた日、新月から月齡を数える。この二つの数え方があったというのである。

それでは、3、4にあげた例はどうなんだ、ということになる。それらの説明がつかなければ、先の論は正しいと結論するわけにはいかないのだが、それにしてもこれはひじょうにおもしろい見方といえるのではなからうか。

Cは手の上に可変要素をもち、接尾字として、動詞の過去を表わすといわれているT181がつき、接頭字には2から6までのいずれかの数字がつく。可変要素の多くは頭字体で、数1、6、7、9、10（の神）の頭字体が同定されている。そのほか、死の神、大地の女神なども同定されているが、小さいこともあって、同定が不十分なものが多い。

Cは、六ヵ月が一単位となった太陰暦を表わす。1Cは一ヵ月目、2Cは二ヵ月目を表わす。たとえば12D4Cは、四ヵ月目の一二日を表わす。

Cの意味を発見したティープルはCの係数の分析から、マヤの歴史を三つの期間に分けることに成功した。

(1) 独立期（9・12・10・0・0）。各都市ごとに陰暦表記が異なる。

(2) 統一期（9・12・15・0・0）9・16・0・0・0）。六ヵ月からなる陰暦を、起点を設けて表記しており、Cの係数は各都市共通である。それゆえ、この期間の石碑は、月齢ばかりでなく、Cの係数も計算から予測することが可能である。これはどういうことか、もう少し具体的に述べると、5・0・0（360×5=1800）すなわち一八〇〇日は六月より一日か二日少ない。たとえば、9・13・0・0・0が5Cで、月齢二二日であるとすると、一八〇〇日ごとのCの係数と月齢は次のようになる。

9・13・0・0・0

5C

22日

9・13	5・0	0	6 C	20 日
9・13	10・0	0	1 C	19 日
9・13	15・0	0	2 C	17 日
9・14	0・0	0	3 C	16 日

このようにCの係数はちゃんと決まっているのである。

ティカルではすでに9・4・3・0・0にこの統一暦を採用し、それはカラコル、プシルハーに広まり、さらにコパン、ピエドラス・ネグラスに伝わった。そしてカンペチェや、カラクムル周辺をのぞいて、この統一暦はマヤ地域全体にゆきわたった。

(3) 反乱期(9・16・5・0・0)。9・16・5・0・0にコパンは月の統一暦を最初に放棄した。それ以後、Cの係数は統一期のようには一致しなくなり、各都市は独自の暦をもつようになっていく。

このようにティールは時代を分けたが、それはほかの資料からも裏づけられる。たとえば芸術様式から分析した年代区分も、おなじようになる。

プロスクリアコフは、古典期後期を芸術様式の分析から、形成期・装飾期・激動期・退廃期の四つに分けた。9・9・0・0・0(六二三年)以後、地方的な差は消えはじめ、また前期の影響もなくなり、独特なマヤ芸術様式が開花しはじめる。これを形成期という。マヤ地域全体の交

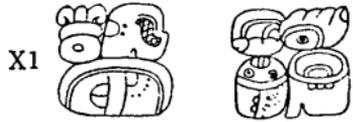
流がふえ、都市間の同盟、戦争などのテーマが石碑に刻まれるようになる装飾期は、ティープルが統一期と名づけた期間に一致する。マヤ文明の全盛期で、9・12・0・0・0（六七二年）から、9・16・0・0・0（七五一年）までの八〇年間に、マヤ全記念碑の約六〇パーセントが建てられている。9・16・0・0・0を過ぎると、これまで記念碑をもたなかった弱小都市で、突然のごとく記念碑が建てられはじめる。女性の像が少なくなり、軍事的色彩が強くなってくる。とくにマヤの西側地域でそれは顕著に現われている。まさに反乱期というにふさわしい。碑に刻まれている人物も静から動に変わり、やがて形の誇張や変形の傾向が強まっていく。そしてマヤ芸術の激動期が過ぎ、退廃期となっていく。石碑には非マヤ的特徴が多く見られはじめ、八〇〇年から九〇〇年にかけて、あいついで活動は停止し、マヤ文明は崩壊する。これが石碑の芸術様式からみたマヤ古典期後期の流れである。

ティープルがCの係数から分けた時代区分とほぼおなじ区分が、芸術様式の分析からも得られることがわかるだろう。

E/DとCにより六ヵ月単位で月齢を表わす方法は、四世紀の中頃にすでにみられるが、六ヵ月を一単位（つまり月で数えた半年）として月を数える方法は、十三世紀の写本といわれている。ドresden絵文書の五一ページから五八ページにもみられる。

Cの次にはXが生起する。Xは異なったいろいろな文字からなる意味不明の集合体である。そ

Cの係数が5か6のとき



Cの係数が1(なし)か2のとき



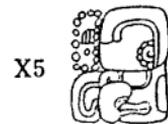
Cの係数が2か3のとき



Cの係数が3か4のとき



Cの係数が4か5のとき



Cの係数が6のとき



図38 Xの文字

れゆえ、文字Xと名づけられた。しかしながら、文字Xは文字Cの係数に支配されるようで、Cとの関係から、X1からX6までの6つに分類できる(図38)。

文字Bの標準型は、次にあげる四つの要素からできている(図39)。

- (1) 鉤型をした空を表わす文字素 (T187)
- (2) 動物 (T757)、または幾何体 (T141またはT287)
- (3) 楕円形の接字 (T110)

(4) いわゆるカウント接字 (Count Affix。T1、T3、T11、T13、T204、T232など)

Bは、文字Xがないと生起しないことはわかっているが、これも意味がはっきりわかっていない。

文字Aは、文字Eとおなじ二〇を表わす月の文字T683に、9または10の接尾字がついて、その月が二九日の月か三〇日の月かを示す(図40)。

そしてAの次には、三六五日暦の月の表示がくる。二六〇日暦と三六五日暦の生起位置は、しかしながら、いつも決まっているわけではない。キンの文字のあとに二六〇日暦、文字Aのあとに三六五日暦がくる形が一番多いが、二六〇日暦と三六五日暦が並んでキンのあと、Gの前に生起することもある。月シリーズのあとに二六〇日暦、および三六五日暦が生起することもあるし、GFと月シリーズのあいだに二六〇日暦がおかれることもある。ウイナルとキンのあいだにカレンダー・ラウンドが生起する変わった例もある。

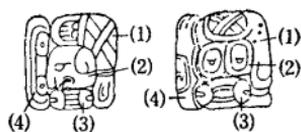


図39 Bの文字2例



図40 Aの文字

ふつう月シリーズは、E・D・C・X・B・Aから構成されるが、Y、Zと名づけられた文字が、FとEの途中に挿入されることもある。このYとZはウスマシンタ流域で、9・8・0・0・0以後生起するのみである。

イニシャル・シリーズに、月や、夜の王の情報を盛りこもうとした試みは、早くからあったようである。Gは、ライデン板(三二〇年)にすでにみられる。初期(バクトゥン8の時代)には、E/D・Cの型があるのみで、XやBや

Aにあたる文字はまだ生起していない。バクトゥン9（四三五年以後）がはじまると、AやXの文字が現われるようになる。E/D・C・X・Aの型はコパンの石碑20（9・1・10・0・0 四六五年）が最初である。Bの文字はずっと下って、古典期後期になって現われる。

ここまでで、マヤ暦の基本ともいえるイニシャル・シリーズの説明をいちおう終えたわけであるが、イニシャル・シリーズのなかに、八一九日を一周期とする暦が挿入されることがある。これまでのところ、一五例しかみつかっていないが、色や方角を表わす文字などが生起する興味深い節からなるものなので、説明しておこう。

八一九日周期暦

八一九日周期暦はトンプソンによって発見されたものだが、これは次のような決まった文字からなる節である。

- (1) T588にほとんどいづれもT181がついたもの
- (2) 動物の頭を主字とする文字（T1・758：110）
- (3) 方位の文字
- (4) 色の文字
- (5) 神を表わすと思われる頭字体

ヤシュチラン リンテル29, 30

A1—A4	9 · 13 · 17 · 12 · 10	8 オック
E1—F1	— 1 · 1 · 17	
E2—F2	9 · 13 · 16 · 10 · 13	1 ベン 1 チェン
E3—F5	819日周期節	
G1		13 ヤシュ



ヤシュチラン 石碑11

B'1—B'7	9 · 16 · 1 · 0 · 0	11 アハウ
C'1—C'3	— 1 · 3 · 6	
C'4—C'5	9 · 15 · 19 · 14 · 14	1 イシュ 7 ウォ
C'6—C'9	819日周期節	
C'10		8 セック



図41 819日節

八一九日周期の節は、イニシャル・シリーズの示す日より、3トゥン以内前の日に関係する。その日はかならず係数が1の日である。この節自体は八一九日を一周期とする暦ではないが、この節が関係する各々の日の間隔が八一九の倍数になるところから、八一九日周期暦といっているのである。たとえば、ヤシュチランのリンテル29、30と石碑11を例にとり説明しよう(図41)。この二つの日付のあいだは一五五六一日||八一九×一九となり、八一九の一九倍となっている。なぜこのような節がイニシャル・シリーズの途中にはさまれるのか、その節が解読されていないのでわからないが、八一九という数字が選ばれたのは、なんとか説明可能である。八一九は、一三の天の神、九の地下世界の神、七の地上の神の周期の各々が出会う数(13×9×7=819)であるばかりでなく、九と九一日

$$\begin{array}{r}
 9 \cdot 15 \cdot 19 \cdot 14 \cdot 14 \\
 - 9 \cdot 13 \cdot 16 \cdot 10 \cdot 13 \\
 \hline
 2 \cdot 3 \cdot 4 \cdot 1 = 15561 = 819 \times 19
 \end{array}$$

方位	東	北	西	南
色	赤	白	黒	黄
日	イミシュ チクチャ ムルック ベン カーバン	イック キミ オック イシュ エツナッ	アクバル マニック チュエン メン カワック	カン ラマツト エップ キップ アハウ

表3

周期がふたたび巡ってくる日を示す、宗教的に意義ある数と考えられるからである。

図41にあげた八一九日暦で、リントル29、30の1ベンは東と赤、石碑11の1イシュは北と白をもつ節と関係がある。各々の月と方位と色の関係は、表3のようにまとめることができる。

八一九日暦は、古典期マヤの碑文で、絵文書とおなじ方位と色の関係を記した最初の例である。八一九日暦から導かれた表3の関係は、マドリッド絵文書やランダの記述とよく一致しており、古典期からスペイン人の征服期まで、その連合は一貫してつづいていたことがわかる。たとえば、マドリッド絵文書の三四ページには、西—(黒)—カワック、三五ページには南—黄—カン、三六ページには東—(赤)—ムルック、三七ページには北—白—イシュがでてきて、表3の関係とあっている。

八一九日暦はまず、9バクトゥン10カトゥンから、12カトゥンにかけて(六四三〜六九〇年)、パレンケでみられる。それからヤシュチランで用いられ、9・17・2・10・4(七七三年)になって、コ

パンで用いられるようになる。八一九日曆の生起年代からみると、八一九日曆は、パレンケで発明され、そこからヤシュチュランに伝わり、ついでコパンやキリグアに広まった、ということができる。

地理的にみると、次のように考えることができる。八一九日曆は、ウスマンタとモタグア流域で栄えた都市に限られている。この両域にしかないものには、ほかには全身像による時間表記や、期間の終りを示す文字「さかさコウモリ」などがある。碑文もペテン中央地域のものと少しばかりおもむきを異にしている。これらはなにに由来するものであろうか。現在パレンケの近くでは、 Chol 語が話されている。そしてコパンの近くでは、 Chol ティ語が話されている。両地域はマヤ地域の西の端と東の端にあり、かなり離れているにもかかわらず、 Chol 語と Chol ティ語は言語的にはひじょうに近い関係にある。十六世紀頃の言語分布をみると、パレンケからコパンにかけて、带状に Chol 語系のことばが話されていたことがわかる。その状態はきつと古典期時代でもおなじであったらう。文字に中央地域と異なるものがあることや、方言的、文化的な差がからみて、すでに古典期には方言的な差があったと考えることができる。方言的、文化的な差が八一九日曆や全身像による時間表記に表われているというわけである。

八一九日曆という、少しばかり理解のむずかしいものを扱ううちに、古典期の言語状態まで推定することになった。八一九日曆は例が少ないので、それほど問題にする必要はない。重要な

はイニシャル・シリーズなのである。

ここでイニシャル・シリーズの説明がすんだので、簡単にまとめておこう。

イニシャル・シリーズとは、ふつう碑文の最初にあり、碑文の時を定めるものである。まずイニシャル・シリーズの導入文字があり、バクトゥン、カトゥン、トゥン、ウィナル、キンの期間を表わす文字が係数を伴って生起し、GからAまでの文字とカレンダー・ラウンドから成り立っていた。GFは夜の支配者の情報を、EからAの文字は月に関する情報を伝えていた。バクトゥンやカトゥンなどの「期間の文字」が示す年代はちょうど私たちの西暦にあたり、カレンダー・ラウンドの三六五日暦と二六〇日暦は、月日にあたるとみてよかった。私たちがマヤの時を記す場合は、ふつう、GFや月シリーズの情報ははぶき、ただ、9・17・0・0・0 13アハウ18クムクのように記す。

セカンドリー・シリーズ

イニシャル・シリーズと名づけたものがあつたのだから、セカンドリー・シリーズというようなものもある、と予想されたことと思う。

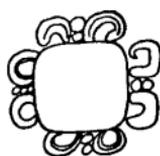
テキストが長くなると、言及する期間が長くなり、長期暦の日付一つだけではまにあわなくなる。それらの日々を表記するために、マヤ人は長たらしい長期暦を繰り返し用いることをせず、

長期暦を土台に、あとの日付はその日から何日たったか、または何日前かを記して、それらの日を定めていた。これを私たちは、イニシャル・シリーズにつづくところから、セカンドリー・シリーズと呼んでいる。

日付の位置づけは、ディスタンス・ナンバーと呼ぶ数で与えられる。その数は一日の場合もあるし、千年におよぶこともある。一番長い例は、チアパの石に刻まれた13・13・1・1・？・（0）・11・4だという。チアパの石の場合を年になおすと、二一八四四〇〇年となる。マヤ人は、なんという大きな時間の観念をもっていたのであろうか。

ディスタンス・ナンバーを表わす文字は、イニシャル・シリーズで用いられる「期間の文字」とほぼおなじ文字が使われる。しかしチアパの石にみられるように、バクトゥンより大きな期間を扱った文字がいくつかある。

ディスタンス・ナンバーとは、ある日と他の日のあいだの日数ということが出来る。だから長期暦の9・17・0・0・0なども、13・0・0・0・0という日から9・17・0・0・0だけだったことを表わしているのだから、ディスタンス・ナンバーだということもできる。だがふつうはそうはいわない。まず長期暦で、ある日を定める。その日から何日たったかをディスタンス・ナンバーで示し、その日がカレンダー・ラウンドの何月何日にあたるかを記す。さらに次の日が必要なら、その日から何日たったかをディスタンス・ナンバーで示し、その日が何月何日にあ



T 126



2 ウイナル 0 キン
2・0

図42



15カトウン 1 トウン 16ウイナル 5 キン
15・1・16・5

るかを記していく。こういうふうにして、必要な日を定めるのである。

初期のテキストは一般に短いので、イニシャル・シリーズだけで、ほかに時を記す必要がなかった。それゆえ、セカンドアリー・シリーズはない。しかし、9・0・10・0・0（四四五年）には、セカンドアリー・シリーズが現われる。

ディスタンス・ナンバーは、期間を表わす文字が係数を伴って、時を記す場合とおなじようにして表わされる。ただ順序が異なる。キン、ウイナル、トウンといったふうに、小さい単位から大きい単位の順に並び、長期暦の順とは反対になる。だが長期暦とおなじように、大きい単位から小さい単位に並んだ例もないではない。ディスタンス・ナンバーに用いられる文字は、キンをのぞいて、長期暦（イニシャル・シリーズ）に用いられる文字とおなじであるが、ふつうディスタンス・ナンバーには、イニシャル・シリーズにない特別な接尾字がついている。この接尾字 T 126、またはそれに似た接尾字は、「期間の文字」の一つだけにつく場合が一般的だが、ディスタンス・ナンバーのすべての文字につくこともある（図42）。

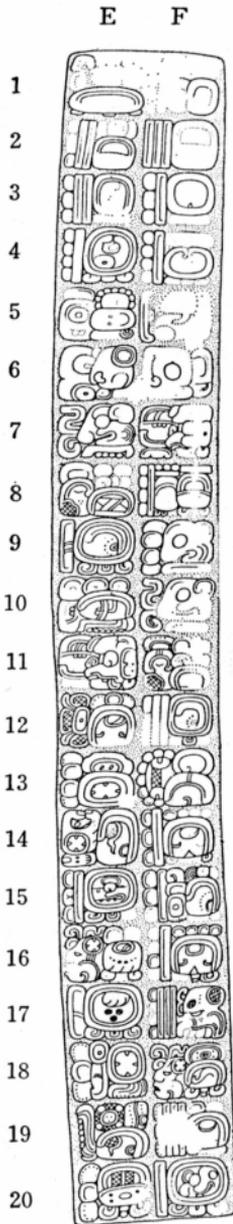


図43 ナランホの
石碑22
(I. Graham 画)

多くの場合、キンの文字は省略され、その係数だけがウィナルの文字につく。その場合ふつう、キンの係数は左側につき、ウィナルの係数は上につく。だが逆の場合もある。そのためどちらがキンの係数かウィナルの係数なのかわからなくなるが、一般原則がある。それは、「左上を占めるほうの接字が先に読まれる」という原則である。左上端の一角を占めるほうが先に読まれるので、それがキンの係数ということが出来る。もちろん例外もある。しかしふつう、係数を読んで、次に計算をしてディスタンス・ナンバーの次に記されている日付が計算どおりあっていくかどうか試す作業をかならず行なうので、どちらがキンの係数かウィナルの係数か問題なくわかる。そこで一つ例題をだしてみよう(図43)。例はナランホの石碑22である。だいたい不明なところがあるが、計算していけば問題はない。

E1からE6までがイニシャル・シリーズ(略してISとも書く)である。E1はイニシャル・シリーズの導入文字である。F1はバクトゥンであるが、消えて読めない。しかし、石碑のほと

んどはバクトゥン9であるから、ここでも9バクトゥンとみても問題なからう。E2はカトゥンであることは文字の形からわかるが、係数は11か12か13かわからない。しかしよくみると、真中の丸が少し大きいので、それが装飾要素か、それとも上下二つの丸が装飾要素かのどちらかと考えられる。そうすると、11か12カトゥンのどちらかにしぼられる。トゥンとウィナルは問題ない。15トゥンで13ウィナルである。キンの係数は、カトゥンの場合とおなじように6か7かわからない。しかし、二六〇日曆(E4)と三六五日曆(E6)ははっきりわかる。9マニック0カヤツプである。9マニック0カヤツプは9バクトゥン12カトゥン前後では、9・12・15・13・7しかない。それゆえ、カトゥンとキンの係数は12と7と定まった。

このイニシャル・シリーズの示す月にながおこったかは、F6とE8までの文字が語っている。じつは「ひげリス王」が誕生したことが記されているのだが、歴史的解釈はのちに述べることにして、日付だけを問題にしよう。

F8にはディスタンス・ナンバー(略してDNとも書く)が記されている。キンが9でウィナルが8、トゥンが5、つまり5・8・9と読める。9・12・15・13・7 9マニック0カヤツプから5・8・9たった日はしかしながらE9、F9に記されているように、5カワック2シユルにはならない。

5・8・9を日になおすと一九六九日となる。一九六九は二六〇日曆が七周して一四九日たつ

た日である。その日は2キップとなる。計算からだすには、一九六九を二〇と一三でそれぞれ割ればよい。二〇で割ると九あまる。つまりマニックから九日目のキップである。また一三で割ると六あまる。9 マニックの9に6を足すと15であるが、二六〇日暦の係数は13までしかないので、2となる(15-13=2)。計算ではこういうふうにして2キップがでてくる。

三六五日暦のほうはどうなるかといえば、一九六九を三六五で割ればよい。つまり五となり、あまりは一四四となる。カヤップの次はクムク、その次は五日しかないワイェブであることを考慮に入れて、計算していけばよい。そうすると19セックという日がでてくる。

2キップ19セックというカレンダー・ラウンドの日が計算から導きだされたが、E9、F9に記されている5カワック2シュルと違っては、5・8・9だけ前の日なのだろうか。9・12・15・13・7から5・8・9を引いた9・12・10・4・18は3エツナップ16チェンであり、やはり5カワック2シュルにならない。ということ、ディスタンス・ナンバーの読み方がまずかったことになる。キンとみた係数の棒に縦線がはいっているが、これを飾りとみたのがわるかったのだろうか、四つの丸のうちのいくつかが飾りだったのだろうか、ウィナルの係数は8でいいのか、ウィナルとキンの係数は逆ではないのか、など検討してみなくてはならない。そのような試行錯誤の結果、5・8・12であれば、9・13・1・3・19 5カワック2シュルとなり、矛盾がなくなる。日の係数は9ではなく12であった。棒は一本ではなく二本で、四つある

E 1—E 6	9・12・15・13・7	9 マニック 0 カヤツブ	I S
F 8	<u>5・8・12</u>		DN
E 9—F 9	(9・13・1・3・19)	5 カワツク 2 シュル	
E12	<u>1・0</u>		DN
F12—E13	(9・13・1・4・19)	12カワツク 2ヤシュキン	
F14	<u>4・6</u>		DN
E15—F15	(9・13・1・9・5)	7チクチャン 8サツク	
F16	<u>4・9</u>		DN
E17—F17	(9・13・1・13・14)	5イシュ 17ムアン	
F19—E20	<u>1・2・16</u>		DN
F20—G 1	(9・13・2・16・10)	5オック 8クムク	

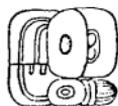
表 4

とみた丸のうち二つは装飾要素だったのである。次のディスタンス・ナンバーは E 12 に記されている。1・0 のディスタンス・ナンバーがあり、11 か 12 か 13 カワツク 2 ヤシュキンが記されている。5 カワツク 2 シュルから二〇日たった日は 12 カワツク 2 ヤシュキンであるので、この日は 9・13・1・4・19 12 カワツク 2 ヤシュキンと定めることができる。

こういう計算をしていくことによって、時を定めることができるのである。これらを、ふつう表 4 のように書く。この表のかっこのなかの日付は、実際には示されておらず、計算から出したものであることを表わす。

いまみたナランホの石碑 22 は、ごくふつうの例である。このほか、ウィナルとキンの係数が逆になった例や、係数が 0 である「期間の文字」がはぶかれた例、一番大きい単位がわざわざ 0 の係数をつけて記されている例など、いろいろ変わった例もある。

後の日の標示、または計算を先にすすめる標示。足し算をして目標の日付に導く。



幾何体

頭字体

図44 ディスタンス・ナンバーの導入文字

前の日の標示、または計算を前にもどす標示。引き算をして必要な日を導く。



図45



図46 古い日の日付標示

素が使われることがある(図46)。
 キンの文字はふつう省略され、係数だけがウィナルの文字につくと先に述べたが、キンの文字が生起
 パレンケヤトルトゥゲロでは、古い日(前の日)の日付標示として、へび(または虫)の形をした文字

字は、後の日の標示と前の日の標示の文字とみなすこともできる。
 足したら、求める日がでてきたが、引いて導く場合もある。しかしふつうは、引くか足すかは、図45に示した文字で示される。この文字は、後の日の標示と前の日の標示の文字とみなすこともできる。
 ナランホの石碑22の例では、前の日にディスタンス・ナンバーを
 わかっている。またこの文字の生起・非生起を支配する法則もわ
 かっていない。図44に示したようにこれにも幾何体と頭字体がある。
 ナランホの石碑22では、前の日にディスタンス・ナンバーを

次にディスタンス・ナンバーがくるということがある(図44)。この導入文字は、
 数だけ前の日からたったカレンダー・ラウンドの日付が次に記されていたが、
 数だけ前の日からたったカレンダー・ラウンドの日付が次に記されていたが、
 そんな例ばかりではない。ディスタンス・ナンバーにも、イニシャル・シリ
 ーズにあったような導入文字が先行することがある(図44)。この導入文字は、
 ナランホの石碑22では、いきなりディスタンス・ナンバーがでて、その日

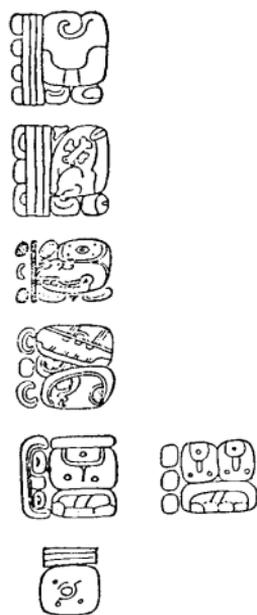


図47 ディスタン
ス・ナンバー
のキンの文字

することもある。この場合、キンの文字は
イニシャル・シリーズで使われる文字とは
違い、図47に示したような、貝や動物やア
ハウのさかさになった文字などが使われる。

「期間の終り」を表わす文字

ここまでで、ごくふつうのテキストの、時の表記の仕方の説明のほとんどを行なったことにな
る。残りは「期間の終り」をうまく利用した方法だけといってよい。それはこれまで述べてきた
いろいろな暦の周期の違いをうまく利用した方法である。

これまで述べたテキストは、まずイニシャル・シリーズがあり、次にセカンダリー・シリーズ
と呼んだものが生起するものであった。これがふつうの形である。しかし後期になると、暦に熟
知してきたためか、省略が多くなってくる。とくに、イニシャル・シリーズという長たらしい表
記法など用いないで、簡単に時を表記した例がふえてくる。

もっともよく用いられたものは、トゥンやカトゥンの終りとカレンダー・ラウンドの組み合わせ
である。この方法によると、長期暦ほど正確ではないにしても、ほぼおなじくらい正確に絶対
年を記すことができる。どうしてそのように正確に時が記せるかを説明してみよう。

トゥンやカトゥンやバクトゥンの期間の終りは、いうまでもなく、ウィナルとキンが0、つまり、最後の二桁が0・0のときである。カレンダー・ラウンドは一周期一八九八〇日であったが、それと、0・0、つまり三六〇日の組み合わせを考えると、2・7・9・0・0、日数になおすと、三四一六四〇日に一回しかおなじ組み合わせがないことになる。たとえば、9・0・0・0・0は8アハウ13ケフであるが、8アハウ13ケフがふたたび巡ってくるのは一八九八〇日、すなわち2・12・13・0の倍数日だった日である。9・0・0・0・0の次は、9・2・12・13・0、その次は9・5・5・8・0……といった日になる。長期暦で0・0で終る日、すなわちトゥン完了の日と8アハウ13ケフがふたたび巡ってくるには、三六〇と一八九八〇の最小公倍数である、2・7・9・0・0たたなければならぬ。

それだけの日数がたたなければならぬということは、マヤの歴史時代(8・12・0・0・0頃から10・4・0・0頃までのあいだ)では、一回しかおこりえないということである。これがカトゥンの終りとカレンダー・ラウンドの組み合わせになると、六八三二八〇〇日に一回となり、もっと正確に、ほぼ長期暦とおなじくらい正確に時を定めることができる。

というわけで、ある期間の終りを示す文字と、カレンダー・ラウンドの日付だけで、長期暦の表記がなくとも、マヤの絶対年を定めることができるのである。たとえば、「5アハウ18パシュ、トゥンの終り(の日)」は、9・2・16・0・0と定められ、そのほかの6・15・7・0・0や、

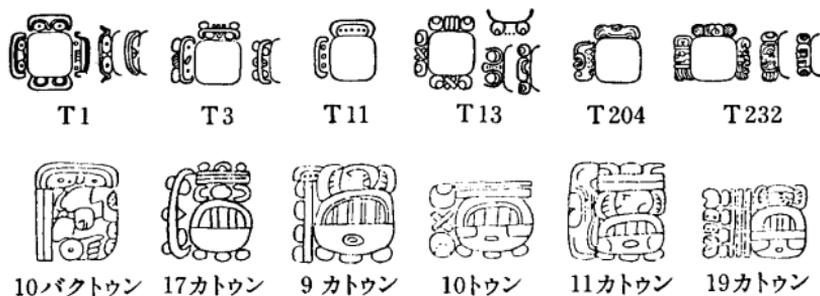
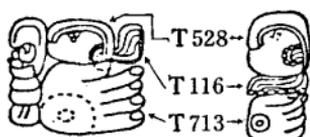


図48 カウント・グループ

11・10・5・0・0などは、歴史時代からはずれるので排除される。トゥンの終りと、カレンダー・ラウンドの組み合わせによって示される日は、ふつう碑文の最後に生起する。これは、碑文の最後の日であるから、奉納日（または建立日）と考えてよい。その日は、トゥンが0、または10のときが多い。しかし5や15トゥンのときもある。つまり、マヤの石碑は、ふつう一〇年または二〇年ごとに建てられているのである。たとえば、ナランホでは、ほとんどの石碑は一〇年ごとに建てられている。しかし、ピエドラス・ネグラスやキリグアでは、ほとんどの石碑が五年ごとに建てられている。

トゥン（カトゥン）の終りとカレンダー・ラウンドは、ごくふつうのテキスト、つまりイニシャル・シリーズがあり、それにつづくセカンドリー・シリーズがある碑文に用いられるが、もちろん先に述べたように、長期暦のかわりを果たせるので、イニシャル・シリーズのかわりとしても用いられる。

「期間の終り」とカレンダー・ラウンドの組み合わせによる時の表示を、ピアリオド・エンディング、略してPEと呼んでいるが、「期間



13・0・0・0・0



9・8・0・0・0 5アハウ3チェン



9・15・0・0・0



9・13・0・0・0 8アハウ8ウオ

図50



9・15・0・0・0

図49



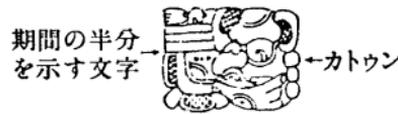
図51

- の終り」を表わす方法は、大きく分けて九つある。
- (1) 同価とみられる接字群の使用。これらの接字とは、トンプソンがカウント・グループと名づけた、T1、T3、T11などである(図48)。
 - (2) T218(手)と、T575(貝)またはT683(月)の使用(図49)。
 - (3) T528(カワック)とT116の使用。カウント・グループの接字やT713をともに用いる場合が多い(図50)。
 - (4) 「さかさコウモリ」の使用。期間の文字の前において、「期間の終り」を表わす。この方法はペテン中心部にはみつかつておらず、パレンケ、ポモナ、ヤシユチラン、キリグアに限られ、六例しかみつかつていない(図51はヤシユチランの「さかさコウモリ」)。

マヤ人はしやれや冗談を好む人々だ



図52



9・15・10・0・0

期間の半分
を示す文字



9・13・10・0・0

7アハウ3クムク

図53

(5) ホトゥン (or) は5を意味するので、5トゥンつまり
0・0・0、5・0・0、10・0・0、15・0・0)の終

姿で表わしているとみることができるのである。
つまり、神が休むという概念、いかえればその期間の終りという概念を、さかさになって休むコウモリの姿で表わしているとみることができるのである。
の終りである。一方コウモリはさかさになって休む。つまり、神が休むという概念、いかえればその期間の終りという概念を、さかさになって休むコウモリの姿で表わしていることとみることができるのである。

りを示す文字の使用(図52)。この文字は、ホトゥンごとに祝う特別な祭を示す文字と考えられる。
(6) 期間の半分を示す文字の使用。期間の半分を示すのだから、カトゥンの半分だと10トゥン、バクトゥンの半分だと10カトゥンということになる。10トゥン、または10カトゥンを示す文字と
いうこともできる(図53)。

(7) 5トゥンと15トゥンは、次の方法によって示される。5の係数とT116がついたカワック



8 チクチャン

図55



G2



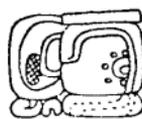
18サック



T158



T 4



15トゥン

図54



5トゥン

でも、「5足りない」という概念を表わすために使われる場合があることもわかった。

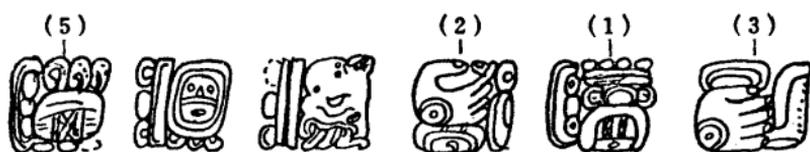
(8)文字G(F)とカレンダー・ラウンドによる表記(図55)。Gには九つの種類があり、それがとぎれることなく順に繰り返されることはすでに述べた。カレンダー・ラウンドは、一八九八〇日ごとに繰り返されることも述べた。この二つ、九日で一周期の暦と、一八九八〇日で一周期の暦を組み合わせることで、時を記す方法である。

(T528)に、T4がつくことで5トゥンが示され、T158がつくことで15トゥン(つまりカトゥン完了に5トゥン足りないこと)が示される(図54)。

これまで、係数5とT158は、15トゥン、すなわち、カトゥン完了までに5トゥンである、という概念を表わすために使われることしか知られていなかった。しかし、三六五日暦の日付表示に、5の係数とT158が使われている例がみつかったため、トゥン以外

ごとに一回しか、おなじ組み合わせの日は生じない。マヤ歴史上の日付の九〇パ

九と一八九八〇は約数をもたないので、九×一八九八〇||1・3・14・9・0



9・14・0・0・0・0 6アハウ13ムアン

図57 ナランホ石碑23



9バクトウン
図56

1セント以上はバクトウン9のものであるので、Gとカレンダー・ラウンドによる表記だけでもほとんどまちがいになく長期暦上の日付を定めることができる。

この方法は簡便であり、「期間の終り」でない日を記すときでも用いられている。しかし、広く用いられることはなく、ウスマシントラ流域地方、とくに、トニナやオコシソゴ地域で好まれたにすぎない。この地方では、長たらしい長期暦による表記をさげ、この簡単な表記法によって日付を表わすことが多かった。

(9)セカンダリー・シリーズ(ディスタンス・ナンバー)の導入文字といくぶん似ている文字の使用(図56)。

以上みてきたことでわかるように、「期間の終り」を示す方法はたくさんあった。これらは単独で生起することもあるが、ふつう、重複して用いられることのほうが多い。たとえば図57にあげたナランホの石碑23の場合、(1)、(2)、(3)、(5)の四つの方法が用いられ、9・14・0・0・0・0 6アハウ13ムアンという日が記されている。

短期暦

ユカタン北部では、イニシャル・シリーズによって時を記す方法はほとんど用いらなかった。たとえば、北部の代表的な遺跡であるチチェン・イツァでは、たった一つしかない。ハイナ、オシキントック、シユカルムキンでもイニシャル・シリーズをもつ石碑は一つしかないし、サンタ・ロサ・シユタンパックでは二つしかない。プウク地方の大遺跡ウシユマルやカバフやラブナールにいたっては、イニシャル・シリーズは全然用いらなかった。南部の諸遺跡と同様にイニシャル・シリーズが用いられたのは、わずかにコバーだけである。

また、ディスタンス・ナンバーによって日の関係を記すことも、北部ではコバーをのぞいてなかった。南部ではよく用いられた、「期間の終り」を利用して時を記す方法も用いらなかった。それでは、どのようにして時を記していたかという点、カトゥンの終る日の名でそのカトゥンを呼ぶ方法を用いていたのである。

カトゥンは「期間の終り」で述べてきた例をみればわかるように、つねにアハウの日で終った。二六〇日暦は一三の数と二〇の日からなるが、二〇の日のうちのアハウがカトゥンの終りである。と、一カトゥンは七二〇〇日であるので、つねにアハウがカトゥンの終りの日になる。そのアハウでカトゥンと呼ぶ方法を用いていたのである。たとえば、2アハウのカトゥン(カトゥン2アハウ、またはたんに2アハウ)とは、2アハウで終るカトゥンの二〇年間をさす。



9 ラマツト

11 ヤシュ

13 トウン 1 アハウ

図58 「4つのリンテル」の一部

1 カトウンは七二〇〇日であるので、アハウの係数は、 $7200 \div 13 = 553 \dots 11$ となり、11ずつふえる。たとえば現カトウンが2アハウだとすると、次のカトウンは、 $2 + 11 = 13$ であるから13アハウ、その次は、 $13 + 11 = 24$ （日の係数は13までしかないので11）となるから、11アハウである。このように、アハウの係数は、 $2 \cdot 13 \cdot 11 \cdot 9 \cdot 7 \dots$ というふうに、2ずつ減っていく。そして、約二六〇年（正確には一三×二〇×三六〇日）でふたたびもとのカトウン2アハウにもどる。つまり、二六〇年の範囲でしか正確に時を記すことができない暦ということになる。長期暦や「期間の終り」を利用する方法と比べて、かなり不正確であり、短い期間しか正確に時を記せないとことから、これを短期暦と呼んでいる。

短期暦によって時を記す方法は、古典期の終り頃のチチェン・イツァの碑文などにみられ、その後も、スペイン人の征服後まで用いられたようで、チラム・バラムの書などに、その例を見いだすことができる。

チラム・バラムの書から例をひいてみよう。

「(カトウン) 8アハウ、チャカンプトウンはイツァ族によって放棄された」。8アハウは、ユカテコ人のマヤ学者バレラ・バスケスらの解釈では、10・6・0・0・0 8アハウ8ヤシュ(九二八〜九四八年)にあたる。

「(カトゥン) 7アハウ、僧ランダは死んだ」。僧ランダが死んだのは、一五七九年四月二十九日(ジュリアン暦)であり、マヤ暦の11・19・0・0・0 7アハウ13チェン(一五七九〜一五九九年)にあたる。

碑文は、チラム・バラムの書の表現と少し異なっている。図58の例は、チチェン・イツァの「4つのリントル」からとったものである。(カトゥン) 1アハウの13トウンの9ラマツト11ヤシュと書かれている。長期暦では、10・2・12・1・8 9ラマツト11ヤシュにあたる。

碑文とチラム・バラムの書のいい方と比べると、碑文のほうがはるかにくわしく書かれている。しかし古典期の表記と比べたら、まだ不正確である。どこが違うかといえ、1アハウの次に三六五日暦が記されていないところである。もし1アハウの次に、3ヤシュキンという三六五日暦の日付がついていたなら、カトゥンの終る日は10・3・0・0・0 1アハウ3ヤシュキンとたちどころにわかる。

チラム・バラムの書からひいた例は、もっとむずかしい。カレンダー・ラウンドも、トゥンの記述もない。ただ8アハウとか、7アハウという記述だけである。もし8アハウに8ヤシュという日がついていたなら、誤りなく、10・6・0・0・0という日を定めることができたであろう。しかしそれがなかったため、解釈には二六〇年の差がでる。10・6・0・0・0ではなく、9・13・0・0・0かもしれないし、10・19・0・0・0かもしれない。短期暦は二六〇年(13・0・0・

0) ごとに繰り返されるので、長期暦上の日付がはっきりしないのである。

この章では、マヤ人たちが時を記すために用いた長期暦や、「期間の終り」を利用する方法や、短期暦などを学んだ。これで歴史的解釈をするための枠組となる日付についての知識は、いちおう学んだことになる。

テキストを分析するうえで一番大切なことは、日付を知ることである。その次が日付に伴う節の分析である。テキストの分析は、最近急速に進んできた。それについては次章で述べることにしよう。

五章 テキストの分析にむけて



コパンの紋章文字

一九六〇年に証明される

マヤの碑文に歴史が刻まれていることについては、これまで再三にわたりふれてきた。マヤ文字の解読史は百年以上におよぶので、そのあいだにはもちろん、マヤの碑文に歴史が刻まれているとする説はなんどかだされてきた。しかし、それが証明されたのは一九六〇年になってからである。それに先だつ数十年は、マヤの碑文には暦や天文に関することしか記されていないという意見に支配されていた。

「時の果てしない流れはマヤ宗教における最高の謎であり、その主題は、マヤの思想を人類の歴史のなかでも比類なき高みに押しあげた。時の広漠さに比べれば、個人の誕生、結婚、即位などの記録はまったくとるに足らぬものである」

このような意見がマヤ学界を支配していた。だから、歴史的イベントや個人の偉業などが記録されていないとは、考えもつかなかったのである。

しかしそれは無理からぬことであった。碑文は暦に関する文字であふれていたし、絵文書には金星や月の周期が計算されていた。石碑は五年、一〇年、二〇年ごとに、いいかえれば、果てなく流れゆく時の区切りを記すために、時の里程標として建てられていた。

たしかに石碑のほとんどは、カトゥンの終りという区切りのいい日に奉納されている。しかし、

碑文のなかにはそうでない、いわば区切りの悪い日のものもたくさんある。もしそれらが天文学的に意義のある日だとしたら、多くの場所でおなじことが記されているにちがいない。実際はどうか。二つの遺跡でおなじ日付が記されていることはほとんどない。三つの遺跡でおなじ区切りの悪い日を記している例はわずかに一例しかみつかっていないのである。

テキストが歴史上の事柄を扱っているのなら、各遺跡ごとに異なるのが当然である。その当然である事実は無視され、視点はただ暦や天文学のことだけにそそがれていた。

暦や天文学以外のこと記されているとか、もつとはっきり歴史が刻まれているという主張は、マヤ学界では異端であった。その異端であった説が正当とみられるようになったのは、ハインリッヒ・ベルリンやタティアナ・プロスクリアコフらの重大な発見がなされてからである。その重大な発見とは、手短にいえば、紋章文字の発見と、王の誕生や即位などの歴史的事柄が記されていることの発見である。

歴史が碑文に刻まれていることはもはや疑いようがない。だが歴史的解釈にはまだまだ問題が多いし、理解できない文字もたくさん残されたままである。そこで、ベルリンとプロスクリアコフの二人の発見について述べたあと、どうしたらテキストが分析できるのか、分析の手がかりとなる文字にはいったいどんなものがあるのかを述べよう。そして最後にそれらを利用して、私たちも実際にテキストを検討してみることにしよう。

「曆に關しない文字の理解をばばんでいる壁」と自ら語るその壁を、最初に打ち破つたのは、ハインリッヒ・ベルリンであった。一九五八年、彼は、各都市には、おなじ接字をもつが主字は都市ごとに異なる、その都市特有の文字があることを発見した。その文字は都市の名を表わすのか、その町の守護神なのか、王朝の名を表わすのかはつきりわからなかった。ベルリンはそれを紋章文字と名づけた。これだけでは紋章文字がどのようなようにして発見されたのかわからないであろうし、テキストの歴史的解釈にその文字がどのような貢献をしたかもわからないので、ベルリンがたどった道を私たちもたどってみることにしよう。

紋章文字の発見

一九五二年、メキシコの学者アルベルト・ルスは、一九四九年から発掘をつづけていたパレンケの「碑文の神殿」下に、墓を発見した。それまでは、マヤのピラミッドは神殿であり、墓があるとは思われていなかった。しかしこの発見で、マヤにもエジプトのピラミッドとおなじような建物があることがわかったのである。

ピラミッドのなかには墓をもたないものもあるが、その後の発掘で、ピラミッドの多くはパレンケの「碑文の神殿」とおなじように、下部に墓をもつことがわかった。十六世紀の文献によると、インディオたちは死者を自分たちの住んでいる家の下に埋葬したという。後古典期の遺跡の



図59 パレンケ「碑文の神殿」の石棺東側 (A. Ruz 画)

マヤパンでも、家の下に墓があった。建物の下に死者を埋葬するのは、形成期からスペイン人征服後までつづいたマヤ人の習慣だったのである。

それまでの定説をくずす衝撃的発見で、パレンケの「碑文の神殿」は一躍有名になったが、その「碑文の神殿」下の石棺の四側面には、一〇人の半身像と、その人物に関係する文字がそれぞれ二文字ずつ（ただし東西壁の中央の人物には四文字）刻まれていた。ベルリンはその石棺の四つの側面を研究しているとき、一〇人の半身像に関係する文字の最後の文字は、おなじ構造で、しかもその多くはおなじ主字から成り立っていることに気づいた。そこでティカルやコパンやヤシュチュランなどのほかの都市の碑文にもおなじような文字があるか調べてみたところ、たしかにそれはあった。ただし主字がパレンケのものとは異なっていた。

図59はベルリンが研究していた石棺の四つの側面のうちの東側の面である。それぞれの人物の横に二文字ずつ、その人物に関係する文字がある。二文字のうち上の文字はそれぞれ異なっているが、下の文字はおなじ文字の少しばかり変化したものである。ただし、まん中の人物に関する文字は、その人物の左右に二文字ずつある。その中央の人物の左側の二文字は、左



テイカル石碑16



ナランホ石碑23

図60

右の人物についている二文字の上のほうの文字にあたり、右側の二文字は、下のほうの文字を二つに分けて表わしているとみることができる。

これらの人物は、石棺に埋葬されていた人物に関係ある人々であることは、まちがいない。そうすると、これらの人物は、埋葬されていた人物の先祖、または親類・縁者と考えられるので、各人物に付随する最初の文字は、その人物の名を表わし、あとのほうの各人物に共通する文字は、彼らの出身地パレンケの地を表わすと推測できる。

この推測が妥当かどうかみえるためには、そのほかの都市の碑文を検討してみればよい。たとえばテイカルの石碑をみてみよう。図60の上の文字群は石碑16の碑文の一部である。最後の文字は、パレンケの石棺でみた文字と同じ接字が使われている。大きく違うのは主字である。図60のナランホの石碑23をみてもおなじである。

これらの文字は、それぞれの都市にもっぱら生起するだけである。それゆえ、その都市の名や王朝の名など、その都市特有の文字とみることができる。そこで、いまだにはっきりとはわかっていないものの、都市の名とみて不都合はないので、ここではテイカルとかパレンケとか、現在

つけられている遺跡の名と同等のものともておくことにしよう。

では、これらのいわゆる紋章文字の前に生起する文字は、パレンケの石棺のところで推測したように、ほんとうに人物の名前を表わすのだろうか。たしかに例にあげたティカルやナランホの場合でも、そのようにみてなら問題はない。ティカルやナランホの紋章文字の前の文字は、それぞれA王と「ひげリス王」の名なのである。

このようにしてベルリンは、紋章文字を発見したのであった。そしていま述べたことでわかるように、紋章文字が発見されたおかげで、それを手がかりに、人物の名を表わす文字まで発見できるようになったのである。

紋章文字はテキストを分析する上でひじょうに役に立つので、どういう構成をしているかをしっかりと定義しておこう。紋章文字は三つの構成素から成り立っている。

- (1) ペンニッチ接頭字 T168 (図61)
- (2) 水グループと呼ばれている接字群 T32とT41 (図62)
- (3) 主字

この三つあげた条件を満たさなければ、紋章文字の発見は困難である。それほどこの三つは必要な条件であるが、いったん発見できて(3)の主字がわかれば、(1)や(2)の欠けたものでも同定は十分可能になる。たとえば、女性を表わす接字(T1000F)に(3)の主字がついたものは、その主



T168

図61 ペン=イッチ接頭字



T32

T33

T34

T35

T36



T37

T38

T39

T40

T41

図62 水グループ

字が表わす都市（出身）の女性となる。

紋章文字は、ベルリンが予想したとおり、碑文の新しい解釈の突破口となった。彼はこう書いている。

「紋章文字を利用することで、曆に閑しない文字の理解をはばんでいる壁を打ち砕くことは、おおいにありうることと思われる。そうでない場合でも、少なくとも地理的研究の道を開くことができると思われる」

彼の発見した紋章文字は、テキストに歴史が刻まれていることを直接証明することはできなかったが、名前を表わす文字の発見に役立つことがわかった。紋章文字の前に生起する文字は歴史上の人物の名であった。そればかりでない。ベルリンがいったように、紋章文字は地理的研究の道を開くことにもなった。すなわち、紋章文字の分布の研究により、各都市間の関係がわかるようになったのである。

紋章文字をもっている都市は、彫刻石碑をもつ二〇

○ほどあるマヤの都市のうち、約二〇ほどに限られる。そして遺跡の規模が大きく、重要な都市だったと思われるところでは、紋章文字の生起数が高い。その生起数の高い都市のうちでも、ティカルやパレンケやヤシュチランなどの都市では、二つ以上の紋章文字があり、また、ひじょうに早い時期から紋章文字が出現している。たとえばティカルでは、マヤの最初の石碑でもある石碑29の人物像が彫られている前面にすでにみられる。

紋章文字をもつ都市は、政治的にも経済的にも重要な都市だったと考えられるが、このように、二つ以上の紋章文字を所有し、しかも生起度数の高い都市は、それ以上に重要な都市だったと考えることができる。つまり、都市のあいだに階層性があったことは、遺跡の規模や出土品の質量からばかりでなく、紋章文字からも推測できるのである。

ティカル



ナランホ



ヤシュチラン



ピエドラス・ネグラス



パレンケ



コパン



セイバル



カラクムル(?)



モトウル・デ・サン・ホセ(?)



図63 紋章文字

紋章文字はその都市内で使用されるのがふつうであるが、ほかの都市でも使われることがある。たとえばティカルの紋章文字は、ナランホやヤシュチランやコパンなどに現われる。この現われ方も、各都市間に階層性があったことを示唆していて興味深い。たとえばナランホのように、ティカルに近くて、ティカルより小さな遺跡では、ティカルの紋章文字がナランホに現われるだけで、ナランホの紋章文字はティカルではみられない。ティカルの紋章文字は女性を表わす文字について生起するので、ティカルからナランホへ女性が降嫁したとみることができる。これに対し、コパンに現われるティカルの紋章文字は、のちにみるように違った現われ方をしている。

このように、紋章文字は、紋章文字をもつ都市とその紋章文字が生起する都市との関係、たとえば、支配―従属、婚姻、同盟などを示す役割も果たす。

コパンの石碑Aとセイバルの石碑10には、四つの紋章文字が東西南北の四つの方角を示す文字とともに生起している。七三一年の建立とみられるコパンの石碑Aには、コパン、ティカル、カラクムル(?)、パレンケの紋章文字が、それぞれ東、西、南、北の文字とともに生起している。八四九年の年を刻むセイバルの石碑10では、セイバル、ティカル、カラクムル(?)、モトゥル・デ・サン・ホセ(?)の紋章文字が、これも東、西、南、北の文字とともに生起している。これらほもしかしたら、七三一年頃と八四九年頃のマヤ世界の東西南北の四つの首都を記したものであるかもしれない。もしそうなら、マヤ人は自分たちの地を、彼らの思想どおり、実際に四つに

分け、それぞれの中心地を記していたとみることができ。

ともあれ私たちは、その都市特有の文字である紋章文字を知ったおかげで、各都市間の関係が推測できるようになったばかりでなく、歴史上の人物の同定まで、それをたよりにできるようになったのである。

碑文にかくされていた歴史

プロスクリアコフは、ピエドラス・ネグラスの碑文を研究し、一九六〇年に従来の説をくつがえす説を発表した。碑文は支配者の歴史を刻んだものである、というその結論は、次のような分析から得られた。

(1) 五年ごとに建てられている石碑は、七つのシリーズに分割できる。

(2) 七つのシリーズのうち、四つのシリーズのそれぞれ最初の石碑には、特別なテーマが刻まれている。高いところに設けられた、天体を表わす記号の帯で囲まれた台座に人が坐っている図である。その高いところにしつらえられた台座には、梯子がかけられ、そのまん中の帯状部分には、下から上へ向かって人の足跡がついている(石碑25、6、11、14)。それは、王座に昇ったということとを視覚的に表わそうとしたくふうのようにみえる。これを彼女は即位のモチーフと名づけた。おなじようなモチーフは、石碑33にもみられ、合計五つのシリーズで即位のモチーフが刻まれて

T 684

1 即位文字



T 644



2 誕生文字



T 740

図64

プロスクリアコフは就任日と名づけた。これは現在では即位の日とみなされている。この日付には、いわゆる「歯痛の文字 (T 684)」(図64の1)がづく。この文字は、したがって即位を表わす文字である。

(4)即位日より前の日付があり、「上向きガエル (T 740)」とあだ名された文字と関係している(シリーズ2、3、4、7)。その日付は、シリーズ中で一番古い日付で、プロスクリアコフは、それを開始日(イニシャル・デイト)と名づけた。この日は誕生日で、「上向きガエル」はポックと読まれることまで、現在ではわかっている(図64の2)。

以上の分析から得られた年数は、表5のようになる。

いた。

(3)即位のモチーフを刻んだ各シリーズ最初の石碑は、建立の日付ばかりでなく、それより古い日付をもっている。その日付は、前のシリーズ最後の日付と、そのシリーズ最初の石碑の建立日とのあいだ(石碑は五年ごとに建てられているので、五年間)にはいり、そのシリーズ中で繰り返し言及される。しかし次のシリーズがはじまると、もはや言及されることはなくなる。これを

シリーズ	誕生日から即位日 (即位年齢)	誕生日から次の シリーズの即位日 (寿命)	即位日から次の シリーズの即位日 (在位年数)	誕生日から次の シリーズの誕生日 (王と次王の年齢差)
1	?	?	1・15・16・13 (35年強)	
2	13・1・8 (12年強)	3・1・9・0 (60年強)	2・8・7・12 (47年強)	
3	1・2・5・19 (22年強)	3・5・14・11 (64年強)	2・3・8・12 (42年強)	1・19・3・1 (38年強)
4	1・8・6・18 (28年弱)	2・17・2・6 (56年強)	1・8・13・8 (28年強)	1・17・7・13 (36年強)
5	?	?	5・11・17 (5年強)	
6	?	?	17・16・16 (17年強)	
7	1・11・10・17 (31年強)	?	?	

表5

誕生日から即位日までの年数は、一、二、二二、二八、三一年となる。もちろんこれは、王が即位した年齢と考えることができる。

誕生日から次のシリーズの王の即位日までの年数は、六〇、六四、五六年となる。これは王の寿命に相当すると考えてよい。

即位日から次のシリーズの即位日までの年数は、三五、四七、四二、二八、五、一七年である。これは王の在位年数とみなせる。

王と次の王の年齢差は、三八年と三六年が得られた。親から長子への相続ではないことを示唆する数字である。いづれも、王朝の歴史が刻まれてい

るといふ假定を裏づけるに十分な数字である。

T740とT684の次には、それぞれのシリーズで決まった文字がつづく。これは、ほとんどの場合、そのあとに紋章文字がつづくので、王の名とみることができるといふことができる。

プロスクリアコフはこうして、マヤの碑文に歴史が刻まれていることを証明した。彼女の解読技法を簡単にいうと、次のようになる。

それまで日付について研究した人はたくさんいた。碑に刻まれているテーマや図象を研究した人もいた。テキストの同似構造に注目して、テキストを分析した人もいた。しかしそれらの個々の分析方法を総合してテキストを分析した人はいなかった。その最初の人がプロスクリアコフといふことができる。彼女は、文字の生起の仕方を、それに付随する場面と、豊富に記されている日付とに結びつけて考察した。だからこそ重大な発見をなしたのであった。

プロスクリアコフは、即位の文字と誕生の文字をもとに、七人の王の文字、女性を表わす文字、女性の名を表わす文字などをみだし、ピエドラス・ネグラスの王朝を再構成したばかりでなく、ナランホやティカルやヤシュチランなどの遺跡の碑文も検討し、同様な使用例を発見し、自己の説を立証することができた。

テキストを分析する指標となりうる文字には、いまみた誕生の文字や即位の文字のほかに、征服や死を表わす文字、女性を表わす文字、結婚を表わす文字などがみつかっている。これらはテ

キストを分析する上で役に立つ文字であるが、そのほとんどはプロスクリアコフによってみつげられたものである。一九六〇年からはじまる碑文の歴史的解釈の枠組は、プロスクリアコフ一人によって作られたといっても過言でない。

即位の文字

そこで、実際のテキストを分析していく前に、テキストを分析する際の指標となるこれらの文字をまずみてみることにしよう。

先に誕生文字と即位文字をみた。両者とも特徴ある文字であり、「読み」が期待できる。誕生文字の読み方については二章でふれたので、即位文字の読み方について考えてみよう。

即位を表わす文字 T 6 8 4 は、鳥または月 (20) の文字に、ちょうど歯が痛いとき湿布をするような感じで、ひもがかけられて結ばれている。それでトンプソンにより「歯痛の文字」のあだ名がつけられたのであるが、この文字にも、ひもが結ばれていること、結ばれているもの、即位に関係する文字であること、その文字が生起する場面、といったようなことを手がかりに、音価を与えようとする努力がなされてきた。

これまで多くの学者が賛成してきた読み方は、ホック (Hok~hok') であった。hok には「据える」「hok' には「出る。離れる。結ぶ」の意味があるからだ。しかし、鳥または月 (20) をゆわ

えたこの文字を十分にいい表わしているとは思えず、適切な読み方ということではできない。

しかし最近、それに換わる有力な読み方として、ペッツ (petz) が提出された。ペッツには、「動物を捕えるわな。そうして捕えられた動物」という意味のほかに、「他人のものをとる。村や町を支配する。所有地を奪う。征服する」とか、「酒袋をしぼませるように、手を重ねて置きながらしめつける」とか、「ある人を高職につかせる」とか、「少年と少女をある年齢に達したら結婚させるとりきめをする」とかいった意味がある。

「歯痛の文字」は絵文書にも生起する。マドリッド絵文書の九〇から九三ページ上段にかけて、この文字は、七面鳥や鹿などをわなで捕えた図の上の文に生起している。ドレスデン絵文書の二三ページ中段では、神が奉納物を手にしている図の上のテキストに生起している(図65)。これらの場合、「わなで捕える。わなで捕えられた動物」というペッツの意味に合致している。

「歯痛の文字」は即位の文字に使われているが、ペッツにも、即位に関係する「人を高位につける」という意味がある。

このようにみると、ペッツのほうがホックの意味よりも、よりよく文字の生起例を説明できる。それゆえここでは、「歯痛の文字」をペッツと読んでおこう。

即位は、「歯痛の文字」のほか、いろいろな文字で表わされている。誕生の文字ほど共通に使われてはいないのである。即位の文字がいろいろあるということは、地方的、時代的な差のほか

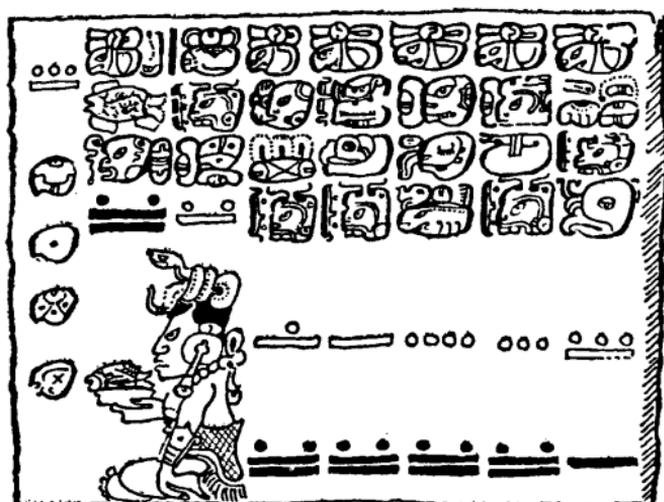


図65 ドレスデン絵文書23ページ中段

に、即位の形式とか、権力の質の違いとかいったものが反映しているためではないかと考えられる。たとえば、T644も即位の文字である(図64)。ベルリンは、T684とT644の使い分けは質の違いではないかと考えた。すなわち、T684はもっぱら俗権を、T644は神権を意味する可能性があることを示唆した。二つの権力の質の違いを裏づける証拠は、いまのところない。しかしなんらかの違いがあるから文字の違いとなって表われていることは、まちがいないであろう。その探求はこれからの課題である。

即位の文字と考えられるものにはいろいろな文字がある。そこでしばらく、即位に関する文字には、ほかにどのようなものがあるかを説明してみよう。

パレンケでは、T644は年の「着座の文字」と区別できない。だがよくみると、接尾字が違っている。

即位を表わす場合は、T246またはT178とT246が融合した接尾字がついている(図66)。T246がつくかつかないかで、意味が変わるといえることがで

即位の文字



T246

年の「着座
の文字」



図66



1



2

図67



1



2



3

図68

きる。

パレンケでは、即位を表わす文字がほかにもみつかっている。これらの文字は、よく知られているT684やT644とおなじ日付に使われていたことから、即位の文字と考えられたのである。図67に示したように、1と2の二つに大別できる。手と動物の頭を使って表わした1の三つは、少しずつ異なっている。なんらかの違いを表わしているのかもしれない。

ピエドラス・ネグラスでは、もっぱらT684が生起するが、T684に図68の1のような接字グループがつづいて、二つの文字で一つの句を作る場合がある(図68の3)。だがよく調べてみると、即位の記念日(たとえば二十周年)のときは、この接字グループのみが出来事を示すのに用いられている。それで、むしろこちらのほうが即位を示すのであって、T684は接字グループによって示される出来事を祝う儀式を表わすのではないかと、プロスクリアコフは推測している。

その接字グループは、T644と生起する場合もある(図68の2)。また融合する場合もある。

チラム・バラムの書では即位することを、「座につく」といい、クル(KUL)ということばが使われる。おそらく、T644はクルと読まれるにちがいない。

即位に関する文字は、誕生文字と違い、これからもほかにみつかる可能性が大きい。たくさんある即位に関する文字のそれぞれの正確な意味がわかれば、マヤの王朝史のなかでも重要な、即位の形態や状況などが理解されることになるろう。

女性標示文字

石碑にはスカートををはいて着飾った人物が登場するが、一九五〇年代まで、それらはすべて神官または神を表わすものと単純に片づけられていた。その大きな原因は、石碑は時を記すものであり、碑文には暦や天文、占や儀式的事柄が刻まれているにすぎない、と考えられていたからであった。

一九四六年、ボナンパックで壁画が発見され、女性が描かれていることは否定できなくなったが、それでもなお、石碑に描かれているのは歴史上の人物であり、女性が石碑にも登場することがあるということが確信されるまでには、一〇年以上の歳月が必要であった。つまり、プロスクリアコフの論文がでた一九六〇年以後のことであった。

マヤの石碑に登場する人物像は、男女の性別を示す特徴が少ない。胸のふくらみなど女性をはっきり示す特徴がなく、また、男性もスカートをはいたり、美しく着飾っている場合があるので、描かれている人物像からだけでは女性の同定は困難なことが多い。

だが、女性的像には、それに付随するテキストのなかに、女性の横顔を描いた文字が現われる。それにより、人物が女性かどうか分かる。

女性を示す文字は女性の横顔を描いた文字で表わされるが、女性の横顔を描いた文字には、数1の神や月カヤップの守護神を表わす文字など、たくさんある。トンプソンは、『マヤ文字のカタログ』でT1000からT1002までのあいだに、じつに一三の女性の横顔を描いた文字を入れていいる。それゆえ、人物像の場合に男女の区別がつきにくいのおなじように、どれが女性標示文字であるのか区別がつきにくい。

だがそれも、ベルリンが女性を示す文字は次のような特徴をもつものとして、そのほかの女性の横顔を描いた文字と区別しえたので、解決した。その文字は一括してT1000Fと名づけられている。

- (1) 額の前に、巻き毛、または網目様の卵形の飾りをもつ。こめかみにもあることがある。
- (2) 耳の横に垂れ下がる髪房。
- (3) ほおにII印。



ピエドラス・ネグラス石碑 3



ナランホ石碑 24

図69



ボナンパック建物 1 の部屋 2

図70

頭飾り

テキスト



ピエドラス・ネグラス石碑 1

頭飾り

テキスト



クリーブランド石碑 1

図71

図69のように、女性標示文字が接頭字としてついている文字は、その女性の名を表わしている。女性標示文字は、紋章文字といっしょに生起することがよくある。たとえばボナンパックの建物1の部屋2の壁画に描かれている女性の頭上の文字枠には、女性標識 T1000F が生起し、ヤシュチランの紋章文字と結合している(図70)。この女性はヤシュチラン(出身)の女性ということがわかる。また図69のナランホの石碑24の場合は、女性の名のあとにティカルの紋章文字が生起していた。この場合も、この女性がティカル出身の女性ということがわかる。

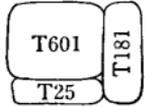
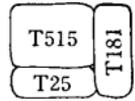


図72

リーブランド美術館の石碑1でも、頭飾りに名前を表わす文字があるが、そのうち一つはそのま
ま碑文中に現われている(図71の下例)。

女性を同定できる文字が発見されたおかげで、現在では約五〇の女性像が確認されている。そ
して文字や女性が登場する場面の考察から、女性の役割は大分理解されるようになってきた。

征服に関する文字

捕虜を捕えている場面にT515を主字とする文字が生起する。この文字は絵文書にもみられ
る。ただし絵文書では、T515はT601に換わっている(図72)。

ドレスデン絵文書の三ページに、チクチャン神とイグアナらしき動物の人物化された二体が、
ともに縄で縛られている図が描かれている。その図の上にあるテキスト中に、T601を主字と

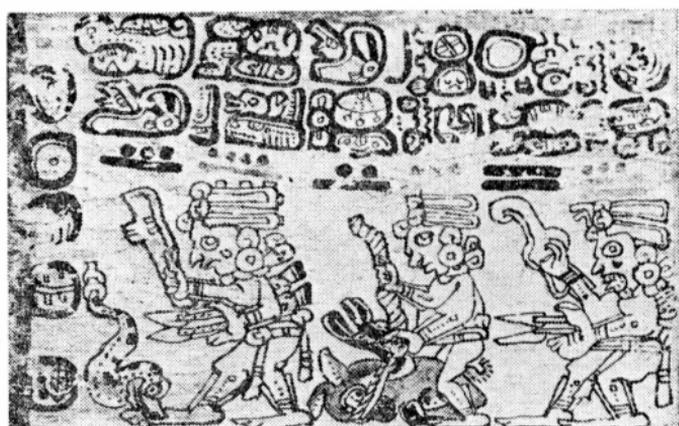


図73 マドリッド絵文書40ページ中段

する文字が生起する。その文字はクノロゾフにより、chu—ka—ah>chukahと読まれた。チュ(chu)は荷を表わす kuch(u)に使われており、kaとhaはランダが与えた音価であり、またchukには「捕える」という意味が『モトゥル辞典』にあることから、正しい読みといえる。

絵文書には神や動物が捕えられている場面がほかにもあるが、やはり、おなじ文字が生起している。マドリッド絵文書の四〇ページ中段では、神が鹿を捕えて縛っている場面に付随するテキストに、その文字がみられる(図73の人物の上の文字)。

このように、絵文書でも碑文でも、T515またはT601を主字とする文字の読み、意味はともに矛盾しない。

「捕える」という意味に関連する文字として図74の文字がある。この文字を介して、捕える人と捕えられた人が生起する。捕える人をA、捕えられた人をBとし、この問題の文字をXとすると、次のような順序になる。

A—X—B
 ……(1)
 X—B—A
 ……(2)



図74 捕える人

ユカテコ語の修飾語と被修飾語の語順は、被修飾語——修飾語である。主語と補語の語順は、主語——補語でも、補語——主語でも、どちらでもとれる。先にあげた関係式といま述べた言語の構造を照しあわせると、Xは「捕える人」という意味をもつと推測できる。(1)ではAがBを捕えた人、(2)ではBを捕えた人がAということになる。

Xとおいた文字を主字とする文字は、二つの文字のあいだの関係を述べた文字ともみることができが、このような二者のあいだの関係を示す文字はほかにもある。

結婚を表わす文字

月ウオヤシップの一部に使われるT552も二者間の関係を示す文字である。この文字は、前世紀の終りに絵文書の研究ですぐれた業績をあげたフェルステマン以来、「結合」を表わす文字と考えられてきた。男性と女性を表わす文字が、この文字を介して生起するからである。T565も絵文書ではT552とおなじような構文をとり、フェルステマンは「性交」を表わす文字と考えた(図75)。T565の変体にはT552が接中字化されたものもあり、両者はひじょうに似た意味をもつと想像できる。男と女を表わす文字が、これらの文字を介してかならず生起するわけではないが、これらの文字を介して、ある文字とある文字が生起すること、すなわち、これらの文字がある種の交わりや関係を表わしていることはまちがいない。



T 552



T 565

図75 結婚を表わす文字



ティカルの女

ひげリス王

図76 ナランホ石碑23

私たちは暦の文字の研究から、T 552 がカット (Cut) と読めそうであることを知っている。これがなんとか役に立たないものであろうか。

図76は結婚を表わしていると考えられている節である。ナランホの「ひげリス王」とティカルの女性が結婚したことを記した節とみられている。

先にカットという読み方ができそうであるといったが、この場合にそれが適用できるか、辞書を見てみよう。ユカテコ語の『モトゥル辞典』にも、『サンフランシスコ辞典』にも、カットウイニックの項があり、「女性に結婚を乞う」という意味が記載されている。まさに私たちが望んでいた意味があるではないか。私たちが追求してきたことが正しいとすると、この節は「ひげリス王がティカルの女性をめとった」という意味になるであろう。

親族に関する文字

結婚ということばがでてきたので、それに関連して、親族語は



図77 ティカル石碑5
(W. Coe 画)

どうなのだろうかと気になってくる。父、母、子などを表わすことばがあるにちがいない。それと思われる文字をあげてみよう。

図77は、ティカルで七三四年に即位したB王に関する石碑5の一部である。ここで注目したのは、C7とC10の文字である。C7の次は女性標識があり、その女性の名がつづく。C10のほうは、B王の前任者のA王の名がそのうしろに生起している。構造を単純化すると、B王—C7—女性—C10—A王となる。A王はB王の父と考えられるので、女性はB王の母にちがいない。そうするとC7は母を表わす文字で、C10は父を表わす文字とみることができ。父と母を表わす文字であるのなら、マヤ諸語のなかのどれかの方言に、その文字を説明できることばがあってもよいはずである。

しかし現在の知識では、父と母にあたることばをあてはめて納得できるものはない。いまのと



図78 ヤシュチランのリンテル24 (I. Graham 画)

ころC7とC10の文字を母と父と読むことはできないが、少なくとも母と子、父と子の関係を表わす文字と考えてもよいであろう。これと類似構文は、神殿4のリンテル3のG5、H9や、神殿1のリンテル3などにある。テキストを分析するときはこの文字に出くわすことが多い。その

ときに、父—子、母—子の関係を表わすとみられる問題の文字は、またとりあげることになるであろう。

テキストを分析するとき頼りになる文字はほかにもあるが、それらは結局テキストを分析することで得られたものであるから、テキストを分析するとき述べることにして、最後に、儀式に關す



図79

る文字を二、三あげ、テキストの構造の考察にはいることにしよう。

儀式に関する文字



図80

とはランダムも記している。血は神に捧げるもののなかで、もっとも貴重でふさわしいものであったからだろう。

数ある犠牲儀式のなかで、それにあたる文字が同定されているのは、舌に穴をあける儀式を表わすものぐらいではなからうか。この儀式はマドリッド絵文書の九六ページにもでてくる。文字はヤシュチランのリンテル24にある文字とおなじである(図79)。

そのほかの儀式に関する文字を二、三列挙しておこう。

魚を握った文字は、蛇の口から人(神)がでている場面に生起する。プロスクリアコフは、先祖または神格化された人に関する儀式を表わす文字と考えている(図80の1)。

手から種または水が落ちてゐる文字は、文字が表わすとおり、人物が種または水をまいてゐる場面にでてくる（図80の2）。

図80の3は、死後に関することを表わす文字と考えられている。

テキストの構造

私たちは、これまでテキストを分析する際に役立つ文字のいくつかをみてきた。それらを頼りにして各遺跡のテキストに取りかかるまえに、テキストの構造について少し考えてみることにしよう。

マヤ文字のテキストの典型的な形は、まず日付があり、次にその日の説明として、出来事を示す文字（動詞）や、名前や称号を表わす文字、紋章文字などが生起し、それから次の日付の表記、その日の説明、とつづく形式である。そこで、日付から次の日付の前までを文と呼ぶことにしよう。

日付から次の日付までが長いと、いくつかの節に分割できる。すると、節を定義する必要が生ずるが、ここで節とは、日付——動詞——行為者——紋章文字といったような文字群をさすことにする。長い文での節の区切りは、紋章文字やバカブ文字といわれているものや、繰り返し現われる文字などからほとんどの場合わかる。



図81 ヤシュチランのリンテル8 (T. Proskouriakoff 画)

端の上から三番目の文字はチュカフと読め、「捕えた」という意味をもつ。その次の文字は、右の捕えられている人物のふとももの文字とおなじであり、その捕虜の名とみなすことができる。もちろん、町の名や種族名の可能性もあるが、ここでは名とみて問題ない。この捕虜は、プロス

節で問題になるのは、名詞が二つ並ぶ他動詞型の構造であろう。碑文では、動詞——名詞——名詞という順になるが、どちらが主語でどちらが目的語になるのかわからない。そこで、そのような例を提供するヤシュチランのリンテル8をみてみよう(図81)。

二人の王がそれぞれ捕虜をつかまえている。文字は三つの部分に分かれている。左上端の7イミシュ14セックという日付からはじまり、右上の文字につづいて一節を形成している。それはおなじ内容を扱ったリンテルがほかにもある(リンテル41)ことから、問題はな

日付の次は動詞である。先にみたように、左上



図82

クリアコフにより、「宝石頭蓋骨」と名づけられたので、私たちもそう呼ぶことにしよう。右上に移り、二番目の文字はヤシュチランの鳥ジャガーとあだ名されている王の名で、三番目はヤシュチランの紋章文字である。一番上の文字の説明を抜かしたが、これは鳥ジャガーに関係ある文字か、「宝石頭蓋骨」に關係する文字かわからなかったからである。しかし、この文字はほかのテキストから、捕虜に關係する文字であることがわかる。ヤシュチランの建物44の中央入口上側の、階段テキストの捕虜のさがりのなかに、図82のような文字が記されている。これはアハウという捕虜を表わしている。それゆえ捕虜に關する文字といえるのである。

図はヤシュチランの鳥ジャガー王が、ふとももに「宝石頭蓋骨」の文字を彫った人を捕えている。それと文字テキストから、このテキストは次のように分析でき、だいたいの意味は、「7イミシユ14セックの日に、ヤシュチランの鳥ジャガー王は「宝石頭蓋骨」を捕えた」となる。

この文章構造を略して示すと、T(時)——V(動詞)——O(目的語)——S(主語)となる(図83)。それではこの構造はマヤ諸語の構造とあっているのであろうか。

じつはマヤ諸語は、高地マヤ諸語と低地マヤ諸語とでは、構造を異にする。他動詞構文を簡単に示すと、高地マヤ諸語では(T)——V——S——O、低地マヤ諸語では(T)——V——O——Sとなる。

マヤ諸語はいわゆる抱合語に分類されている言語で、Vと書いた動詞は、正確に

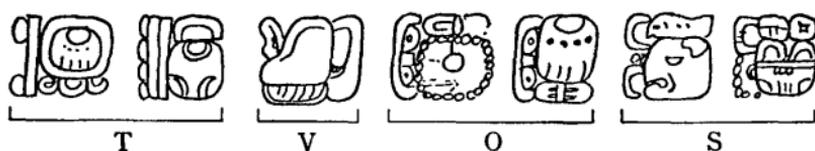


図83

いえば動詞ではなく、主語や目的語を代名詞で動詞に接辞化した複合物なのである。つまり、主語や目的語や時(相)などをもう一度代名詞でいわなければならぬ。この複合物をかりに動詞核と名づけると、この動詞核はあたかも一語のように発音される。つまり抱合するのである。

この動詞核は、いかえれば、文を成り立たすための義務要素であり、動詞核だけでも文は成り立つ。この動詞核の語順も、低地マヤ諸語と高地マヤ諸語では違うのであるが、その記述はここではあまり関係がないのでおいておくとして、文字との関係をまず述べると、次のようになる。動詞核は、一つの文字枠におさまった文字と符合する。文字の主字が動詞で、接字が人称代名詞や過去を表わす接辞にあたる。図83にあげたヤシュチランのテキストでいうと、動詞核は左から三番目の文字であり、その文字は、*chu—ka—ah*、つまり *chuk—ah* と読まれる。ユカテコ語では、*ah* は過去を示す接辞である。動詞は *chuk* (捕える) で、この場合、*chu—ka* と二つの音節文字素で書かれている。しかし、主語や目的語がない。この場合必要な三人称単数の主語は、 \square である。目的語は、三人称単数の場合、人称代名詞で表わす必要はない。つまり零要素(ϕ)である。例の場合、言語学的には、*u—chuk—ah—\phi* とならなければならない。ところが、この文字

には主語となる文字素がないので気にかかる。さらに、三人称の主語の E 、これは文字としてはT1で表わされ、よく現われるのだが、このT1(E)とT181(E)は、じつは相補分布なのである。それゆえ、T181を EPT と読むことまで正しいかどうか問題になってくる。実際、T181を EPT と読まない人がいる。この問題の解決は、T181の読み方ばかりでなく、文法的な問題に関してひじょうに重要な知見を与えることになると思われるが、このように言語学的に文字をみる人はあまりいない。

VのあとにはO、そしてSが生起していたが、この語順は、低地マヤ諸語の語順とおなじであり、高地マヤ諸語の語順とは逆である。

ここでも、三章の数字のところのみた結論とおなじ結論が得られた。すなわち、マヤ文字は低地マヤ諸語のことばで書かれたということである。だからといって、高地マヤ諸語を無視できるかという点、そうではない。暦の文字の解釈や上向きガエルの文字がポックと読まれたのは、高地マヤ諸語を知らなければできなかった。それゆえマヤ文字の解説には、マヤ諸語の広い知識が必要であることを再度ここで述べておく。

ヤシュチランのリンテル8の左右の文字についてはわかった。ではまん中の文字はどのように解釈できるのであろう。こちらは他動詞文ではなさそうである。というのも、最初に生起する文字は、先にみた、捕虜と捕える人の関係を述べた図74の文字である。二番目は左の捕えられてい

名詞句



楯ジャガー王，アハウの征服者

動詞句



即位



即位

前置詞句



ヤシュチランて



東て

図84

る人物のふともにも彫られた文字で、三番目は紋章文字のようである。そうすると、四、五番目は左の捕えている人物を表わす文字とみることが出来る。つまりこのテキストは、左のひざまずいた人物（B）を捕えた人が、左側の立っている人（A）であることを表わしている。Bを捕えた人がAである、という補語文とみることが出来る。ヤシュチランのリン

テル8は、ほぼ完全に理解できた。残るは、捕えられた人がいったいこの人かということであるが、残念ながらその手がかりはない。

これまで、文(節)というものをみてきた。そしてテキストの構造は、ユカテコ語の構造とおなじであることがわかった。日付—説明文字群という型は、絵文書やスペイン人の征服期のチャム・バラムの書にもみられる。それゆえこの型は、古典期からスペイン人征服後、さらには現代まで一貫してつづいている、マヤ諸語の特徴といえる形式であることがわかる。

では、節というものがあるならば、句とはどういうものをさすのか。図84のような例をあげることができるので、みていただきたい。

さてここまでの、マヤのテキストの一般的な構造を簡単に述べた。テキストには、日付しかない短いものもあるし、二〇〇を超す文字からなる長いものもある。それらはいま述べた、文、節、句に分割できるのである。

テキストの分析の方法

これでいちおう、マヤのテキストの説明を終った。あとは実際にテキストにあたるだけとなった。そこでその前に、テキストに取り組むための一般的方法をまとめておこう。

まず、日付の枠組を確認すること。それでテキストを文(節)に分けることができる。文は線

り返しのパターンや紋章文字などを頼りに、いくつかの節、句に細分できる。次に各々の節と日付との関係をはっきりさせること。一番よい方法は、日付を示し、その日の説明文字を線型に書きなおして記していくことである。

その次に、動詞や名詞の確認である。動詞はふつう日付のすぐあとにくる。だから日付のあとの文字を動詞とみて検討するのが賢明である。しかし、かならずしも日付のあとに動詞が生起するわけではない。だから動詞をみつけるのはむずかしい場合がある。これまでのところ動詞とみさせる目印は、T181しかない。もちろん、T181がつかない動詞があるだろう。もっとはつきり動詞と決めることができる目印がほしいところである。動詞の性質や意味の推定にはそれが生起する場面が手がかかりになることが多い。その典型的な例は、ヤシュチランのリンテル8である。動詞が音節的に書かれている場合や、表わしているものから意味や音価が決定できる場合もある。しかしながら、わかっている動詞はまだまだ少ない。

名詞の場合、名前や称号などを表わしていると考えられる。多くの場合、頭文字が使われているため、そしていくつかの文字がつながって生起するため、どれが名で、どれが称号かわからない場合が多い。ましてその読み方の決定となると、さらにむずかしい。

いまでは、だいたい動詞と名詞の区別はつくようになった。まだわからないものもあるが、区別がつくと、こんどは、それらの文字の意味や音価の推測に進んでいく。それには、関連する日

付や場面などを十分に活用しなければならぬ。さらに碑文の生起場所や状態、関連する石碑などの考察も忘れてはならない。その土地の碑ばかりでなく、近くの遺跡の碑や同時代の碑との比較、さらには全体の碑文中での使われ方の考慮など、広い視野に立って観察することも必要であろう。そうするうちに、同様な使われ方や変体などがわかり、文字の性格や意味の把握、さらには音価の決定と、研究は深まっていくであろう。

文字の表わしているものと意味や音価の符合が得られると、その文字は解読できたといえよう。文字の表わしているものがわかる場合や、文字が表音的構成になっている場合なら、解読できる可能性は大である。しかし、その絵文字的性格のため、意味しかわからない文字もあろう。さらに、意味さえわからない、私たちにどうしようもない文字が残るだろう。そう考えると、解読が終わったときとは、いくつの文字の意味と音価がわかり、いくつの文字の意味がわかり、意味も音価もわからない文字がいくつ残ったと、はっきりいえるときではなからうか。

現在、多くの遺跡のテキストの分析が進んできている。しかし、矛盾のない解読はまだ少ない。これから、その一面を知るため、そして文字からみたマヤ文明とはどんなものかを知るために、実際にテキストにあたっていくことにしよう。

第六章
テキストの分析



ティカルの神殿 I

ピエドラス・ネ格拉斯

ピエドラス・ネ格拉斯は、グアテマラのペテン州の北西の端、メキシコとの国境を流れるウスマシタ川の右岸にある。一八九五年、この地を最初に訪れた探険家テオベルト・マーラーによると、川岸に黒い砂岩がみられるところから、ピエドラス・ネ格拉斯（黒い石）と呼ばれるようになったという。ピエドラス・ネ格拉斯の王朝については、プロスクリアコフの業績を述べたときふれた。全シリーズについてくわしく述べることはできないので、ここでは、七つのシリーズのうちの三番目のシリーズをとりあげてみよう。

第三シリーズは、9・12・14・13・1 7イミシュ19パシュ（六八七年）からはじまる。それは即位のモチーフを刻んだ石碑6に記されている。この王の名は、石碑6のほかに、石碑8や石碑3に生起する。この王は、9・11・12・7・2 2イック10パシュ（六六四年）に生まれ、9・12・14・13・1 7イミシュ19パシュ（六八七年）に即位した。

石碑1と石碑3には、ほかのシリーズにはみられない女性が刻まれている。その女性が王とどんな関係にあるかをみてみよう。

図85は石碑3の文字部分である。このテキストの下には、台座に女性が坐り、その横に小さな人物が女性のひざにひじをつけて坐っている場面が描かれている。

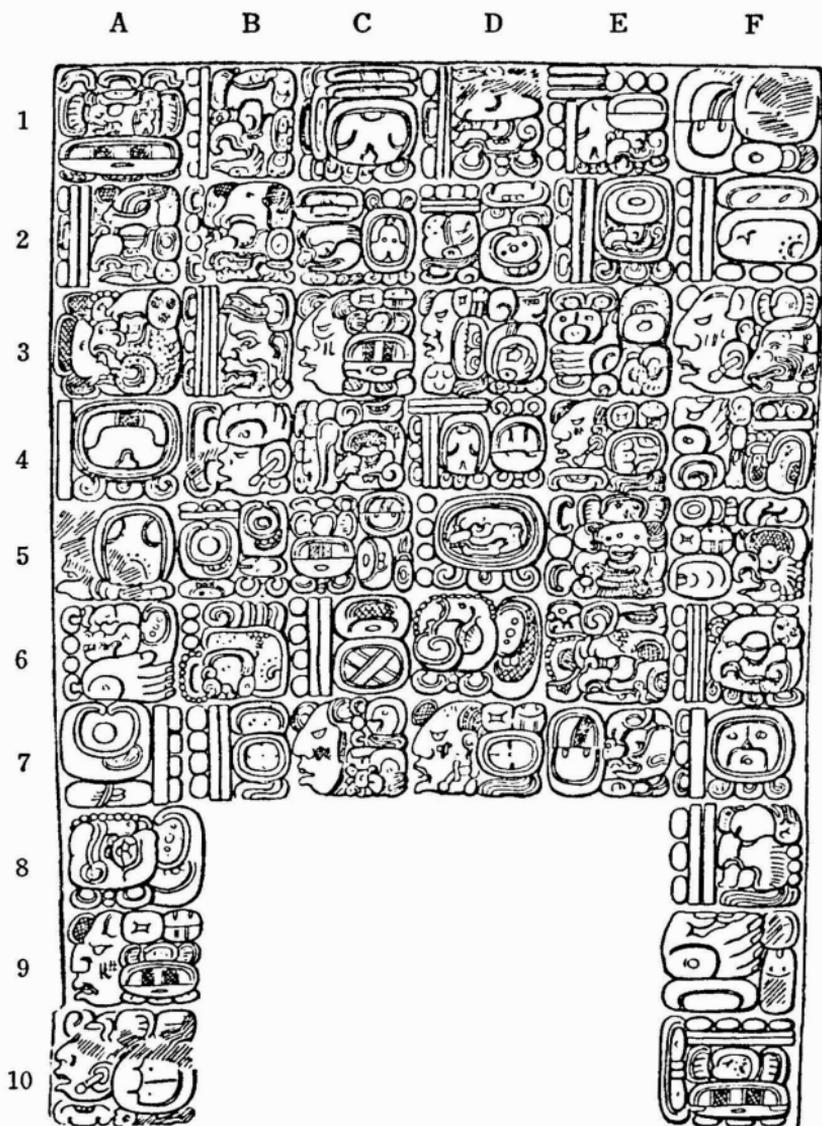


图85 石碑3 (A. P. Maudslay 画)

テキストのA1からB7まではイニシャル・シリーズで、9・12・2・0・16 5キップ14ヤシュキン（六七四年）の日付が刻まれている。A8は誕生文字で、次の二文字は女性の名である。

石碑1もおなじイニシャル・シリーズではじまり、おなじ文字群がつづく。しかし石碑1では、三文字で女性の名が表わされているのに対し（図71）、石碑3では二文字で女性の名が表わされている。その最初の、女性標示文字にカトゥンのついた文字が両者に共通するのみである。石碑1の女性を描いた人物の頭飾りのなかに、カトゥンの文字が刻み込まれていることから、それが女性の名のもっとも大切な部分と考えられる。

その日から12・10・0たった日、1キップ14カンキンの日が、C1からD2aに記されている。C1、D1はディスタンス・ナンバーで、C2aは前の日にこのディスタンス・ナンバーを足せという文字である。その日になにがあったかはD2bの文字が示している。この日付は石碑1にも記されており、また、D2bとおなじ文字がその日付のあとに生起していることから、おなじことを表わしていることがわかる。

それから1・1・11・10たった日、4キミ14ウオは、D4からC6に記されている。1・1・11・10というディスタンス・ナンバーはD4とC5aにあり、C5bは前の日にこのディスタンス・ナンバーを足せという文字である。ウイナルとキンの係数は、ウイナルの文字についているが、左上端を占めるほうが先に読まれるという原則を適用すると、ウイナル文字の上についている10

がキンの係数で、左についている11がウィナルの係数となる。前の日1キップ14カンキンに、1・1・11・10のディスタンス・ナンバーを足すと、4キミ14ウォとなるが、その日はD5、C6に記されている。計算からも、ディスタンス・ナンバーの読みが正しかったことがわかる。

その日のあとにまた誕生文字が生起している(D6)。そしてその次に、前にあった文字群とよく似ている文字群が生起する。女性標示文字がついているので、この人物も女性である。おそらく場面に描かれた小さな人物がこの女性であろう。最初の女性——この女性を弁別する文字はカトゥンであったので、この女性をカトゥン姫とでもいっておこう——の誕生より、1・14・3・10(約三四年)後に誕生している。この女性の名には、私たちになじみの深いキンの文字素があるので、キン姫とあだ名をつけてみよう。

キン姫の誕生から3・8・15たった日、11イミシュ14ヤシュは、次のE1からF2に記されている。その日の出来事はE3からE6までである。

E3aはふつうなら動詞である。しかし、この文字は、先にみた母と子の関係を表わす文字である。その文字の次のF3、E4は、カトゥン姫を表わす文字の少し変化した文字にすぎない。どこが変わっているかといえば、カトゥンの構成素のトゥン文字が頭字体に置き換わっているところだけである。キン姫はカトゥン姫の子どもと考えることができる。そうするとここでも、E3aは母と子を表わす文字とみてさしつかえない。

母がでてきたのだから、次に父がでてくるはずである。しかし、前章でみた父と子を表わす文字はここにはみあたらない。そのかわりに、1カトゥン5トゥンがF4b、E5に記されている。F4aは「期間の終り」を表わす文字の一つであることはすでに学んでいる。F5aは即位を表わす文字であることももう知っている。F5b、E6は、ピエドラス・ネグラスの第三代の王の名である。つまり、F4からE6は、第三代王の即位から二五年たったことを表わす節である。父と子を表わす文字はなかったが、予想どおり、キン姫の父、カトゥン姫の夫とみなせる第三代の王がここに生起している。

E3からE6までは、五章で父、母、子の関係をみたときとおなじ構造である。ここでもまず母があり、そして父の名が生起した。ただ父を表わすほうは、五章でみた構文と違い、即位から二五年たったと書かれている。11イミシュ14ヤシュは長期暦の9・13・19・13・1にあたる。その日は王が即位した日9・12・14・13・1　7イミシュ19パシュから、ちょうど1カトゥン5トゥン(二五年)たっている。

F6から最後のF10までは、前の日11イミシュ14ヤシュから「4・19たった日、6アハウ13ムアン、カトゥン14の完了」と書かれている。つまり9・14・0・0・0　6アハウ13ムアン(七一年)で、これはこの日の奉納日とみることができている。

私たちはほぼ完全にこのテキストを理解できた。よくわからなかったのは、D2bの文字(図86

9・12・14・10・11	9 チュエン9 カンキン	石碑 1
9・12・14・10・14	12 イシュ12 カンキン	石碑 7, 8
9・12・14・10・15	13 メン13 カンキン	石碑 3 (男性面)
9・12・14・10・16	1 キップ14 カンキン	石碑 1, 3 (女性面)
9・12・14・10・17	2 カーパン15 カンキン	石碑 8

表 6

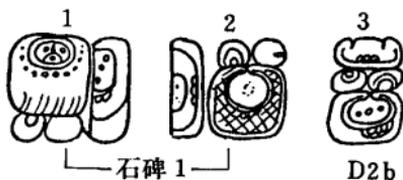


図86

の3)である。この文字は石碑1にもでてくる(図86の2)といった。石碑1には、この文字に関係する日よりも五日前の9チュエン9カンキンの日のことも記されている(図86の1)。カトゥン姫の一二歳頃のある出来事を表わす文字と考えられるが、これだけではわからない。しかしこれらの日にひじょうに近い日付が、ほかの石碑に記されているので、推測が可能である(表6)。

上で示したように、七日のあいだに五日が記されている。その最後の日付に関する節は、図87に示したように、カトゥン姫と第三シリーズの王の名が、結婚を表わすと考えられたT552を介して生起している。それゆえ、これらの日付は、結婚のための一連の儀式を記したものであるのかと考えることができる。王二歳、カトゥン姫一二歳のときのこと



図87

である。

石碑3を理解しようとしたことで、いろいろなことが明らかになった。第三代の王は、9・11・12・7・2 2イック10パシユ（六六四年）に生まれ、一二歳のときに一二歳のカトゥン姫と結婚した。そしてその日から四日後の9・12・14・13・1 7イミシユ19パシユ（六八七年）に即位した。碑文からみたかぎりでは、二二年も子に恵まれなかったカトゥン姫は、三四歳になってやっと子を授けられる。その子をキン姫と名づけた。

ヤシユチラン

ピエドラス・ネグラスのすぐそばを流れるウスマシタ川の上流には、ヤシユチランがある。ヤシユチランにおける石造記念物の建て方や内容は、ピエドラス・ネグラスのものとはだいぶ異なっている。イニシャル・シリーズをもつ石碑は少なく、また、五年ごとに記念碑を建てる習慣もなかった。ヤシユチランとピエドラス・ネグラスのあいだに交流があったことは、地理的に近いからばかりでなく、紋章文字や王の名などのよく知られている文字からも否定できないが、このように記念碑の建て方がまったく異なることは、ひじょうに興味深い。

ヤシユチランのテキストの主流は、ほかの遺跡ではほとんど利用されることのなかったリントル（楣石）である。リントルには、征服の場面や自己犠牲の場面など、数々の場面が刻まれている。

る。征服の場面を刻んだリントル 8 (図 81) の分析でわかるように、どちらかというところ、場面が主で、文字テキストが従の關係になっており、場面は短い文字テキストを理解するための手助けとなっている。リントルのほとんどは、カレンダー・ラウンドの日付しか記していないので、年代決定には困難が伴う。このことは、文字の理解にも大きな障害となっている。

また、石碑や祭壇は保存状態が悪く、利用できる碑文は限られている。しかも、それらの判読できる碑文のすべてが利用できればいいのだが、悪いことに、利用できる写真や手書きの資料も限られている。そのため、活用できる石碑やリントルなどの資料はますます限定されている。

このような数々の障害にもかかわらず、プロスクリアコフは、ヤシュチランの碑文を研究し、楯ジャガーと鳥ジャガーと名づけた二人の王を中心に、ヤシュチランの歴史を再構築した。その再構成には数々の問題点が含まれているのであるが、すべてをとりあげることはできないので、ここでは興味深いところだけをみていくことにしよう。

ヤシュチランの王朝には、楯ジャガーと鳥ジャガーの名をもつ人物がそれぞれ三人いたと考えられている。これらの王のなかで重要なのは、楯ジャガーⅡと鳥ジャガーⅢである。そのほかの楯ジャガー王や鳥ジャガー王は、テキストに一回または数回しかでてこない王で、実際に存在したかどうか疑わしい王もいる。

ほとんどの碑文は、楯ジャガーⅡと鳥ジャガーⅢを扱っている。それゆえ、以後楯ジャガーⅡ

をたんに楯ジャガーと呼び、鳥ジャガーⅢのほうも鳥ジャガーと呼ぶことにしよう。まず、この二人について少し述べておこう。

楯ジャガー王は、9・10・15・0・0（六四七年）頃生まれたと推定されている。しかし誕生も即位も記されていない。石碑18や石碑20からみて、おそらくプウク地方から侵入してヤッシュランを征服した王と考えられる。石碑18の日付は3エツプ14モルであるが、このような日付はマヤ古典期にはない。また石碑20の日付も古典期表記と違い、6イッシュ16カンキンである。イッシュに対する月の係数は、2、7、12、17のうちのどれかであるので、これまた古典期の日付様式にのっとっていない。このように、どちらも古典期の日付表記とは異なること、また石碑の様式も古典期様式と異なり、プウクの（先のとがった石碑、ふとももの顕著な丸みなど）であることから、古典期の日付表記に慣れていない人、すなわちプウク地方からきた人と考えられているのである。

しかし、この二つの日付のうちのあとのほうの3エツプ14モルは、9・14・17・15・11 2チ
ユエン14モル（七二九年）と考えられている。その日は楯ジャガーが最初に登場する日、9・12・8・14・0（六八一年）（石碑19）より五〇年近くもたっているので、もはやマヤ表記に慣れていない人によって刻まれたとはいえない。このように楯ジャガーは、プウク地方の出身とはいえない。しかしこの頃プウク地方から、なんらかの影響があったことはまちがいない。

楯ジャガーが登場する二番目の日付は、先の日より一日後の、9・12・8・14・1 12イミシ

ユ4ポプの日である。その日はアハウという捕虜を捕えた日であるばかりでなく、ほかに三人の捕虜をつかまえた日でもある。アハウという人物はかなり重要な人物であったようで、それ以後楯ジャガーの名には、「アハウを捕えた人」という句がついてくるものがふつうとなる。それから一二月後に、T714 (図80の1) が示す儀式が行なわれている。その後、「カン・クロス」や「チュエン」といった捕虜をつかまえ、9・15・10・17・14 (七四二年) に死亡した。

鳥ジャガーの場合は、誕生の日も即位の日もはっきり記されている。誕生は9・13・17・12・10 (七〇九年) である。彼の即位は、9・16・1・0・0 (七五二年) だが、前の王である楯ジャガーの死亡した日、9・15・10・17・14 (七四二年) からその日まで、約一〇年のあいだがある。このあいだには権力闘争があり、鳥ジャガーはそれに勝って王位についたようである。

即位を記した石碑11には、それ以前の、即位に先だつ征服と王位の継承(指名)が刻まれている。石碑の裏面の日付は、9・15・19・1・1 1イミシュ19シュル(七五〇年)である。鳥ジャガーが太陽神の仮面をかぶり、小人神をかたどった笏と棍棒をもって、三人のひざまずいた捕虜の前に立っている。これは征服を表わす図とみてよい。上部には楯ジャガーとその妻が描かれている。おそらく、死んだ二人の記念であろう。石碑の表のほうには、9・15・15・0・0 (七四六年) と、9・15・9・17・16 (七四一年) の日付が記されている。碑文の内容は十分に理解されていないが、場面は二人の人物がバトンをもって向きあって立っているところである。それゆ

え、こちらのほうは王位の継承を表わす図とみられる。これらから石碑11は、即位に先だつ征服と王位の継承を表わしていると解されるのである。

また、リントル 16 (9・16・0・13・17 6カーバン5ポブ 七五二年)には、プロスクリアコフが「月の一族」と名づけた人物が征服されたことが記されている。鳥ジャガーの即位の日、9・16・1・0・0 (七五二年) よりも前の出来事である。

鳥ジャガーはまた、リントル 48や47などの遠い祖先の碑を再利用している。

このように、鳥ジャガーは、即位の前の征服や前任者の楯ジャガーのことを記し、さらには遠い祖先の碑を再利用した。それはとりもなおさず、楯ジャガーが死んだあとにおこった争いに勝ったことばかりでなく、自分は正当な家系の王であるということを知らしめるために必要な作業であったにちがいない。

楯ジャガーの碑に比べると、鳥ジャガーの碑には征服の場面は少なく、そのほかの場面のほうが多い。きつと安定した政権であったからにちがいない。ヤシュチランの全盛期を築いた王といえよう。鳥ジャガーの死はいつ頃かわかっていないが、9・16・17・6・12 (七六八年) 頃と推定されている。

年齢の問題



リントル24
9・13・17・15・12



リントル27
9・15・10・17・14

図88

楯ジャガーと鳥ジャガーについて簡単に述べてみた。このなかで一番問題になるのは楯ジャガーの寿命ではなからうか。碑文から推定される彼の寿命は、じつに九〇歳を超す。そんなことがあるのだろうか。碑文の分析からだされたマヤの王たちの寿命は、概して長い。楯ジャガーの九〇を超す年齢をはじめ、パレンケの大王バカルは八〇歳、ティカルのA王もそれに近い年まで生きていた。ピエドラス・ネグラスの王の寿命は六〇歳、六四歳、五六歳といずれも高かった。マヤ社会は老人の支配した社会だったのだろうか。

楯ジャガーの年齢の推定のもととなったのは、いわゆるベンハイッチ・カトゥン表記である。ベンハイッチ・カトゥン表記は、楯ジャガーの場合、図88のように、4と5の係数のついたものしかない。ベンハイッチ(T168 図61)のついていない、ただの3カトゥン表記は石碑20にみられる。これをベンハイッチ・カトゥン表記とおなじものとみると、10・0・0を境に係数は一つずつふえており、カトゥン(二〇年)ごとの年代を表わすものと解釈できる。そうすると、楯ジャガーの誕生日は、9・10・15・0・0(六四七年)頃となる。そして

9・15・10・17・14（七四二年）に死ぬまで、じつに九〇歳以上生きたことになる。

ベン・イッチ・カトゥン表記の係数は、カトゥンごと、つまり二〇年ごとに一つずつふえている。これはかなり一貫しているが、矛盾がないわけではない。たとえばリントル25のAとF4は、5イミシユ4マック（9・12・9・8・1）のことを扱っているのに、楯ジャガーには4ベン・イッチ・カトゥンがついている。またリントル32、53では、9・13・5・12・13で、楯ジャガーの3カトゥン目の日付であるのに、5ベン・イッチ・カトゥンとなっている。こうした例をみると、ベン・イッチ・カトゥンから年齢を導きだすのはよくないといえるかもしれない。しかし、このような例外はごくわずかであり、ほぼ一貫して、ベン・イッチ・カトゥンは、二〇年ごと、つまり一カトゥンごとに一つずつ係数がふえているので、その表記は年齢を表わすというこの意見は捨てがたい。

そうかといって、正しいともいいきれない。先に述べた矛盾のほかにも、この解釈に疑問を感じる例をつけ加えることもできる。碑には楯ジャガーが描かれている。どれも若々しい。もしベン・イッチ・カトゥン表記が二〇年ごとの年齢を表わすのなら、その係数がふえるにつれて、描かれている楯ジャガーも老いていってよいようなものである。

描かれている人物は実像ではないという考えは、碑に描かれているのは神、または神官であるという意見に代表されるように、以前からあった。しかし歴史上の人物を扱ったものなら、少し

は実物に似ていてもよいはずである。実際キリグアの石碑では、年をへるごとに人物像は老けていき、実像に近く描かれている。それゆえベン・ヒッチ・カトゥンが二〇年ごとの年齢を表わすという解釈が正しいとすると、碑の像は実際の人物像を表わしていないということになる。プロスクリアコフが述べているように、楯ジャガーに関連ある建物22の周辺で、ひじょうに年老いた人の骨と、三人の女性の墓が掘りあてられるようなことでもあるなら、そのような疑問はたちどころに解消するのであるが。

鳥ジャガーの活躍は、彼の3カトゥン目（四〇歳から六〇歳）にあたる。ベン・ヒッチ・カトゥン表記も3の係数しかなく、このことは、ベン・ヒッチ・カトゥン表記がカトゥンごとの年代を表わすという仮定によくあっている。いまのところ、この仮定に替わるものはない。そこで、ここでも、若干の疑問を感じるものの、ベン・ヒッチ・カトゥン表記は、カトゥンごとの年代を表わすものとみておこう。ちょうど私たちが十代、二十代というように、マヤ人は、1ベン・ヒッチ・カトゥン、2ベン・ヒッチ・カトゥンといったとみることができ。

王の名前

王の名前には、ほとんどの場合、捕えた捕虜の名がついている。楯ジャガーを例にとつていうと、図88のように、「楯ジャガー “死” を捕えた王 ヤシュチラン」とか、「楯ジャガー “アハ

ウ」を捕えた王 ヤシュチラン」といった句を作る。

楯ジャガーの場合、たくさん捕虜がいるが、一番よくでてくるのは「アハウ」とあだ名されている捕虜である。そのほか、「チュエン」とか「カン・クロス」と名づけられた捕虜がいる。「死」とあだ名された捕虜もいるが、頭蓋骨の上部に「アハウ」の文字素があること、「死」の生起するリントル45は「アハウ」を捕えた日とおなじ12イミシュであることから、「アハウ」と同一人物とみられている。いずれの場合も、「アハウ」と共起しないのでまちがいない。

鳥ジャガーの場合は、捕虜の名は「カワック」と「宝石頭蓋骨」である。「宝石頭蓋骨」については、リントル8の説明のときふれた(図81)。鳥ジャガーの名の一部にてでくる捕虜は、「カワック」が一番多い。楯ジャガーの「アハウ」に匹敵する、かなり重要な捕虜であったとみなすことができる。

鳥ジャガーは、楯ジャガーと違い、別名をもっている。図89の石碑12の節は、鳥ジャガーの即位した日とおなじ日付に関する節である。鳥ジャガーを表わす文字とはかなり異なり、またところ別人のようである。しかし、鳥ジャガーの即位とおなじ日付であり、しかもその名の前に即位の文字が生起するので、同一人物とみなすことができる。同節はリントル21にある(図89)。即位から九日後のことを記しているが、こちらには鳥ジャガーの文字がある。また、この二つのテキストは共通の文字をもっている。特徴あるのは、結婚を表わすときに使われるカット文字

即位の文字



鳥ジャガーの別名



石碑12

鳥ジャガー



リンテル21

図89

(T552)に爪らしきものが上に乗った文字である。プロスクリアコフは、この爪に注目し、この人物を「鳥―爪ジャガー」と名づけた。鳥ジャガーの別名である。

女性

楯ジャガーと鳥ジャガーのテキストには、女性が何人かでてくる。それらの女性がどういう関係にあるのかみてみよう。

建物44の中央入口の階段の下部の文字テキストには、母と子、父と子を表わす文字がでている。テキストの構造も、五章で説明した構造とおなじ楯ジャガー―母―父となっているので、楯ジャガーの両親にちがいない(図90の1)。

それでは母の名を表わす文字は、楯ジャガーの母の死亡を表わすとみられるリンテル27の文字群(図90の2)とおなじなのであろうか。名前を表わす文字群は、一見したところ異なっているようにみえる。しかしよくみるとおなじ文字の変形したものであることがわかる。それはこれまでみてきた知識を少し応用すればわかる。

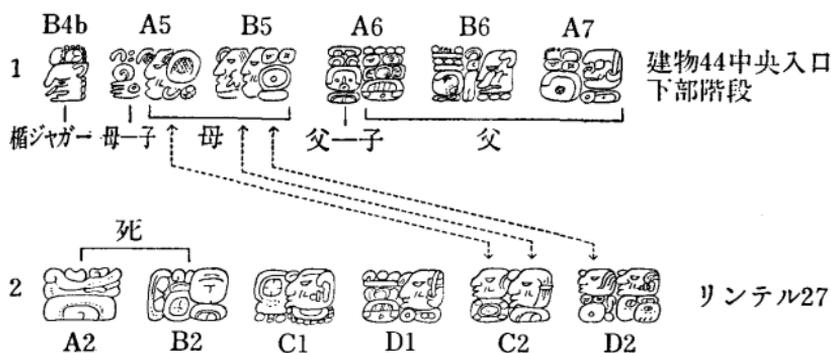


図90

リントル27のC2の左下の文字素は、「楯」の文字である。この文字はパレンケの大王パカルを表わす文字としてもでてくる。パカルを表わす方法には、「楯」を描いて表わす方法と、パとカとラという音節文字で表わす方法と、両者をもに用いる方法の三つがある。このパカルの表わし方については、二章の八二〜八三ページでふれているので参照してほしい。いま問題にしている母の名を表わす文字を比べてみると、建物44の場合(A5)は、右下は消えてよくわからないが、右上にはパという音節文字がある。一方リントル27では、C2の左下に「楯」の文字がみえる。パカルの表わし方を考えると、両者はおなじものであると推測できる。

それは、その文字の次にある文字B5の左半分とC2の右半分がおなじで、B5の右半分とD2の左半分がおなじであることから、正しい見方であったことがわかる。これは両方とも二つの女性標示文字とムルクを主字とする文字から成り立っている。ただしリントル27のD2の右下の文字はいわゆるバカブ文字で、節の終りによくてくるものである。これはB5にはない。これで両者は一見違



石碑11

図91



リントネル41



E

F

G

H

I

J

K

リントネル17

図92

うが、同一人物の名を表わしていることがわかった。リントネル27のほうは、9・13・13・12・5 6 チクチャン8サクの日(七〇五年)に関する文字群である。A2、B2は死を表わす句とみられているので、この日が楯ジャガーの母の死亡した日とみることができると。

楯ジャガーには、もう一人の女性がいる。こちらは妻である。この女性の死はリントネル28(9・15・19・15・3 七五年)に記されている。この女性はリントネル28のほか、53、32、石碑11にも生起するが、共通する文字は「空」(T561)である。この女性は楯ジャガーの妻であると同時に、鳥ジャガーの母である。それは、これまた母―子の関係を表わす文字が石碑11にてでることからわかる(図91の左端)。そうすると、楯ジャガーが死に、鳥ジャガーが即位するまでの約一〇年は、王位継承者であるはずの息

子、鳥ジャガーに、王位がすなりゆずられなかつたということになる。

鳥ジャガーのほうには同時期に少なくとも二人の女性(妻)がいた。一人はイック、もう一人はイシュという日の文字をそれぞれの名前を表わす文字群にもっている(図92)。女性イシュが現われるリンテル17のFには、ティカルの紋章が生起している。イシュはティカルから嫁いできた女性であろうか。鳥ジャガーに関する女性にはほかにもいる。きつと一夫多妻であったのだろう。

これまで、ピエドラス・ネグラスとヤシユチランの王朝についてみてきた。これからもおなじような方法で、パレンケ、ティカル、ナランホ、キリグア、コパンといった、重要な遺跡をみていく。その記述は、それぞれまず歴史的概略を述べ、そこから適当なところをとりあげる、という方法をとった。つまり個々の遺跡をそれぞれの時間にそって述べていくわけであるが、それは横のつながりがありあまりよくわからず、マヤ世界を全体的にとらえにくいかもしれない。そこで一番最後に、マヤ文明の絶頂期である七〇〇年頃の世界をとりあげてみることにする。先に述べるやり方は、いかなれば縦の糸、後で述べるやり方は、横糸とみることもできよう。そうして織られたマヤの歴史像はいかなるものになるか、まずはつづけてみよう。

パレンケ

シエラ・デ・チアパスの北斜面の森のなかの、ほんの少しの平坦地にパレンケはある。これま

で述べてきた二つの遺跡に比べると、パレンケは、私たちにをはるかに近づきやすい遺跡であり、またよく整備されている。

パレンケの歴史は、土器の分析からは古典期前期の初期、さらには原古典期までさかのぼることができ、9・10・0・0・0（六三三年）以前は、弱小都市にすぎなかった。しかしそれ以後急激に成長し、9・13・0・0・0（六九二年）にかけて絶頂期を迎える。遺跡の中心にある「宮殿」や「碑文の神殿」、十字グループと呼ばれ、たがいに密接な関係にある、「十字の神殿」、「葉の十字の神殿」、「太陽の神殿」の三つの神殿などの重要な建物は、この頃のものである。それらはパカルとチャン・ハバールムという二人の王によって築かれた。ところが9・17・0・0・0（七七一年）以後、パレンケは急速に衰退してゆく。そして八二〇年までには完全に放棄されてしまう。

パレンケのテキストはいくぶん趣きを他と異にする。材料として選ばれたものは、ほかの遺跡と異なり、建築装飾の一部となったパネルやスタッコであった。「碑文の神殿」や十字グループの神殿などのパネルには、美しい像とともに多くの文字が刻まれている。それらは歴史的事柄に加え、神話や宗教的情報を伝えている。テキストの分析は進み、王朝史はいうにおよばず、マヤ紀元零年頃の神々の理解も深まってきている。

再構成された王朝は、カワック・王の誕生（四六五年）からクック・王の死（七八三年）までの三

〇〇年以上におよぶ。ただしテキストは、パカル王（在位六一五～六八三年）以後のものに限られる。それ以前の王朝は、おもに「十字の神殿」のテキスト（六九二年）から再構成されたものである。

パレンケは芸術的美しさでマヤの遺跡のなかでも際だっている。自然主義的な描写、形や配列の美しさ、繊細な線など、一目でパレンケのものともわかるくらいである。またここは、マヤ世界で初めて神殿下に墓が見つかったところとしても有名である。「碑文の神殿」下でみつかったその墓は、パレンケを隆盛に導いたパカル王のものともみられている。ところが、碑文の解説から導きだされたパカル王の死亡年齢は八〇歳であるのに対し、骨から調べられた推定年齢は四〇から五〇歳で、大きな開きがある。しかしパレンケの碑文は、ハインリッヒ・ベルリンやデイビツト・ケリー、さらには最近催された三回の円卓会議における多数の学者の研究により、かなり理解されるようになった。

いま述べた一例からでもわかるように、碑文の分析から再構成された歴史にはいくつかの矛盾がある。解釈に矛盾が生じる原因としては、ヤシュチランと同様、カレンダー・ラウンドによる日付が多いために、長期暦上のいつにあたるかはっきりわからないことや、日付の表記法が特殊なこと、鍵となる文字がいかなる意味をもつかかわらないことなどがあげられる。その顕著な一例として、「碑文の神殿」下の墓の蓋の側面に記された五四文字からなるテキストをみてみよう。



1 8アハウ 2 13ポプ 3 誕生 4 6エツナツプ 5 11ヤシュ 6



7 死? 8 パカル 9 パレンケ 10 11 12

図93 蓋の南側面の文字群 (M. Greene Robertson 画)



16 5カーパン 5マック 17 死? カワック I

図94 蓋の東側面の文字群の一部 (M. Greene Robertson 画)

石棺の蓋の四側面に刻まれたこのテキストは、一三の日付をもち、全部で五四文字からなる。パカル王とその祖先を扱ったものとみられるが、その解釈はなかなかむずかしい。

テキストは南側面の左端からはじまる(図93)。最初に、8アハウ13ポプ、その次に誕生文字、そして、ふつうなら誕生文字の次に名前が生起するところだが、いきなり6エツナツプ11ヤシュの日付がきている。そしてその後ろにパカル王の名、パレンケの紋章文字がつづく。これだけでは意味をとりがたい。また二つの日付が長期暦上のいつにあたるかわからない。しかし幸いなことに、8アハウ13ポプは宮殿C棟の階段碑文にイニシャル・シリーズで与えられ、その日の次には誕生文字、パカル王の名、パレンケの紋章文字とつづくので、どちらも9・8・9・13・08アハウ13ポプ(六〇三年)であり、パカル王の誕生した日であることがわかる。8アハウ

13 ポプと誕生文字、パカルの句は、「碑文の神殿」の西側パネル E2～F3 やパサデナ板の A1 と A2 にもあり、確実である。

もう一つの 6 エツナツプ 11 ヤシュの日付は、宮殿板（ルス I 板）の J9～I10 や「碑文の神殿」の西側パネルの T5 にもあるが、カレンダー・ラウンドの日付のみで、それだけをとりだしたのでは、一八九八〇日ごとに繰り返されるので、長期暦上のいつにあたるのかわからない。しかし、「碑文の神殿」の西側パネルの T6 と S7 には、ディスタンス・ナンバーとして 4・1・10・18 がある。9・8・9・13・0 8 アハウ 13 ポプから数えると、9・12・11・5・18 6 エツナツプ 11 ヤシュになることがわかる。また宮殿板の 6 エツナツプ 11 ヤシュも、計算から 9・12・11・5・18 であることがわかるので、その日であることはまちがいない。宮殿板では、この日の次に、プロスクリアコフが死を表わすとした文字がつづくので、この日 6 エツナツプ 11 ヤシュは、パカル王の死亡した日と考えることができる。この日がほんとうに王の死んだ日だとすると、パカル王はじつに八〇年（4・1・10・18）も生きたことになる。そうすると、棺内に残っていた骨の分析からだされた推定死亡年齢（四〇～五〇歳）とあわなくなる。

碑文の解釈と科学的データのこのくい違いは、いったいなにに起因するのであるらう。「碑文の神殿」下の墓に残っていた人物がパカルでないならば問題ない。しかし常識的にいって、その考えは受けいれられない。なぜなら、この骨は、碑文が扱っている王に捧げられた神殿の下の墓か

らみつけられた骨であるからだ。それでは碑文の解釈のほうにまちがいがあるのだろうか。しかし現在のところ、碑文から導きだされたパカル王は八〇歳の寿命であったというこの解釈に替わる案はない。

6 エツナップ11ヤシュが死亡した日とみられたので、その日のあとに生起する図93の7の文字は死を表わすにちがいない。この文字は、それにつづく文のなかの、王の名前を表わす文字について九回もでてくる。そして各々その前には、カレンダー・ラウンドの日付が生起する。いま述べた解釈に従うと、カレンダー・ラウンドの日付は、それぞれの王の死亡した日となる。その例は東側面にある16、17番目の文字である(図94)。5カーバン5マック、問題の文字、カワックI王と書かれている。この日は、長期暦上の9・4・10・4・17(五二四年)にあたると考えられる。

カレンダー・ラウンドの日付しか記されないのに、それがどうして長期暦上の日が9・4・10・4・17と定められたかという点、石棺の蓋のテキストに全部で一三ある日付の、6番目と11番目の前にあったT644がもとになった。これはハアブ(年を表わす。T528)と「着座の文字」(T644)が融合した文字で、年の終りを示す。それで6番目の日9・7・0・0・07アハウ3カヤップ(五七三年)と11番目の日9・10・0・0・01アハウ8カヤップ(六三三年)が定められた。テキストの日付は順に並んでいるものと仮定すると、3番目から5番目の日付は

6番目の日(五七三年)より前、それ以後11番目までは五七三年から六三三年のあいだの長期暦上の日を選ばれる。そして11番目以降のカレンダー・ラウンドの日付は、六三三年よりあとの日となる。こうして、カワツクI王をはじめとするパカル王の先祖九人の死んだ日が導かれた。

しかし、こうした解釈だけでは正しいかどうか分からない。それを裏づける証拠は、「十字の神殿」のパネルの右半分のテキストにあった。すべてを分析することはできないので、先にとりあげたカワツクI王の部分だけをとりだしてみよう(図95)。

1・16・7・17 (R8) (R9) — 誕生 (S9) — 5アハウ3セツク (R10) (S10)
 — カワツクI (R11) — 即位 (S11) (R12) — 5カーバン0ソツツ (S12) (R13)
 となっている。いままで学んできた語順とかなり違っており、なにを表わそうとしたのか、理解することはむずかしい。しかし、これは下に記したように解釈すると矛盾がなくなる。

カワツクIの次の王ホツク(カンシユルI)は、9・4・14・10・4 5カン12
 カヤツプ(五二八年)に即位している。それゆえ、棺の蓋の日9・4・10・4・17
 5カーバン5マツク(五二四年)をカワツクIの死亡した日とみてなんらおかしく

(9・1・10・0・0) 5アハウ3セツク (誕生) 465年

1・16・7・17

(9・3・6・7・17) 5カーバン0ソツツ (即位) 501年

ない。四年間も王がいないことになるが、ヤシュチランの楯ジャガーから鳥ジャガーに交代する
とき一〇年もあいていたことを考えると、問題はあまるまい。

「碑文の神殿」の下の墓の石棺の蓋や「十字の神殿」のパネルのテキストなどから、こうして、
パカル王に先だつ、カワツクⅠ、ホックⅠ（カンⅡシュルⅠ）、カワツクⅡ、パールム、イック女
王、アークⅡカン、サックⅡクック女王の誕生や即位や死亡の日が決定された。

パカル王は、9・8・9・13・0 8アハウ13ポプ（六〇三年）に生まれ、一二歳のときに即
位し、9・12・11・5・18 6エツナップ11ヤシュ（六八三年）に死亡した。六八年も在位し、
パレンケを繁榮に導き、八〇歳で死亡した。そして死後、「碑文の神殿」下の墓に埋葬された。

パカル王の次の王は、チャンⅡパールム王であった。パカル王が死んで一三二日後に、即位し
た。四八歳であった。そして六六歳で死んだ。チャンⅡパールムは、パカル王とアフⅡポーⅡへ

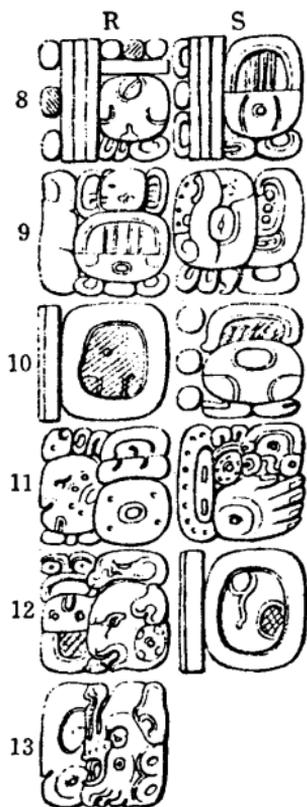


図95 (A.P.Maudslay画)

ルとあだ名されている女性のあい
だに生まれた子であった。

パカル王以後の王、チャンⅡパ
ールム、ホックⅡ（カンⅡシュル
Ⅱ）、チャーク、チャツクⅡスツ
ツ、クツクとあだ名されている王

チャン=パールム



誕生	9・10・2・6・6	2キミ19ソツツ	635年
即位	9・12・11・12・10	8オック3カヤツプ	683年
(死)	9・13・10・1・5	6:チクチャン3ポブ	701年

ホックII(カン=シュルII)



誕生	9・10・11・17・0	11アハウ8マック	643年
即位	9・13・10・6・8	5ラマツト6シュル	701年
(死)	9・14・9・14・15	9メン3ヤシュ以後	719年

チャーク



誕生	9・12・6・5・8	3ラマツト6サック	678年
即位	9・14・10・4・2	9イック5カヤツプ	721年

チャック=スツツ



誕生	9・11・18・9・17	7カーバン15カヤツプ	670年
即位	9・14・11・12・14	8イシュ7ヤシュキン	722年
(死)	9・15・0・0・0	4アハウ13ヤシュ以後	731年

クック



即位	9・16・13・0・7	9マニック15ウオ	764年
(死)	9・17・13・0・7	7マニック0パシュ以後	783年

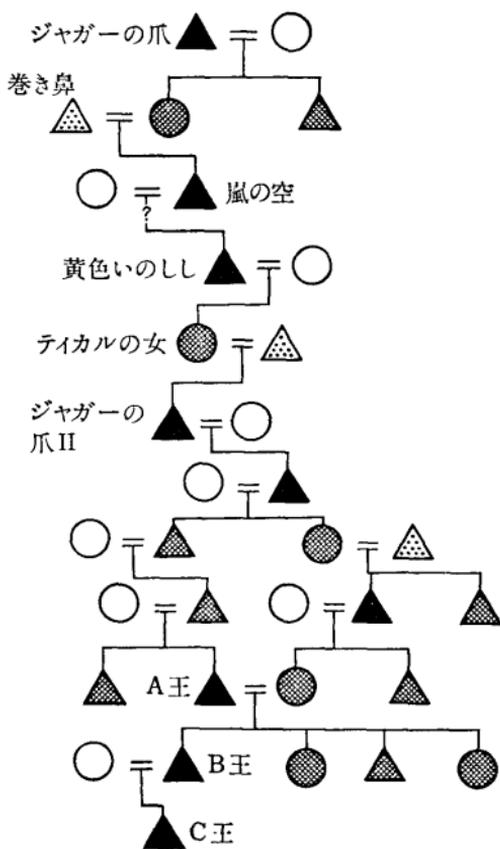
図96

私たちは、十字グループのパネルや「宮殿板」や「九六文字の碑文板」などから同定されている。それらの王の誕生や即位などはどうして得られたかを述べることも興味深いことであるが、ここでは、誕生や即位や死亡した日を記すだけにとどめておこう(図96)。

ティカル

ティカルは、マヤ文明の栄えた地域のほぼ中心に位置し、社会的にも文化的にも文字どおりマヤ世界の中心であった。

ティカルの王朝についても、



王位継承権をもつ者
 王
 継承王

図97 ティカル王朝の系図

研究はかなり進んでいる。たとえば、クレメンシー・コギンズは、碑文からばかりでなく、発掘された多数の墓からの情報を考慮に入れ、次のような王朝の系図をこしらえた(図97)。このような系図は碑文の研究からだけではとても得られない。というのも、碑文の量は限られているからである。それゆえ、碑文を理解するためには、ほかのいろいろな情報を活用する必要がある。この場合、墓から得られた土器や骨などの埋葬品からの情報をもとにしているのだが、これは一つの新しい研究の方向を示したものといえよう。この系図は正しいとはいきれないが、将来修正

されることがあっても、ごくわずかであろう。それゆえ、これをもとに考えると、ティカルでは、王族の世襲により王朝が維持されていたということがができる。

十二代のうち九代が世襲の男の王であった。世襲すべき男の後継者がい



図98 A王

ない場合は、娘に婿をとることで補った。おそらくその婿たちも、ほかの王家、または貴族階級から選ばれたのであろう。貴族層はティカルの場合では、紀元前には出現していたことが骨の分析からも確かめられている。りっぱな墓から出土した骨は、そのほかの骨より大きかったのである。栄養状態がよかったためであろう。

ティカルの王朝を系図に従い、碑文からたどることは興味深い仕事であるが、ここでは、古典期後期の繁栄をもたらしたA王を中心に考えてみることにしよう。

A王(図98)は、9・12・9・17・16 5キップ14ソツツ(六八二年)に即位した。彼は古典期前期の繁栄を築いた「嵐の空」王の即位からちょうど13カトゥン後に即位している。13カトゥンはちょうど短期暦の一周期にあたる。マヤ人にとって重要なその一周期に即位の日を合わせたことはまちがいない。

A王は、西方ドス・ピラス方面からティカルにやってきたと考えられている。ドス・ピラスでは、ティカルの王「マッコーを捕えた人」が六七九年または六八二年に、階段碑文に勝利を刻んでいるという。ドス・ピラスの階段碑文のテキストはまだ刊行されていないので、この「マッコーを捕えた人」がA王なのか、それともその父なのか、だれなのかわからない。テキストが刊行されるまで残念ながらはっきりいうことはできないけれども、少なくともA王の即位前後に、ドス・ピラスでティカルの王が勝利を刻んだことはまちがいないようである。ドス・ピラスは、グ

アテマラ高地との通商を可能にしたパシオン流域の要衝である。そこをおさえる必要があったのであろう。

このように考えると、ティカルとワシヤクトゥンのあいだにみつかった堀の意味もよくわかる。ティカルの北方、歩いて五時間ほどのところにワシヤクトゥンがある。ワシヤクトゥンは、歴史がはじまって以来、ティカルに勝るとも劣らない都市であった。そのワシヤクトゥンへ向かって徒歩で一時間、約四・五キロのところ、深さ三メートル、幅三・六メートル、全長九・五キロの堀が一九六七年にみつかった。これはワシヤクトゥンの脅威に備えた防堀ではないかと考えられる。この堀は六〇〇〜七〇〇年のものだという。つまり、A王が即位する前後に築かれたものである。一九六七年以後、ティカルの南側にもおなじような防御システムが発見されている。南北の防御を固める必要があったのだろう。西はドス・ピラスの征服、南北は防御堀の築造で対処した。それでは東はどうか。東は、A王の即位から一一六日後に、ナランホに女性を送ることで対処している。

こうみてくると、次のようにいえよう。五五〇年頃から目立った活動のなかったティカルは、A王の即位によつてはじめて四方の防御を固めて、13カトゥン前に「嵐の空」王が築いた繁栄を、ふたたび謳歌することになった。おそらく遺跡の中心にある神殿Ⅰ、ⅡはA王によつて建てられたものであろう。コンプレックスNも建物5D-33も彼の手になる。

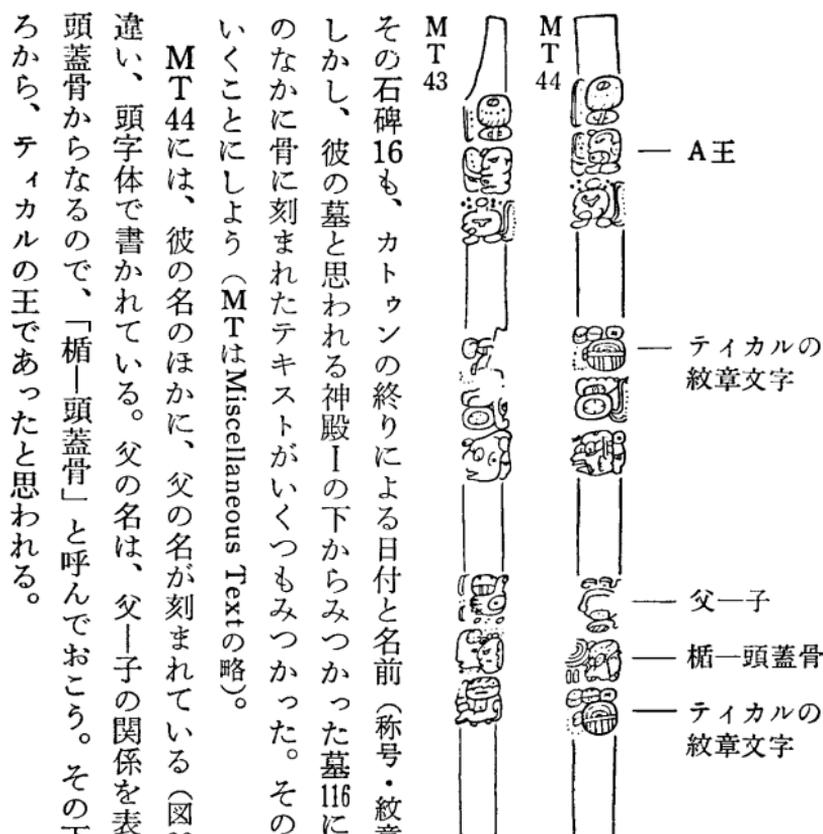


図99 骨に刻まれたテキスト
(A. Seuffert 画)

その石碑16も、カトゥンの終りによる日付と名前(称号・紋章文字)の短いテキストでしかない。しかし、彼の墓と思われる神殿Iの下からみつかった墓116にはおびただしい副葬品があった。その骨のうちのひとつ、MT44をまずみていくことにしよう(MTはMiscellaneous Textの略)。

MT44には、彼の名のほかに、父の名が刻まれている(図99)。ここではA王は通常の文字とは違い、頭字体で書かれている。父の名は、父—子の関係を表わす文字の下に記されている。楯と頭蓋骨からなるので、「楯—頭蓋骨」と呼んでおこう。その下にティカルの紋章文字があるところから、ティカルの王であったと思われる。

王はたくさん建物をたて、それまでにない繁栄をティカルにもたらした。しかし、A王は、自分のことを記念碑に刻むことはあまり好まなかったようである。彼のことは、

わずかにリントル3(神殿I)と石碑16にみえるのみである。

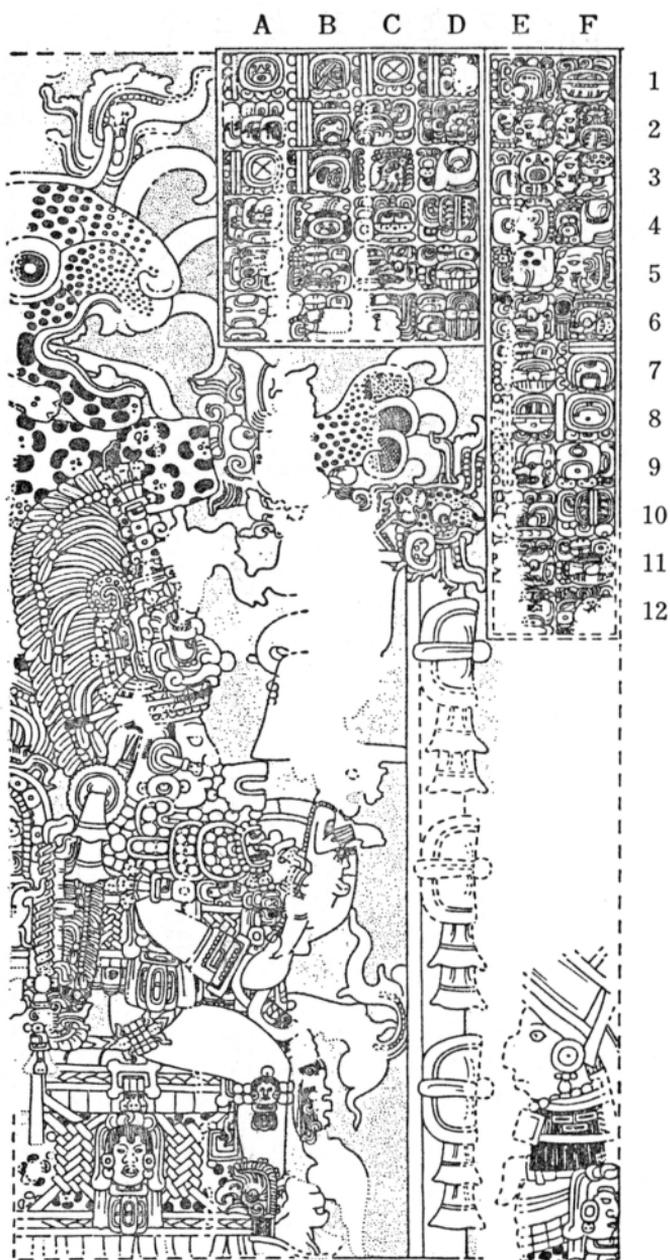


図100 神殿Iのリンテル3 (W. Coe 画)

MT 44とそっくりなのがMT 43である。こちらも九文字からなり、違いは最後の三文字でしかない。この部分はMT 44が父の名を表わしていたのに対し、母の名を表わしている。つまり、MT 43と44は一对のテキストとなっている。

MT 43と44に刻まれていたA王の父と母の文字は、A王の主テキストである神殿Iのリンテル3にもみることができ(図100)。リンテル3は、9・13・3・0・0 9アハウ13ポプ(六九五)年にはじまり、全部で四八文字からなる。最初の日9アハウ13ポプは、次でみるナランホのテキストにも記され、その日に関することを述べる文字もおなじ文字である。おそらくナランホとともになにかを祝ったのであろう。それから7・18(一五八日)後の11エツナップ11チェンのこと、さらに四〇日後の12エツナップ11サックのことが記され、最後に、A王が9・12・9・17・16 5キップ14ソツツに即位したことが記されている。11エツナップ11チェンの日に関する文字には、楯の文字がみられ、またカラクムル(?)などの紋章文字がみられるところから、軍事的な征服か、あるいはなにかそれに類する出来事を記したものと思われる。四〇日後の12エツナップ11サックの日には、儀式を表わす魚をつかんだ手の文字や舌に穴をあける儀式を表わす文字がみられるところから、四〇日前の出来事に対する儀式を記したものと考えることができる。

その12エツナップ11サックに関する文の一節、E1からE7までの節に、MT 43と44で同定できた父(F6)と母(F3)の文字をみることができ。父・母―子の関係を表わす文字はないものの、構造的には、これまでみてきたのとおなじ形の、子―母―父となっているのでまちがいない。ここで同定できたA王の父「楯―頭蓋骨」は、ドス・ピラスの階段碑文No. 2にも生起するという(六六二年)。彼こそが「マツコーを捕えた人」なのかもしれない。

祭壇5には女性の名がみられる。祭壇5はA王の像を刻んだ石碑16と対になって用いられているので、この女性はA王の妻とみなすことができる。しかしそうであるとする、矛盾が生じてくる。というのは、図77でみた石碑5にはB王の父と母が刻まれている。父はA王であるので、母は当然A王の妻である。祭壇5に刻まれている女性がA王の妻であると、石碑5に刻まれているその女性とおなじでなければならぬが、文字が異なるからである。これはどういうことであろう。これまでみてきたことから、この石碑5の解釈はまちがいに思われる。そうすると、祭壇5のほうの解釈がまちがいであろうか。それともA王のもう一人の妻であらうか。石碑16と対であっても、祭壇5に刻まれている女性の名をかならずしもA王の妻とみなす必要はないので、わからない。祭壇5のテキストは十分に理解されているとはいいたい。もう一度検討しなおす必要がある。

A王への言及は、墓116の骨のテキストを除くと、9・14・0・0・0(七二一年)以後はない。しかし、A王はさらに二三年ほど生存していたように思われる。というのは、B王の即位は七三四年であるが、そのあいだにほかの王がいたという証拠はないからである。

B王はA王の子でもある。それは、父―子、母―子の関係を表わす文字を検討するときにとりあげた石碑5(図77)に記されている。

その次はC王で、七六八年に即位した。C王はB王の子であることは、即位を記した石碑22に

刻まれている。ティカルの王朝はC王以後はわからなくなる。石碑24や11など、石碑は八六九年まで建てられているが、破損していたり、風化しているため、同定されていない。

ナランホ

ナランホでは、石碑はほぼ一〇年ごとに建てられている。しかし、六五二年から六九二年までと、七三一年から七七一年までのあいだは、石碑は建てられていない。この空白期があることで、ナランホの王朝は、三つのシリーズに分けることができる。石碑の奉納日（石碑に刻まれた最後の日）で各シリーズの期間を示すと次のようになる。

シリーズⅠ 9・8・0・0・0（五九三年）～9・10・10・0・0（六四二年）

シリーズⅡ 9・13・3・0・0（六九五年）～9・14・15・0・0（七二六年）

シリーズⅢ 9・17・10・0・0（七八〇年）～9・19・10・0・0（八二〇年）

シリーズⅠは三人の王、シリーズⅡは二人、シリーズⅢは三人の王がいた。ナランホの各シリーズはそのほかの都市からの影響が深く、シリーズⅠはカラコル、シリーズⅡはティカル、シリーズⅢはマチャキラーの碑文と共通する文字をもっている。各シリーズがこれらの都市といかに関係があったか、たとえば、カラコルを例にとって示してみよう。カラコルの石碑3には、たかさんの日付が刻まれているが、そのうち次の二つの日付にはよく知られている誕生文字がつづく。



図101



9・6・12・4・16 5キップ14ウオ
 9・7・14・10・8 3ラマツト16ウオ

誕生した人物を王Ⅰ、王Ⅱとすると、年齢差は約二二年で、両者は親子の関係であったと推測できる。王Ⅰは9・9・5・0・0頃まで、王Ⅱは9・10・0・0・0頃まで支配の座にあった

と推定されているが、じつは王Ⅱがナランホのリンテル1にも記されているのである。ナランホのシリーズⅠには三人の王（かりにIa、Ib、Icと名づける）がいたが、Ib王がカラコルの王Ⅱと同一人物と考えられるのである。おなじ誕生日であるし、名前も一致するし、活躍した期間も一致するからである。

ナランホでもっとも興味深いのはシリーズⅡである。そこで、シリーズⅡを簡単にとりあげることしよう。

シリーズⅡには少なくとも一四本の石碑があるが、そのうち四本に女性が刻まれている。これら四本は、男性の像を刻んだ石碑と対になって建てられている。

その一つ石碑24は、前面に女性の像が描かれ、裏面には9・12・10・5・12 4 エップ10ヤシュ（六八二年）ではじまるテキストが刻まれている。シリーズⅡの最初の日である。この日は石碑24のほか、石碑3や29でもイニシャル・シリーズで与えられている。よほど大事な日であったにちがいない。おそらく石碑の前面に描か

れている女性がティカルからナランホへやってきた日なのであろう。どうしてそのような推測ができるかという点、この女性を表わす文字には、ティカルの紋章文字がついていること(図101)、よく知られている誕生文字や即位文字がこの女性に關してはないことからである。

この日はティカルのA王が即位して一六日後である。おそらくA王が東の脅威に對処するため、娘かA王に近い女性をナランホへ嫁がせたのだらう。というのも、この女性の名にはたえずティカルの紋章文字が生起しており、あたかも自分の出身地、ティカルを誇っているかのようであるからだ。また、先に図100でふれたティカルの神殿Iのリンテル3の最初の日とおなじ日が、石碑29に記され、おなじ文字がつづく。さらに1カトゥン後にもそれを記念していることから、ティカルの王家につながる人物であるはずがない。A王に近い人物でなければそうするはずはないからだ。

このティカルからきた女性の像は、石碑3、24、29に刻まれている。女性が石碑の正面に刻まれることはめずらしく、この女性がナランホでいかに絶大な権力をもっていたかがわかる。これに反し、彼女の夫は碑には描かれていない。彼女の夫となった人物は、ティカルというあまりに強大な権力のまえに小さくなっていたのであろう。ナランホはそれまではとるにたらない小さな町であったが、ティカルの防衛政策にくりこまれ、ティカルの女性を嫁にもらったため、大きな町に発展したと思われる。



図102



図103 ひげリス王

ナランホを第二の繁栄に導いたこの女性への言及は、9・14・3・0・0（七一年）までつづいている。もっともこの日は、9・13・3・0・0（六九五年）の1カトゥン記念日であるので、9・13・3・0・0頃までといったほうがよい。9・13・3・0・0という日は、ティカルの神殿Iのリンテル3（図100）の最初の日とおなじで、その日の出来事を示す文字もおなじである。ティカルとナランホが共通に祝った儀式と思われる。

ティカルの女性の両親と思われる文字が石碑24のE7からD13の節に現われている。父親と思われる文字は図102の文字である。先に、ティカルからやってきたこの女性は

ティカルのA王の娘、または縁者といった。しかし、父を表わすとみたこの文字は、A王の文字とはだいぶ違い、同一人物とは思えない。

父—子の関係を表わす文字（左端の文字）があることから、ティカルの女性の父親にまちがいないと思われるが、そうすると、ティカルの女性はA王の娘ではなく、A王の縁者、ティカル王家の一員の子ということができる。ナランホの石碑24に現われるティカルの紋章文字をもったこの人物は、ティカルの王家の象徴である「空」の文字（左から三番目の左半分の文字）をもっているので、ティカル王家の一員とみ

られるが、残念ながらティカルの碑文中には現われないので、A王とどのような関係なのかわかない。

ティカルの女性はナランホへきて五年後に子どもを生んでいる。その子「ひげリス」は、9・12・15・13・7 9 マニック0 カヤップ(六八八年)に誕生した(図43)。女性の像を刻んだ石碑と対になって建てられた碑は彼を描いている。「ひげリス」はナランホ土着の家系とティカルの家系の両方をひいた子であるが、その表わす文字からは、ティカル王家の子孫であることをより誇っていたように思われる(図103)。というのは、「空」の文字はティカル王家の象徴であるが、彼の名にはたえずその「空」の文字がつくからである。

ひげリス王は9・13・18・4・18 8 エツナップ16 ウォ(七一〇年)に結婚した。相手はティカルの女性であった。この女性は石碑31に描かれている女性と思われるが、その碑文の風化ははげしく、ティカルの女性ということ以外はわからない。

ひげリス王は、9・14・15・0・0(七二六年)の日を刻んだ石碑18でも言及されているのかもしれない。しかしその石碑、さらにそれより5トゥン前の石碑28、31とも風化がはげしく、テキストの判読は不可能である。シリーズⅡはこの日をもって終る。ひげリス王はわずか四〇歳たらずである。外来の襲撃にたおれたのであろうか。

ティカルのA王についての石碑は9・14・0・0・0でとまる。その子B王が即位するのは

9・15・3・6・8（七三四年）であり、二三年の空白がある。そのあいだの事情はよくわからないが、この空白期は、ナランホのシリーズⅡの終焉となんらかの関係があるにちがいない。この期間になんらかの混乱がおこった。そのため、ティカルでは二三年の空白期間が生まれ、ナランホではシリーズⅡの滅亡となったのであろう。

キリグアとコパン

キリグアとコパンは、直線距離で約五〇キロしか離れていない。マヤ地域の南東部の二大中心地であり、たがいに交流があった。彫刻様式やデザインが似ているし、碑文には共通する日や類似する節がある。最初、キリグアはコパンの影響下にあった。たとえば、キリグアがコパンから得たものの一例として、むしろ（ポプ）の織りをかたどった碑をあげることができる。コパンでは七〇二年にその石碑Jが建てられているが、キリグアでは約五〇年後の七五一年に、むしろ織りの石碑Hが現われている。コパンの石碑Jを模倣したことはまちがいない。

力関係は時代とともに変化する。最初コパンの影響下にあったキリグアが、やがてコパンから独立し、モタグア流域の支配権を獲得する。そのあたりを碑文からみてみよう。

コパン、キリグアとも五世紀の後半には石碑を建てているが、王朝史としてたどれるのは、コパンでは五六四年から、キリグアでは七二五年からである。これまでのところ、コパンでは六代

の王、キリグアでは五代の王が同定されている。しかし、すべての王が確実に同定されているわけではない。たとえばキリグアでは、第三代と第四代の王は、いたかどうか疑問である。これはテキストがむずかしいことや、それらの王に関するテキストが少ないことが原因である。

コパンやキリグアの碑文は、他都市の碑文とだいぶ趣きを異にしている。ひとつの文字ます、多いときには四つも五つも文字がつまこまれていて、それだけでむずかしい印象を受ける。実際テキストを分析しはじめると、多くの日は歴史的事柄よりも儀式的事柄に関係しており、王朝史の解明が困難であることがわかってくる。またペテン中心部の碑文と比較すると、異なった文字がたくさんあることがわかる。おそらくこれは方言的な差によるのであろう。そのため、ペテン中心部の諸都市の碑文の研究からわかったことが適用しにくい。

このようにコパンやキリグアのテキストには、これまでにみなかった障害がある。同定されている王たちも、ペテン中心部のものと比べるとはるかに問題が多い。碑文はまだ十分に理解されてはおらず、これから述べることには多くの推論がはいっている。

コパンで一番多く言及されているのは、王Ⅲと王Ⅳで、それぞれ、18ジョッグとヤシュユマッコーとあだ名されている。キリグアでは王Ⅰである。多く言及されているので、ほかの王たちに比べるとたしかであるが、誕生や即位などをとりあげると、すぐさま問題がでてくる。これらの王はほぼ同時代であるので、彼らの時代をとりあげてみよう。



図104 王18ジ
ヨグ



図105 王I



図106



図107

コパンの第三代の王18ジヨグ(図104)は、9・12・4・3・14(六七五年)に誕生し、9・13・10・0・0(七〇二年)頃に即位したと考えられている。しかしいずれも、誕生文字や即位文字によりはっきり確かめられているわけではない。

キリグアの王I(図105)は、9・14・13・7・17 12カーパン5キャップ(七二五年)に権力を得たと考えられている。その日の出来事を示すのは図106の文字である。しかし、この文字を誕生文字と考える人もいる。コパンやキリグアのテキストの分析はこのようなもので、まだまだ問題が多い。

キリグアの王Iが権力を得て一三年後、キリグアにとって、そして少なからずコパンにとっても重要な出来事がおこる。この日の出来事は図107の文字で表わされているが、斧があるところから、襲撃に関する文字ではないかと考えられている。つまり、この日9・15・6・14・6 6キミ4セック(七三七年)は、キリグアの王Iがコパンを襲撃し、コパンの王18ジヨグを捕えた日と考えられている。というのは、この日は、コパンには一度だけ現われるのに対し、キリグアでは少なくとも四度現われている。つまりコパンにとってより、キリグアにとって重要な日であるからだ。また、コパンでは9・15・5・0・0を最後に、二〇

年の空白期間が生じているからである。キリグアはこの勝利により完全に自立した中心地となった。そして急に建築活動が盛んになってくる。

そのところを少し別の観点から推測すると、次のようになる。キリグアは紋章文字を9・15・0・0・0（七三一年）にもった。つまり、自立した。その日から9・19・0・0・0（八一〇年）まで、五年ごとに石碑を建てる習慣がはじまった。繁栄しはじめたのであるが、モタグア流域を支配するには一つの関門があった。それはコパンである。コパンを打ち砕く必要がある。そのため、9・15・6・14・6にコパンを攻撃し、勝利した。コパンのきずなから解き放たれ、キリグアはモタグア流域の通商路の支配権を得た。そこは、グアテマラ高地とカリブ海をつなぐ、黒曜石とひすいの交易路である。それをにぎれば富がもたらされる交易路であった。

キリグアでは、9・14・13・7・17（七二五年）と、9・15・6・14・6（七三七年）は、繰り返し言及されている。上で推測したような日であったかは別としても、ひじょうに重要な日であったことはまちがいない。しかし、それはのちの碑において言及されているにすぎない。すなわち、約二〇年（七五六年）から約五〇年（七八五年）後に建立された石碑においてである。石碑は五年ごとに建てられているので、これは不思議である。また、コパンでは、9・15・6・14・6の日のことが一度であるが、記されている。負けた不名誉な日を記すことがあるのだろうか。そのような疑問もわいてくる。

9・16・12・5・17 6カーバン10モル(七六二年)には、コパンで第四代の王ヤシュユマッコーが即位する。キリグアではまだ王Iの時代である。このヤシュユマッコーに関する碑は、18ジヨッグ王よりはるかに多く、コパンが一番栄えた時期といえる。だが、ヤシュユマッコーとキリグアの王Iの関係もわからない。

キリグアの王Iは、9・17・0・0・0(七七一)になると、マヤ世界でもっとも高い石碑E(約一〇メートル)を建立する。そして約六〇年の在位ののち、9・17・14・13・0(七八四年)に死亡したとみられている。

これまでキリグアとコパンの碑文をみたわけであるが、テキストがむずかしく、推論が多かった。本論で行なった推論にもいくつかの疑問がわいてきて、かならずしもすっきりしたものになっていない。まだまだ研究の余地がある。

横のつながり

さて、これまでおもだった遺跡の個々の王朝史をみてきたわけだが、各王朝は独立に存在していたわけではない。横のつながりがあった。ティカルとナランホの関係やコパンとキリグアの関係などについては少しふれたが、もうすこし広い視野に立ってマヤ社会をみることも必要ではなからうか。

考古学的には、たとえばメキシコ高原のテオティワカンの土器がティカルに現われることから、テオティワカンとティカルとの関係が推測されているように、いろいろな都市間の関係が推測されている。私たちはこれまで碑文をみてきたのであるから、碑文からマヤ社会がどのようなものであったかをみたいものである。

各都市間の関係を知るもっとも頼りになる文字は、五章でみた紋章文字である。ある都市の紋章文字がほかの都市の碑文中に生起することで、その二つの都市に関係があったことがわかる。たとえばある都市の紋章をもった女性が他都市に現われると、両都市間にその女性を媒介とする、たとえば嫁入りのような関係があったと推測できる。都市間の関係はまだ推測の域をでないものがほとんどであるが、結婚や征服など、都市間の関係を物語る文字はいくつか同定されている。私たちはマヤ文字の研究から、ある程度マヤ社会をとらえることができるようになった。まだこれからの仕事といえるが、ひとつ碑文の研究からわかったことをもとに、七〇〇年前後のマヤ社会をとりだしてみよう。

マヤ社会の中心は、なんとといってもティカルであった。ティカルの王の名には「空」(T56 1)の文字がついてでることが多い。これはおそらくティカルの王家の象徴であろう。この「空」の文字をもった人物は、ヤシュチランやコパンやナランホなどに現われる。「空」の文字とティカルの紋章文字を手がかりに、ティカルとほかの都市との関係をみてみよう。

ティカルでは六八二年にA王が即位した。即位後一一六日目に、王家の女性をナランホへ送っている。彼女はそこに嫁いだのであろう。五年後に、のちに「ひげリス王」となる子を生んでいる。この二人によって、ナランホはこれまでみなかった繁栄を築く。この女性がいかに自分の出身地のティカルを誇り、またティカルといかなる関係をもっていたかは、彼女の名にたえずティカルの紋章がつくことや、9・13・3・0・0という日を共有すること、その日におこった出来事を1カトゥン後にまた記していることなどからうかがうことができる。彼女の名には「空」の文字がついているが、その子「ひげリス王」にも、「空」の文字がついている。おそらく、ティカルの王家につながるためであろう。

ヤシュチランでは、楯ジャガーの治政下である。楯ジャガーの妻の名には、「空」の文字がたえずつく。ティカル王家の象徴と考えられる「空」の文字の存在から、彼女もティカル王家の一員で、ヤシュチランへ嫁いできたと推測できる。次の王鳥ジャガーは、父楯ジャガーの死から即位までの一〇年あまりの闘争に勝利し、即位したと考えられたが、勝利のために、母の出身地であるティカルの援助を必要としたのかもしれない。そうして権力の座についた鳥ジャガーも、ティカルの女性イッシュを嫁にもらっている。ティカルは「空」王家といえることができるが、ヤシュチランはいかなれば「ジャガー」王家である。9・4・0・0・0（五一四年）頃のヤシュチランの碑文にも、ティカルの紋章文字が現われており、その頃より両王家は親戚関係にあったと推

測できる。

ピエドラス・ネグラスでは、第三シリーズの王の治政下である。この王は碑文からみるかぎりでは直接ティカルと関係をもたなかったようだ。しかし、第四シリーズの王は関係があった。彼は七〇一年に生まれ、七二九年に即位している。

ピエドラス・ネグラスのリンテル3は、9・15・8・3・13（七三九年）から9・17・11・6・1（七八二年）までの約四三年間の出来事を扱っている。おもな内容は、第四王の即位1カトゥン記念と、彼の死である。描かれている主題は、おそらく、第四王の死に伴う次の王の即位に関する集まりであろう。中央の台座に坐る人物が、台座の下に坐っている七人の人物になにかを語りかけている。そして台座の両わきに三人ずつ人物が立っている。右の立っている人物の下には一〇の文字がみられる。そのうち最後の四文字は、ティカルのA王の名とその娘を表わす文字（？）である。

右端に立っている人物は、顔の部分が破損していてわからないが、女性であり、その四文字は彼女を表わす文字と思われる。彼女は、おそらくA王の娘で、B王ときょうだいであろう。そして彼女の前に立つ人物は、彼女の子で、のちの第五代の王であろう。碑文からこのように推測できるが、ピエドラス・ネグラスとティカルが強いきずなで結ばれていたことは、ティカルの墓196の分析からも裏づけられている。

パレンケの七〇〇年頃といえ、チャンリールムとホックの時代である。ティカルA王の墓の骨のテキスト、MT 42のAとMT 42のBにパレンケの紋章文字があり、A王はパレンケとも関係があったと思われる。捕虜に関係する文字(図108)がパレンケの紋章文字の前につくことから、パレンケのある人物が、捕虜または人質としてティカルにさしだされたのかもしれない。

9・15・0・0・0(七三二年)には、コパンの石碑Aに、コパン、ティカル、カラクムル(?)、パレンケの四つの都市が記されている。おそらく四つの地方の中心地であろう。この頃になると、弱小都市も勃興してきて、マヤ社会はさらに複雑な様相を呈してくる。

簡単に七〇〇年頃のマヤ社会をティカルを中心にしたわけであるが、まだまだわからないことが多い。マヤの古典期の歴史を碑文の分析から体系的に記述することは、いまの私たちにはまだむずかしい。

王たちはなにを碑文に記したか



図108

現在、大遺跡の王たちがいつ生まれ、いつ即位し、いつ死んだかなどの王朝史の基本がようやくわかった状態である。次はそれらの王たちがなにをしたか、なにを碑文に記したかの追究である。小遺跡の碑文の研究も残された課題である。それらについても徐々に解明されてはいる。しかしテキストでわからない文字はまだたくさんある。

テキストの分析をしたこの六章の最後に、これからの研究はどういうふうに進んでいくべきかを考察してみよう。

これまで述べてきた都市の王朝史は、比較的テキストが多かったから、その大筋はわかるようになった。というのも、歴史的解釈の手法は、似た節をとりだし比較検討したり、むすびつくととの関係を考察することにあつた。テキストがたくさんあるということは、ある日のことがなんども言及されたり、王の名などがなんどもでてくるということだ。それゆえ、それらを比較検討することで、問題にした文字が解読できたり、意味が推測できたのである。

マヤには碑文をもつた都市がほかにたくさんある。しかしその大多数は、テキストの数が少ない。しかもその数少ないテキストも完全なものは少なく、破損していたり、風化していて、読めないものが多い。つまり、判読はできても、ほとんどが一度の生起しかない文字からなるテキストばかりといつてもよい。それゆえ分析がなかなかむずかしいのである。しかし、大遺跡の研究からわかった文字、たとえば、称号や即位や儀式などの一般的なことを表わす文字があれば、それを適用し、また意味はわからないが、なんどもでてくるためなじみとなった文字の分析、適用などを行なっていけば、そのような碑文でも理解は深まっていくであろう。

こういった小遺跡のテキストは整備されておらず、研究しにくい状況にある。大遺跡のテキストでも十分とはいえない。それゆえ研究が十分できるように、テキストの刊行が必要といえる。

そのような要請に応えて、ピーボディ博物館のイアン・グラハムを中心に、写真と手描きを一對にした、すばらしいテキストが刊行されはじめた。一九八〇年までに、ナランホやヤシュチランやシュルトウンなどの遺跡のテキストが、八冊刊行されている。その刊行速度は遅いが、このようなテキストが刊行されているので、刊行とともに、碑文の理解はおおいに進むものと期待される。もっとも、その刊行を待ってばかりはおれない。いままでに刊行されているテキストを十分に活用して研究を進める必要がある。

大都市の碑文は、完全とはいいがたいが、テキストが多く出版されてきたので、研究はおおいに進んだ。そのため、各都市の王朝史はだいぶ理解されるようになった。しかし、大筋がわかった大遺跡でも、テキストを整備する必要があるし、研究すべきことも多い。一九七三年以来、パレンケの円卓会議が三回催されたが、多くの学者が集中的にパレンケの碑文を中心に研究したため、それまでわからなかったことが、たくさんわかるようになった。このような例がある。集中的に取り組むにたえる十分な石碑やリントルをもった都市は、ヤシュチランやコパンなどがある。集中的に研究することで、いままでわからなかったことがわかる可能性は大きい。

とはいうものの、ベルリンやプロスクリアコフによる輝かしい発見以来、今日の状況はいくぶん泥沼におちこんだ感がある。わかった文字といえば、誕生や即位などのごくわずかな文字に限られている。王の名は、本書でふれた六つの遺跡で約五〇ほどである。これらの王は、誕生や即

位のほかになにを記そうとしたのであろうか。私たちには理解できない文字が、碑文にはまだたくさん残っている。それらの私たちにはわからない文字を理解するためには、いったいどうしたらいいのだろうか。

ある都市で生起するわからない文字が、ほかの都市の碑文をみていたら、そこにも生起していることがよくある。総合的な見地から碑文をみることによって、いまはわからない文字がわかるようになる可能性はおおいにある。そうした各都市の碑文を比較した研究は、まだないのである。各都市ごとの研究が一つの壁に達した観がある現在、こうした比較研究こそが、新しい道になるのではなからうか。

比較研究といえば、マヤ文字のもう一つの大きな資料である絵文書を忘れてはならない。本書では、このもう一つの資料ともいえる絵文書にはほとんどふれなかった。というのも、絵文書には歴史的なことが書かれていないからだ。しかしその絵文書も、碑文の理解には欠かすことができない。

絵文書は、一九七一年、ニューヨークのグロリア・クラブで展示された、いわゆるグロリア絵文書をいれると、現在四つある。このうち文字研究に役立つ一番よい資料は、ドレスデン絵文書であり、以下、マドリッド絵文書、パリ絵文書、そしてグロリア絵文書の順となる。扱っている事柄は少しずつ異なるが、基本的には、二六〇日曆にもとづく宗教儀式的占である。金星や月な

どの天文学的なことも記されている。

碑文にも、王朝の歴史ばかりでなく、儀式的なことや天文学的な事柄が記されている。それゆえ、絵文書と碑文の比較研究により、碑文の理解が深まることは疑うべくもない。

絵文書が碑文の研究に役立つ利点がある。それは、文字の読みに関してである。絵文書の書かれた年代は碑文よりはるかに新しいので、私たちのもっている資料（とくに古典ユカテコ語）により近い。つまり、絵文書のほうが碑文より読みやすい。絵文書でわかった読み方を碑文に適用しない手はない。しかし、絵文書と碑文の文字を比較した研究はまだない。だからもちろん、最初にどれくらいの文字が一致するかを知る必要があるが、絵文書の文字に対して提案された読み方を碑文に適用することで、それまでわからなかった文字が読め、意味がわかるようになる可能性はおおいにある。

小都市の碑文の研究

大都市の碑文のさらなる研究

碑文の総合的比較研究

絵文書と碑文の比較研究

ざっとこういう課題を述べた。これらはいかなれば文字についての研究である。マヤ文字を解くためには、マヤ文字に精通する必要があるが、文字をみておればいいというものではない。そ

のほかの知識がなければならぬ。たとえば、文字のもととなったマヤ諸語の知識である。これの十分な知識がなければ、とても解読などできるはずがない。

マヤ文字を理解しようとすれば、マヤ文明全体を知っておく必要もある。マヤ文字はマヤ文明の一つの側面にすぎないからだ。マヤ文明を知るには、考古学から、民族学から、言語学からといったように、いろいろな角度から研究しなければならない。そうしたいいろいろな面からみたマヤ文明の知識が必要である。

マヤ文明は、メソアメリカという文化領域のほぼ東の端といってもよい地域にある。マヤ文明は、メソアメリカのいろいろな文明の影響を受けつつ発達した文明である。前に、文字Gの解読にメキシコ高原のアステカの知識が必要であったことを述べたことでもわかるように、マヤ文明のみならず、そのほかのメソアメリカ諸文明の広汎な知識も必要である。

ただマヤ文字の解読といっても、マヤ文字にまつわるいろいろな知識がなければならぬ。そういう広い知識の上にたつてこそ、正しい解読ができるのではなからうか。

研究の手引

Maudslay, Alfred P.

Biologia Centrali-Americana: Archaeology, (1 vol. text, 4 vols. plates), R. H. Porter and Dulau & Co., London, (Reprint 1974: Milpatron Publishing Corp., distributed by Arte Primitivo Inc., New York), 1889-1902

Morley, Sylvanus G.

The Inscriptions at Copan, Carnegie Institution of Washington, Pub. 219, Washington, D. C., 1920

The Inscriptions of Peten, Carnegie Institution of Washington, Pub. 437, 5 Vols., Washington, D. C., 1937-1938

Villacorta, Antonio J. and Carlos A. Villacorta

Códices Mayas, La Tipografía Nacional, Guatemala, 1930

Ⅲ マヤ文字のカタログ

Thompson, J. Eric S.

A Catalog of Maya Hieroglyphs, University of Oklahoma Press, Norman, 1962

Zimmermann, Günter

Die Hieroglyphen der Maya-Handschriften, Universität Hamburg, Abhandlungen aus dem Gebiet der Auslandskunde 62, Hamburg, 1956

Ⅳ マヤ文明に関する論文がよくのる雑誌

American Anthropologist

American Antiquity

Archaeology

Estudios de Cultura Maya, Universidad Nacional Autónoma de México, Centro de Estudios Mayas, México

Expedition

International Journal of American Linguistics

Journal of Anthropological Research

I マヤ文字資料

Anders, Ferdinand (ed.)

Codex Tro-Cortesianus, Akademische Druck- u. Verlagsanstalt, Graz, Austria, 1967

Codex Peresianus, Akademische Druck- u. Verlagsanstalt, Graz, Austria, 1968

Codex Dresdensis, Akademische Druck- u. Verlagsanstalt, Graz, Austria, 1975

Graham, Ian

Archaeological Exploration in El Peten, Guatemala, Middle American Research Institute, Tulane University, Pub. 33, New Orleans, 1967

Graham, Ian, et al.

Corpus of Maya Hieroglyphic Inscriptions, Peabody Museum of Archaeology and Ethnology, Harvard University, Cambridge, 1975~

Greene Robertson, Merle, Robert L. Land, and John A. Graham
Maya Sculpture from the Southern Lowlands, the Highlands and Pacific Piedmont : Guatemala, Mexico, Honduras, Lederer, Street and Zeus, Berkeley, 1972

Maler, Teobert

Researches in the Central Portion of the Usumatsintla Valley : Report of Explorations for the Museum, 1898-1900, Memoirs of the Peabody Museum of American Archaeology and Ethnology, Harvard University, Vol. II, Nos. 1-2, Cambridge, 1901-1903

Explorations of the Upper Usumatsintla and Adjacent Region, Memoirs of the Peabody Museum of American Archaeology and Ethnology, Harvard University, Vol. IV, No. 1, Cambridge, 1908

Explorations in the Department of Peten, Guatemala, and Adjacent Region, Memoirs of the Peabody Museum of American Archaeology and Ethnology, Harvard University, Vol. IV, Nos. 2-3, Cambridge, 1908-1910

Guatemala ; *American Antiquity* 27 : 323-335, 1962
Deciphering the Maya Script, University of Texas Press,
Austin, 1976

Knorozov, Y. V.

Selected Chapters from the Writing of the Maya Indians,
Russian Translation Series of the Peabody Museum of
Archaeology and Ethnology, Harvard University, Vol. IV,
Cambridge, 1967

Иероглифические Рукописи Майя, Ленинград, 1975

Marcus, Joyce

*Emblem and State in the Classic Maya Lowlands: An
Epigraphic Approach to Territorial Organization*, Dum-
barton Oaks, Washington, D. C., 1976

The Origins of Mesoamerican Writing ; *Annual Review of
Anthropology* 5 : 35-67, 1976

Morley, Sylvanus G.

An Introduction to the Study of the Maya Hieroglyphs,
(Reprint 1975 : Dover Publications Inc., New York), 1915

Proskouriakoff, Tatiana

Historical Implications of a Pattern of Dates at Piedras
Negras, Guatemala ; *American Antiquity* 25 : 454-475, 1960

Historical Data in the Inscriptions of Yaxchilan, Part I ;
Estudios de Cultura Maya 3 : 149-167, 1963

Historical Data in the Inscriptions of Yaxchilan, Part II ;
Estudios de Cultura Maya 4 : 177-201, 1964

Thompson, J. Eric S.

Maya Hieroglyphic Writing: An Introduction, 3rd ed.,
University of Oklahoma Press, Norman, 1971

*A Commentary on the Dresden Codex: A Maya Hierogly-
phic Book*, Memoirs of the American Philosophical Society,
Vol. 93, 1972

Maya Hieroglyphs without Tears, The Trustees of the
British Museum, London, 1972

研究の手引

I マヤ文字研究の基本書

Barrera Vásquez, Alfredo (ed.)

Diccionario Maya Cordemex, Ediciones Cordemex, México, 1980

Berlin, Heinrich

El glifo “emblema” en las inscripciones mayas ; *Journal de la Société des Américanistes*, n.s. tome XLVII : 111-119, 1958

Signos y significados en las inscripciones mayas, Instituto Nacional del Patrimonio Cultural de Guatemala, Guatemala, 1977

Coe, Michael D.

The Maya Scribe and His World, The Grolier Club, New York, 1973

Early Steps in the Evolution of Maya Writing ; *Origins of Religious Art and Iconography in Pre-Classical Mesoamerica*, (Henry B. Nicholson, ed.), pp. 107-122, Latin American Center, U. C. L. A., 1976

Coggins, Clemency Chase

Painting and Drawing Styles at Tikal : An Historical and Iconographic Reconstruction ; *Doctoral Dissertation, Harvard University, 1975*, University Microfilm, Ann Arbor, 1976

Jones, Christopher

Inauguration Dates of Three Late Classic Rulers of Tikal, Guatemala ; *American Antiquity* 42 : 28-60, 1977

Kelley, David H.

A History of the Decipherment of Maya Script ; *Anthropological Linguistics* 4 : 1-48, 1962

Glyphic Evidence for a Dynastic Sequence at Quirigua,

あとかぎ

マヤ文字はもはや神秘の文字ではない。解読不可能の文字でもない。しかし、マヤ文字はいまだに解読されたとはいえない文字である。碑文の内容はだいぶわかるようになったものの、実際に解読された文字は、ほんの少ししかない。残された文字は多い。そのなかには、王朝史にまつわる出来事のほかに、宗教的内容や天文学的内容を記した文字も含まれている。そういうもののほとんどはよくわかっていないし、ここではいっさいふれなかった。また絵文書や土器の文字もほとんど扱わなかった。それは、マヤ文明の歴史を文字から書いてみたかった理由のほかに、それらの主題である宗教、儀式的なことを理解するには、神々の体系や儀式、ことばの秘義的な用法の研究など、歴史を扱うのとはかなり違ったアプローチが必要だからであった。またそうした内容は、証明がむずかしいことも理由の一つであった。この書でふれなかったものは、文字に關してだけでもたくさんある。

マヤ遺跡を訪れると、ガイドブックを手に遺跡をみる人によく出会った。私は本書を、マヤ文字の基礎から一つ一つ積みあげていって、最後には碑文の主要内容である王朝の歴史がテキストの

分析から得られるようにと願って書いたのであるが、マヤ文字の入門書的な役割が果たせたら、という願いもあった。本書でふれなかった文字はたくさんあるのだが、本書を手に碑文をながめてみたいと思う人が一人でもでてくるとすれば、なんという幸せであろうといま夢みている。

マヤ文明の研究は、この一〇年あまりのあいだに急速に進みはじめた。新しい発見もあった。つい最近、ペテン中心部のポロルでバクトゥン7を刻む祭壇がみつかったと報じられたが、これなど、もし事実なら、従来のマヤ文字の起源に関する説を大幅に変えなければならぬ発見である。旧来の説の大幅な変更が行なわれ、新しい知見がたくさん得られ、日に日にマヤ文明観は変わっている。本書のなかでもとくに六章などは、この数年のうちに大幅に書きかえねばならなくなるにちがいない。

マヤ文字資料の散逸は激しく、日本にもたくさんマヤ土器や石彫がはいつてきているという。ところがその所在さえつかめない。マヤ文字の解説がむずかしい原因の一つは、マヤ文字資料が限られていることである。研究者は、一つでも多くの資料を共有し、利用したいという願いをもっている。私としては、せめて日本に流入した資料だけでも把握しておかねばならないと思っている。

この書を手にとって下さった方のなかには、そうした資料やマヤ文明に関する情報をおもちの方があられるであろう。ぜひ日本におけるマヤ文字資料集の作成にご協力を願いたい。

連絡先 千565 吹田市千里万博公園10-1

国立民族学博物館内

八杉佳穂

この本が生まれるきっかけを作って下さったのは、東京大学教授の増田義郎先生である。先生には原稿段階でもご指導いただいた。心からお礼申し上げます。

また、中央公論社の永倉あい子、村山文子両氏には、本が仕上がるまでの長いあいだお世話になった。厚くお礼申し上げます。

一九八二年二月

著者

八杉佳穂 (やすぎ・よしほ)

1950年、広島県に生まれる。1972年、京都大学工学部卒業。1975年、京都大学文学部卒業。1980年より国立民族学博物館助手。専攻、マヤ学。

論文「マヤ文字研究 I」

「マヤ諸語の動詞核の比較研究」など。

マヤ文字を解く

中公新書 644

© 1982年

検印廃止

昭和57年3月15日印刷

昭和57年3月25日発行

著者 八杉佳穂

発行者 高梨 茂

本文印刷 三晃印刷

表紙印刷 トープロ

製 本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋2-8-7

振替東京2-34

定価 500円

マヤ文字を解く

中公新書 644